

**HIGH SCHOOL**  
**MODEL UNITED NATIONS**  
**GUIDEBOOK**

**for Students & Teachers**

**中高生 & 教員のための模擬国連ガイドブック**

第1版

作成：2017年7月12日  
(修正：2017年12月15日)



**Max Classroom.net**

**関 孝平**



～ Charter of United Nations ～

**Preamble**

We the Peoples of the United Nations determined  
to save succeeding generations from the scourge of war, which twice in our lifetime has  
brought untold sorrow to mankind, and  
to reaffirm faith in fundamental human rights, in the dignity and worth of the human person,  
in the equal rights of men and women and of nations large and small, and  
to establish conditions under which justice and respect for the obligations arising from  
treaties and other sources of international law can be maintained, and  
to promote social progress and better standards of life in larger freedom,

And for these ends

- to practice tolerance and live together in peace with one another as good neighbours, and to  
unite our strength to maintain international peace and security, and
- to ensure, by the acceptance of principles and the institution of methods, that armed force  
shall not be used, save in the common interest, and
- to employ international machinery for the promotion of the economic and social  
advancement of all peoples,

～ 国連憲章 ～

**序**

われら連合国の人民は、

われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救  
い、

基本的人権と人間の尊厳及び価値と男女及び大小各国の同権とに関する信念をあらためて確認し、  
正義と条約その他の国際法の源泉から生ずる義務の尊重とを維持することができる条件を確立し、  
一層大きな自由の中で社会的進歩と生活水準の向上とを促進すること

並びに、このために、

寛容を実行し、且つ、善良な隣人として互いに平和に生活し、

国際の平和及び安全を維持するためにわれらの力を合わせ、

共同の利益の場合を除く外は武力を用いないことを原則の受諾と方法の設定によって確保し、

すべての人民の経済的及び社会的発達を促進するために国際機構を用いることを決意して、これ  
らの目的を達成するために、われらの努力を結集することに決定した。

## はじめに

全日本高校模擬国連大会が始まって11年、今では大会のみならず教育プログラムとして模擬国連が全国に広まっていきました。私自身も会議を主催することがありますが年々参加を希望する学校が増えてきており、その関心が高まっていることを肌で感じています。一方で、すそ野が広がった分、参加者の意識やレベルにバラツキがより幅広く出てくるようになり、全体の質をどのように担保するのかという課題も出てきました。そして、教員の中にも「模擬国連が詳しく知らない、どう指導してよいのかわからない」という本音がありますよね。

そんなとき、ある会議で多くの参加者が大使としての意識、責任を持って行動できていない様子を目にしました。「これでは模擬国連が成立しない。このままでは模擬国連はニーズが増えるとともにクオリティが保てずにパンクするのではないか」という危機感を持ちました。これからも模擬国連がより多くの生徒に意味あるものとして続いていくためには、全ての生徒と教員が責任を持って参加できるような土壌を作らなくてはいけない、と思ったのです。そして、自分には何ができるのか。そう思い、その翌日から本冊子の執筆に取りかかりました。

偉そうに言っていますが、そういう私自身も最初は何も分かりませんでした。私の前任校・実践女子は2011年から2014年まで4年連続全日本大会で優秀賞（2014年は最優秀賞）を取り、ニューヨーク大会に日本代表団として派遣されていた学校です。これは奥井先生という教員の手腕に100%よるものでした。私もグローバル教育部長として関わる場面もありましたが、模擬国連についてはほぼ素人、よく言っても「修行の身」でした。そんな中、2015年に諸事情で学校を移ることになり、今の勤務校で模擬国連を担当することになりました。プレッシャーや不安もありましたが、前任校で生徒の頑張り、活躍を間近で見ていた1人として、模擬国連に関われることは自分にとってチャンスであり、わくわくする思いでした。

それから2年、いろいろな苦労もありましたが、今では本校で会議を開催するまでになり、また大会で賞をいただく生徒も出てきました。全く持って私一人の力量ではありません。ここに至るまで本当に多くの方に助けられ、教えてもらいました。本当に甘えっきりです。前述の奥井先生はもちろんのこと、他にも渋谷教育学園幕張の齋藤先生、渋谷教育学園渋谷の室崎先生には多大なお力添えをいただきました。みなさんのお力なしでは私が今のように模擬国連に関っていることはありませんでしたし、このガイドブックも存在することもなかったでしょう。

模擬国連は本当に秀逸な教育プログラムであり、これからも間違いなく広がっていくでしょう。もっと多くの人にこの素晴らしさを知ってほしいし、参加してほしい、そう願っています。そして、私がこれまでにいただいた数多くのお力添えを一人でも多くの先生方、生徒の皆さんにつなぎ、水先案内人程度の貢献ができれば幸いです。これからも模擬国連を通して、多くの方と出会い、教育を作っていけることを楽しみにしております。

2017年7月

関 孝平

## 本冊子の利用について

### 利用と著作権について

この冊子は、グローバルクラスルーム、日本模擬国連の先行資料、そして何よりも多くの先生方の指導例や取り組み、ご助言があって成り立っているものです。したがって本冊子は私一人に帰属するものではなく、模擬国連に関わる全ての先生方、生徒に帰属すべきものだと考えています。本冊子の目的は、模擬国連やそれに関連する様々な教育のアイデアを皆さんと共有すること以外にございません。ですので、営利目的の利用を除き、印刷、配布、共有、ガイダンスでの使用などご自由にお使いください（私に許諾を求める必要もございません）。

あわせて、本冊子は私の運営するウェブサイト『Max Classroom.net』に常にPDFで公開しておりますので、そちらも自由にご参照、ダウンロードしていただければと思います（模擬国連のプラカードやネームカードの素材を公開しておりますし、模擬国連以外のことも多く掲載しておりますので、参照していただければ幸いです）。もし模擬国連の指導やその他のプログラムに関わる方で本冊子にご関心がある方がいましたら、ご案内いただき、共有していただければと思います。本冊子が皆さんのつながりに少しでも寄与できるのであれば幸いです。

ただし、不正利用の防止のため、著作権は放棄せず、私の方で保持させていただきます。転載や二次利用される場合は、引用元を明示の上、お使いいただきますよう、ご協力お願いいたします。

### 今後について

この冊子をベースに他の先生方や生徒にご協力いただき、より良いものを作っていければと思っています。また皆さんのお力をお借りすることもあるかと思いますが、よろしく願い足します。

### その他

私個人で作成したものですので、誤字脱字、不自然な表現などが散在しているかと思えます。また、説明や解釈で一部不正確なものもあるかもしれませんが、本冊子の趣旨と目的をご理解していただき、ご容赦いただければ幸いです。

## TABLE of CONTENTS

	はじめに	4
Chapter 1	模擬国連とは	7
Chapter 2	模擬国連に参加するにあたって	16
Chapter 3	Draft Resolution	24
Chapter 4	会議	40
Chapter 5	スピーチ	55
Chapter 6	プロシージャール	62
Chapter 7	投票	73
Chapter 8	課題解決	79
Chapter 9	コミュニケーションと交渉	93
Chapter 10	リサーチと政策立案	106
Chapter 11	会議シミュレーション	116
	Reference	133

### ～ Column ～

Column 1	模擬国連のすそ野を広げ、機会の窓を開放したい	23
Column 2	世界平和を目指した「純」な思い	54
Column 3	国連の成り立ちを知ろう	72
Column 4	国連に託された平和の願いに触れて	92
Column 5	国連の存在意義	115

## CHAPTER 1 模擬国連とは

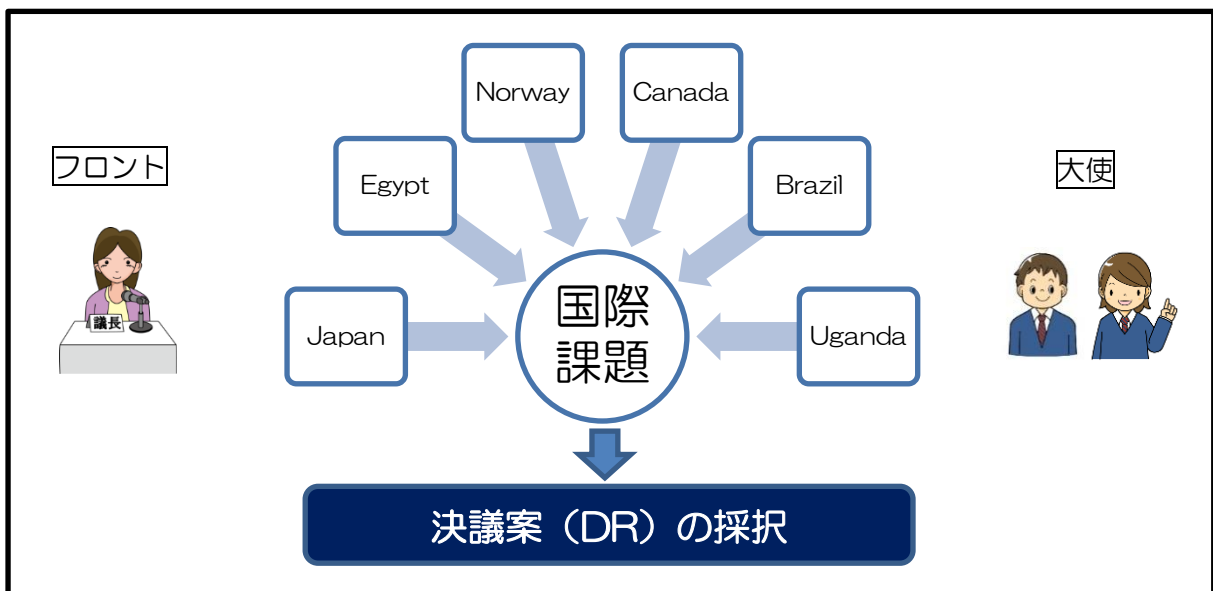
### 1-1 模擬国連とは

模擬国連とは言葉通り「国連を模擬する」ということです。簡単に言えば生徒たちが「国連会議を真似る」という取り組みです。生徒たちがその会議の参加者たち、つまり各国の大使や議長になって、実際の国連と同じ会議方式と流れで、国際課題を議論し、解決案を出していくのです。まさに「生徒による国連会議」です。

もう少し具体的な説明をすると、2人1組のペアで（ペアでなくてもできますが、原則はペアです）国連の会議に参加します。そして、アルゼンチン大使、ブルガリア大使、ルワンダ大使、といった形で、色々な国連加盟国や組織が各ペアに割り当てられます。英語で言うと The delegate of Argentina といったような感じで、響きも格好良くなります。

つまり、模擬国連会議は、実際の国連会議と同じ状況を想定しながら、ある国際課題について、その国を代表する大使の立場として議論をし、他の国と調整しながら国連決議案を作っていくという活動です。

もちろん大使の立場なので各国の利益は大切です。例えば、核を持っている国は「核全廃しましょう」なんて言ってしまったら自分たちの立場がありません。では、かと言って、「各国の利益だけ主張していれば良いのか」と言うそうではありません。核を持っている国も、被爆国も内戦で苦しんでいる国も、それぞれの立場から「核軍縮」をするという共通テーマに対して試行錯誤し、交渉していくのです。それを実際の国連会議同様のプロセス、手続きに沿って議論・交渉、決議案の作成、投票、採択と進めていくのです。



## 基礎知識： フロントとは

模擬国連には、各国を代表する大使と会議運営をする事務局という2種類の参加者がいます。この事務局は、会議で前に座って議事進行することから「フロント」と呼ばれ、会議監督、議長、秘書官を中心に構成されます（フロントはどここの国にも属さず、国連事務局の役目を果たします）。模擬国連においては、議題の決定、BG（議題解説書）の作成、国割り（どのペアがどの国になるのかの割り振り）、会議当日の運営や確認まで、会議の中軸となります。フロントには一定程度の会議経験やプロシージャー（会議の運営ルール）の熟知が求められ、模擬国連のブレインであり、憧れの存在です。

- 会議監督（Director）：

企画から運営まで全ての中核になります。会議当日は議長にマイクを譲り控えめな存在に見えますが、全体の監督に加え、決議案をチェックするなど大役を担っています。各国大使の思惑がひしめく模擬国連にあって、その場の判断や指示を迫られることも多く、まさに会議の要です。

- 議長（Chair）：

議場をまとめる司会進行を行います。プロシージャーを熟知し、議場を整理する役目を担っています。議長が上手いと議場がしまります。

- 秘書官（Secretary）：

会議監督、議長の補佐として、DR チェックや議事録の作成などを行います。

- アドミニ（Administration Staff）

メモ回しやDR 配布などの雑務を行う係です。



## 会議設定

模擬国連は国連の様々な会議を想定して行われます。もっとも一般的なのが国連総会です。193 か国が総会議場に一堂に集まる全大会です。

総会には、さらにテーマによって6つの主要委員会に分かれています。会議設定で第1委員会とか第2委員会といったような設定がされている場合が多くありますが、それは議題に合わせて委員会設定がされていることを意味します。模擬国連では話しやすい議題が多い第1～3の委員会が設定されることが多いです。

他にも、議題に合わせて、安全保障理事会（安保理）や関連機関（UNESCO や WHO など）、サミット、ワーキンググループ（作業部会）、各種フォーラムの設定でも行われます。このように、国連の組織図内で行われるものは全て模擬国連の会議設定の対象になります。これらの会議設定を知らなくても動き方に関係はありませんが、自分がどの会議で、どの設定のもと大使をしているのか知っておくことは勉強になります。

## 議題

議題は Agenda Item と言われ、その会議のテーマとなるものです。国連では、国際社会や人類が直面するありとあらゆる議題について議論がされます。そのため、議題の数や種類も膨大で、実際の国連総会でも毎年160を超える議題が採択されています。模擬国連でも多様多様な議題を扱います。定番で言えば、「安保理改革」「児童労働」「核軍縮」などがあります。会議の冒頭に議題の採択（議題を決める）という手続きがありますが、もちろん模擬国連の場合はあくまでも形式上のことで、実際は最初に議題が決められていて、本番までに参加者はその議題についてリサーチをしていることが前提です。

国連の主要委員会と議題の例

設定会議	担当分野	議題の例
総会本会議		安保理改革、気候変動
第1委員会	軍縮、安全保障	核軍縮、安全保障、地雷除去
第2委員会	経済、金融	開発融資、国際経済協力、環境問題、エネルギー —安全保障、違法貿易、移民、水供給と衛生
第3委員会	人権、人道、 文化問題	人権の保護・促進、女性の地位向上、児童労働、 先住民族の権利、クローン、国際麻薬
第4委員会	特別政治問題	PKO、パレスチナ問題、宇宙空間の平和利用
第5委員会	行政、予算	国連経費の分担率、予算、PKO 財政
第6委員会	法律	国際法、国際テロリズムの廃絶、
安全保障理事会	武力紛争、制裁、和平問題	
専門機関	食糧安全保障（FAO）、危機遺産の保護（UNESCO）	

#### 全日本高校生模擬国連のこれまでの議題

大会		議題
第1回	2007年	気候変動
第2回	2008年	武力紛争下の子ども — 子ども兵に関する問題
第3回	2009年	地雷問題の解決に向けた包括的対策
第4回	2010年	安全保障理事会の議会席拡大と衡平配分および関連事項 (安保理改革)
第5回	2011年	エネルギー安全保障
第6回	2012年	核軍縮
第7回	2013年	児童労働
第8回	2014年	食糧安全保障
第9回	2015年	国際移住と開発
第10回	2016年	国際安全保障の文脈における情報及び電気通信分野の進歩 (サイバー空間)

#### 取り組みやすい議題の条件

① 論点と対立軸がはっきりしていること。

何について話し合い、どこで国益がぶつかるのか明確であれば、政策も立てやすく、議論が活発になります。

② 全ての参加国が自国の問題として話し合うことができること。

平和問題、食糧、エネルギー、水資源、環境保全のように、どの国も「白国の課題」としてとらえることができる議題であれば、国益も政策も分かりやすくなります。

③ 宗教と関連性が薄い問題

あらゆる国際課題のベースには文化、そして宗教があり、それらは完全には切り離せませんが、特に AIDS、女性の地位の問題、LGBT など、宗教的な側面が深く関連する議題は、精神、信条の問題になってしまい、それがハードルになって交渉が進まないことがあります。もちろん、これらも避けずに取り組む課題ではありますが、多少扱いづらいかもかもしれません（私の指導している生徒の中には宗教が絡む議題が一番やりづらいと言っている生徒もいます）。一方、気候変動や核、食糧、エネルギーなどは宗教との関連性が比較的薄いと言えます。

#### 議題の分析

ここでは、定番と言われるいくつかの議題について説明をします。いずれにしても、全日本大

会の議題解説書（BG）が使えることが前提です。私自身は指導する教員側であり、大使として実際に参加したわけではありませんので、あくまでも独断と偏見です。参加経験のある生徒は異なることを言うかもしれませんが、あしからず。

### **安保理改革**

安全保障理事会をどう改革していくのかということですが、国際課題の深い理解を求められるものではなく、単純に「国際社会における自国の権力を高める」「時代と社会情勢に即した安保理を作っていく」という観点からどのような安保理が良いのか議論していけば良いのです。各国の権力やパワーバランスについての議論なので、国益や思惑がモロに出て、対立軸もはっきりしていて分かりやすい議題です。論点も①理事国の数と選出方法、②拒否権、③安保理の意思決定における透明性という 3 点に絞られます。さらに、P5（常任理事国）、G4（日本、ドイツ、ブラジル、インド）、コンセンサスグループ（＝コーヒークラブ）、AFU、S5 など、あらかじめグループ構成も想定できます。この議題では、力を持っているはずの常任理事国のほうがマイノリティーであり、「改革を迫られる側」に立つので立ち振る舞いが難しく、その他の国は比較的行動すべき点分かりやすいのも特徴です。また、実際の安保理改革は議論されているものの、実質的には遅々として進んでおらず、非常任理事国のメンバー交代が起きている以外は、大きく過去の BG がずれていることはありません。合わせて、安保理は国連創設当初からの主要機関であり、国連の歴史や使命、意義や課題を理解するのに最適の議題です。

### **核軍縮**

渋谷教育学園幕張の齋藤先生いわく、「経済が絡むと難しくなってしまうので、核軍縮のように平和を純粹考えられるものがやりやすい」ということです。おっしゃる通り、「核の脅威がない世界を実現していこう」というゴール設定が分かりやすく、取り組みやすいと言えます。論点も①核軍縮（核の数を減らす）、②核不拡散（核を持つ国を増やさない）、③原子力の平和利用という 3 点となり、その下で NPT（核不拡散条約）や CTBT（包括的核実験禁上条約）、非核地帯、IAEA による保障措置の在り方などを議論していきます。対立軸は表面的には核の保有国と非保有国に分かれますが、そこに「アメリカの核の傘」に入っている国や本当は開発したい国など、色々な思惑が入ってきます。日本も被爆国でありながら、安全保障上、核廃絶に積極的になれない微妙な立場にあります。米口の 2 大保有国の間には軍事的対立関係がありながらも核保有国としての共通の利害も存在しています。グループ分けは、保有国、非保有国、新アジェンダ、NAM、NAC と比較的はっきりしてはいますが、そこに米英仏と中ロ、そしてインド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮という新興保有国が絡む安全保障の対立軸があり、水面下では複数の対立軸が存在します。特に、昨今の北朝鮮、そしてそれに対抗するアメリカ・トランプ政権を中心に核を巡る社会情勢がめまぐるしく変わり、ホットな話題である分、2012 年の全日大会の BG を補足するリサーチが必要になってきます。

## エネルギー安全保障

人口増加、経済発展による需要が急騰し、一方、化石燃料の枯渇が危惧される中で、エネルギーを安定供給できるシステムを作ろうということがテーマになります。安定供給という言葉には「適正かつ安定した価格」で「十分かつ安定な量」を供給、分配し続ける持続可能なシステムを構築するという意味が含まれます。論点は①価格の安定、②量の確保と分配が主ですが、その中で、③技術革新、④消費行動と意識の変化、⑤経済と産業の保護ということも焦点になります。また、原子力のリスクや再生可能エネルギーが話題にされる中で、地球温暖化まで幅広く議論すると複雑になりすぎですが、環境面も考えながら議論することになります。どこの国もエネルギーは経済発展のための重要テーマであり、国家課題です。現状は原油が最大のエネルギー資源であり、産油国、国際石油会社を保有する企業、産業大国、輸入国というグループ対立になります。実際は、シェールガスやメタンハイドレード、ハイオ燃料、クリーンエネルギーなど、旧来とは異なる資源の利用も取りだたされる中で、それ以外の対立構造も複雑に表れてきますが、議論の方向性を定めるために、石油以外の資源がアウトオブアジェンダ（論点外）に指定されることもあります。食料と異なり、個人の消費志向に直結する部分が少なく、国としての政策を議論しやすい課題でもあります。

## 気候変動

第1回全日本大会の議題にもなったテーマで、主に温暖化対策に向けた二酸化炭素排出削減を主眼とした会議になります。温暖化は世界共通の課題であり、生態系の変化や海面上昇、砂漠化は農業、漁業、林業といった産業のみならず、生活や生命にも影響を及ぼすものです。二酸化炭素排出が産業の発展やエネルギー消費と関連が強いことから、これまでその恩恵を享受し、二酸化炭素を大量排出してきた先進国とそれを追いかけていた途上国の間で大きな対立軸が生まれます。その中で、①責任と目標を明らかにし、②技術共有、資金支援をしながら、持続可能な開発ができるのか、という点が議論の焦点になります。いわゆる定番議題ですが、第1回全日大会の2007年から10年がたっており、その間に行われた会議、取り組みも多くあるため、BGの補足が必要になります。特に2017年、アメリカ・トランプ大統領がパリ協定からの脱退を表明してから世界のダイナミズムが変わってしまい、新たな局面を迎えたと言えます。

模擬国連の会議ゴールは、ずばり「国連としての決議を出すこと」です。諸々の課題に対して「どのように取り組んでいくのか、どのように協調していくのか」という国際社会の意思表示をすることにあるのです。この決議こそ国連会議の成果物であり、そのために交渉、協働をしているのです。

この国連決議には法的拘束力がありませんが、国連という場で採択された以上、当然大きな影響力を持ちます。実際にはソフトロー（Soft Law）と呼ばれ、国際規範として機能します。もちろん拘束力や罰則がないからといって簡単に反故にすることもできず、逸脱する行為は国際社会の非難的になってしまいます。したがって、各国の大使は自分たちが従えないような決議や自国にとって不都合な決議を通すわけにはいきません。国民の代表として自国の利益を守る責任があるのです。その観点から、各大使にとっての会議ゴールは「自国の主張が反映された決議案を通す」ということになります。

## 2つのステップ

このゴールを達成するためには、①決議案を作成すること、そして②その決議案を全体で承認してもらう、という2つのステップが必要になります。この2つのステップをしっかりと理解しておく、大使たちが会議で何をしようとしているのか分かるようになります。では、具体的に見ていきましょう。

### STEP 1： 決議案（DR）を提出する

決議案が採択されるには、当然ですが、そもそも決議案を提出しなくてはなりません。この決議案を DR（Draft Resolution）と言います。ただし、DR は 1 か国だけでは提出することはできない、というのがミソです。

会議細則もしくは会議冒頭に「DR 提出に必要なスポンサー国は〇カ国です」といったように条件が言い渡されます。スポンサーの数は、理論上 DR が 3~4 つぐらいでおさまる数になっているのが一般的です。50 チームぐらいの参加であれば、12 か国程度というのが相場でしょうか。これだと、DR 兼任をしない（1 つの国が複数の DR のスポンサーになれない）という原則を守れば、多くても DR は 4 つまでしか提出されなはずです。

### STEP 2： DR が採択される

DR を提出したところでホッとしてはいけません（多くの初級者はここで終わってしまうのですが）。最終ゴールはこの DR が採択されることです。つまり、投票の段階で少なくとも過半数の賛成を取り付けなくてはならないのです。良い DR が作成できたとしても、そしてその中に自分たちの主張が十分に組み入れられたとしても、採択されなければ廃案です。国際社会に自分たちのメッセージは届かず、なかったのと同じです。

STEP1の段階では、DRグループはまだ小さく、このままでは過半数に届きません。ですから、DRを提出した後、より大きなグループ形成を目指していき、スポンサー国の数が増えるように努力していきます。他のDRグループと交渉し、共通点、妥協点を見つけて、1つのDRにくっつけてみようかと試みます。他のDRとくっつけられれば、そのスポンサーだった国の賛成票も入るので、過半数により近づくわけです。例えDRが1つにくっつけられなくても、投票の際に賛成票を投じてもらえるように、交渉を最後まで続けていきます。

さらに、過半数を超えても、そこで終わりではありません。決議案の採択だけを考えると過半数で十分ですが、課題解決のためには国際社会全体で、1か国も欠けることなく取り組むことが理想です。最後は全ての国で1つのDRにまとめて、コンセンサス（満場一致の採択）を目指していくのです。

この2つのステップこそが模擬国連のグループダイナミズムを生み出す仕組みです。模擬国連では、各国の大使が会場をところ狭しと動き回り、時に揉め、時に紛糾しながらも交渉を進め、グループを形成して決議案を作っています。「揉めるぐらいなら、いっそ他国と決別して、自分たちだけで決議案を作成すればいいのに」と思うかもしれませんが、そうはいきません。好き勝手に自分たちの主張を組み込み、一匹狼として行動するというのでは会議からあぶれてしまうのです。どんなに良いDRを準備してきたとしても、スポンサー国が集められなければDRを出せません。DRを出せなければ、自分たちの主張もへったくれもありません。他のDRが採択されるだけで、自分たちの反抗の跡すら残らないのです。それどころか、自国に都合の悪いDRが採択されてしまったら、その不都合な枠に自国は組み込まれてしまうのです。ですから、妥協をしつつも利害を共にする他国と協力してDR勢力を作り、その声を届かせておかななくてはなりません。だから、必然的に他国と討議、交渉、協働をせざるを得ないわけです。

このように、模擬国連は、必然的にグループダイナミズムが発生する仕組みになっています。立場が違うのに一緒に動かないといけない。そして、自分の利益を通すためには、過半数の国の利益も守らないといけないのです。



## 1-4 大使のミッション

模擬国連の参加大使は2つのミッションを背負っています。1つは、その国の大使として自国の利益を守るということです。そして、2つ目は、国際社会の一員として、「世界平和、より良い未来を築きあげていく」ということです。模擬国連に参加するにあたって、私がまず参加者に求めるのはこの2つのミッションをしっかりと意識することです。

例えば「核軍縮」において、保有国が「核を放棄するべきだ」と言って、国力を落とすわけにはいきません。一方で、核を持っている国も、被爆国も、内戦で苦しんでいる国も、それぞれの立場から「核のない世界」という共通ゴールに対して試行錯誤し、交渉していく責任を負っています。自国の利益だけで動くのではなく、より良い未来はどうやったら作れるだろう、という究極の問いを参加者のみんなと立場を超えて考えていかななくてはいけないのです。

私は生徒に「大使としての責任と自覚を持って行動できているか」ということを常に問います。大使は国の代表です。大使の後ろには、何百万、何千万、場合によっては億単位の国民がいるわけです。会議の結果はどうあれ、その国民に恥じない行動ができたか、胸を張って国に帰れるのか、ということです。

なかなか会議だと自国の国民の姿、生活の様子をイメージする気になりませんが、本当は、その国は自分の生まれ故郷であり、自分の思い出があり、家族や友人がいる場所なんですよ。大使はその故郷のため、そして国民のために会議に参加している、そんなイメージを持つと大使としての責任を双肩で感じることはできるのではないのでしょうか。

練習会の講評で、ある学校の顧問が「服装から正せ」と全体に注意をしてくれました。「皆さんは国の代表として、国際会議に参加しているんです、その代表として恥じない服装をしていますか」と。まさにその通りです。練習会だと、だれてしまったり、床に座っていたり、私語をしながら会議に参加していなかったりと、残念ながら、大使としての振る舞いに問題がある生徒が目につきます。私が大使の質を判断するのは、内容云々、結果云々の前に、まずは「この大使の国の国民になりたいと思えるか」という基本姿勢です。そして、生徒に聞くのは「この会議が自国でテレビ中継された時、自分の背中を国民に見せられるのか」ということです。

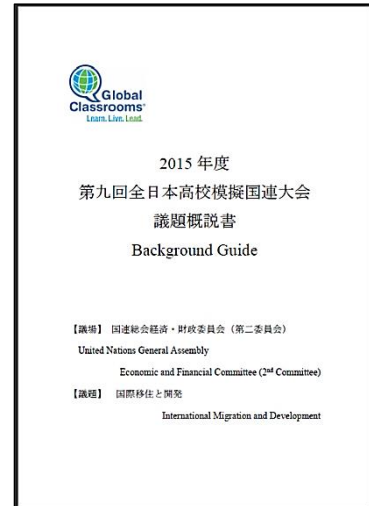
さらに、模擬国連の事後反省で「圧倒されて発言できなかった」「リサーチ不足だった」「積極的に参加できなかった」「なんとなくDRにサインしてしまった」などといったことを多く聞きます。初参加者であれば、誰もが通る道です。しかし、その後ろには本来なら自国の国民がいるわけです。自分が責任を持って動かなくては、自分が責任を持って討議や投票に参加しなくては、自分が国民を代弁しなければ、その不利益を被るのは国民であり、皆さんの家族です。中高校生なので「うまくいかなかった」という反省は当然です。結果として、自国の利益に反する決議が採択されてしまうこともあります。しかし、問題は結果以前にプロセスの段階で、大使にふさわしい行動ができたのか、ということです。これらの「大使としてのミッション」を自覚すれば、もっと模擬国連の奥深さが分かり、課題探求を突き詰めることができるでしょう。

## CHAPTER 2 模擬国連に参加するにあたって

### 2-1 Background Guide (BG)

会議に臨むにあたって、議題解説書、通称「BG (Background Guide)」というものがフロントから配布されます。BGには議題に関する基礎知識や解説が載っています。いわば参加者共通の教科書です。練習会などで使われるBGで最も一般的なものは過去の全日本大会のBGです。

BGには2つの目的があります。1つは、参加者に議題に関する基礎知識や情報を提供することです。もう1つは、「〇〇問題」とひとことで言っても広すぎるので、会議の方向性や論点を定めるという目的です。リサーチにあたって、当然ながら、まずこのBGを読み込み、そして読み解きましょう。BGには過去の議論や関連会議、各国の基本立場など、たくさんのヒントが載っており、巻末には参考になるリソースも提示されています。ただ単にBGの文章を読解してだけでなく、関連事項をリサーチして、自分の言葉でBGを説明できるようにすることがスタートです。



第9回全日本高校模擬国連大会（2015年度）のBG

### アウトオブアジェンダ

BGには、アウトオブアジェンダ (Out of Agenda) と言って、議論の対象にしない事項も設定されています。

#### 論点とアウトオブアジェンダの例

議題	論点	アウトオブアジェンダ
児童労働	法、経済、教育を主要論点から児童労働の根絶を目指す	児童兵および性産業での児童労働は議論対象にしない
核軍縮	核軍縮、核不拡散、平和利用を主要論点に核のない世界の実現を目指す	国連総会以外での議論されている事項（ジュネーブ軍縮会議）や核軍縮の数値目標は議論対象にしない
難民	受け入れ態勢、受け入れ国の負担分散、申請プロセスの統一化、人権と生活の保護を主要論点に難民問題の解決を目指す	難民の定義および国内避難民については議論対象にしない
宇宙空間	宇宙ゴミを出さず、国際協力体制の中で平和的、安定的な宇宙開発を目指す	現存する宇宙ゴミの除去は技術的な課題がクリアされておらず、議論対象にしない



資料： BGに掲載されているアウトオブアジェンダ

### 3-4 論点設定とアウトオブアジェンダ

今回の会議では、以下のものをアウトオブアジェンダとする。アウトオブアジェンダとは、会議の中で議論することのできない内容のことである。アウトオブアジェンダに設定された内容を成果文書に載せることはできない。

#### ・ 論点と関連のない議論

今回の会議では「頭脳流出」、「非正規移民」、「困難に直面する移民の保護」の3つを論点に設定している。議論の混乱を防ぐため、議論する内容はこの3つの論点に関連のあるものに限定する。論点との関連を説明できない内容を成果文書に載せることはできない。

#### ・ 国内移住 (Internal Migration)

国内を移動する人々を国内移民という。都市間で経済格差の大きい国などでは多数の国内移民が生じるが、今回は国際移住 (International Migration) に関する議題であるため、この会議では扱わない。

#### ・ 送金コストの解決に関する議論

送金コストについては第4章を参照。送金コストの削減についてはUNCTAD (国連貿易開発会議: United Nations Conference on Trade and Development) や世界銀行など、経済・金融を専門とする国際機関を中心にすでに多くの解決策が提案されている。今回の会議では送金コスト以外の国際移住に関する課題について集中的に議論することにする。

#### ・ 難民キャンプや第三国定住といった、難民に特化した議論

難民については、UNHCR (国連難民高等弁務官事務所: United Nations High Commissioner for Refugees) 執行委員会や国連総会第三委員会が主要な議論を行っている。今回の議題は国際移住であるため、難民に限定した議論 (難民キャンプや難民認定制度、第三国定住など) はアウトオブアジェンダとする。

国内移住、送金コスト、難民については、論点と関連のある形でも議論することはできないことに注意してほしい。

(出典： 第9回全日本高校模擬国連大会『国際移住と開発』のBG：グローバルクラスルーム日本委員会HPに掲載)

## 2-2

## 会議の言語

募集要項や BG の表紙に以下のように言語が指定されています。

(公式 / 非公式 / 決議) 英語 / 日本語 / 英語

これは、公式討議に当たる会議進行や手続き、スピーチ、投票は英語、モデ、アンモデの非公式討議は日本語、決議にあたる DR 文書は英語で行いますという意味です。高校生の全日大会、それに準ずる大会や練習会の場合、ほとんどこの言語設定になります。国連会議なので本来は英語で行う部分が多くあるべきかもしれませんが、世界大会、国際大会に出ると当然言語は英語です。しかし、日本の高校生の大会では、帰国生だけが圧倒的優位に立たないようにと日本語で行われる部分が多くあります（「もう少し英語の量を増やすべきだ」という声もあります）。もちろん議事進行、スピーチ、文書は英語ですので、英語は駆使できないといけません。一方で、議事進行については、シミュレーションをしておけばさほど無理なくついていけます。まずは自分たちの主張を英語でスピーチできるということが求められるレベルでしょう。

あくまでも全日大会がこの設定なだけであって、他の設定でも可能です。中には、日本の大会であっても全て英語で行うものもあります。対照的に、2017 年から始まる全国高校模擬国連大会（新大会）は定型句以外は全て日本語で行います。日本語でやることも理にかなっています。帰国生じゃなくても、または英語が苦手であっても、より多くの生徒に模擬国連を体験してもらい、世界を語るきっかけと刺激を与えていくことも重要です。

## 2-3

## 担当国を選ぶ

練習会ではフロント側が希望を聞かずに担当国を決めてしまいがちですが、大会によっては大使が担当国の希望を出すことができます。リストが与えられ、そこから選ぶ場合もあれば、縛りがなくどの国でも希望できる場合もあります。

国がどこになるかで多少の有利不利もあります。そういう意味では、国選びから勝負が始まっているのですが、ただ、そうは言っても、強いペアはどの国になっても抜群に強く、国選びで勝負が決まることはありません。しかも、希望通りに行くかは分かりません。あまり神経質にならずに、「どこなってもやるべきことは同じ」という気持ちでいきましょう。

国を選ぶ際に検討する項目をざっと並べてみました。

### 先進国か、発展途上国か

発展国のメリットは、まずネットも含めて調査がしやすいということです。いわゆるメジャーな国ですので、統計、新聞記事なども含めて、色々な情報を容易に検索することができます。また OECD の加盟国であれば、OECD 関連の資料は山ほどあります。また日本に近い生活・経済

レベルであることが大半で、イメージがしやすいということも利点です。そういう意味では初心者はこちらの国を担当できると、リサーチはしやすいですね。発展途上国はリサーチがしづらいますが、多くの議題の場合、その課題を直に抱えている国で、リアルにその問題を語る事ができるというメリットがあります。日本にとっては、他国の問題でも、その国にとっては、「自国の問題」であり、貧困や和平問題、経済問題などとダイレクトにリンクしており、立場を明確にしやすいということが言えます。

### **その課題に対してどのような立場をとっているか**

その課題を作り出している国か、その被害を受け入れている国か、その課題解決に積極的に働きかけている国か、ということを考えます。例えば、難民問題であれば、難民を出している側なのか、受け入れている側なのか、どちらでもないのか（受け入れているが小規模など）、という大きく分けて3つの関与があります。軍縮であれば、武器を作っている国、武器を使っている国、大きく被害を受けている国、過去に戦争経験がある国、など、それぞれ立場がことなります。ある程度、そのあたりを考えて国の希望を出します。ニューヨーク大会出場した経験のある生徒は、意外にも「主要国よりもその問題で被害、損益を被っている国のほうが、自分たちの困っている現状をより明確に主張でき、より明確に解決策を提示できるから良い」ということを言っていました。

### **資源、技術を保有しているか、地理的な特性があるか**

議題によっては、資源や技術といった要素が入ってきます。例えば、核燃料や地球温暖化、エネルギー問題で言えば、オーストラリアは資源を豊富に持っており、かつ核エネルギーに頼らず、しかも再生可能エネルギーの使用に積極的に関わっています。また日本は、あらゆる問題において資源はないけど、経済力と技術力は抜群にある国です。このように、資源や技術の保有が、その問題に大きな影響を与える場合があり、やはりその場合は、そのような国が中心に議論が回っていきます。ほかにも地理的特性や政治、経済の状況など、議題によって関連性が高くなるものもあります。

模擬国連では、当然ながら各国の国益、立場を基に政策を立案するわけですが、それらをまとめる用紙をポジションペーパー（PP）と呼びます。立場だけでなく政策も含まれることから PPP（Position & Policy Paper）と呼ばれることもあります（本冊子では PP で統一します）。

PP の目的は、①リサーチの方向性を定めること、②各国の政策を全体で共有すること、そして③会議運営側がおおよその会議の流れを確認するため、という 3 点です。


全ての参加大使はこのポジションペーパー（PP）の作成が課されます。BG が教科書ならば、PP は会議に向けた宿題とでも言いましょうか。書式は参加国共通で、ワークシート形式のものもあれば文章（論述）形式のものもあります。自国の一般情報に加え、議題に関する自国の状況、影響、そして、自分たちが強調する論点、政策などを書き、フロントに提出します。そして、一般的には全ての国の PP が会議前に公表され、どの国がどのような立場、政策を考えているのかということが共有されます。大使たちはそれを読み、さらに自分たちの戦略や政策を修正して、本番に臨みます。

#### 資料： ポジションペーパーの例


安全保障理事会改革会議 Position Paper					
学校名：( ) 国名：( ) 大使名：( )					
<b>1. 国の基本情報</b> ① 自国周辺地図 <table border="1" style="width: 100%; height: 100px;"> <tr><td> </td><td> </td></tr> </table> 人口 人種・民族構成 国語 宗教 政治体制 外交基本方針 内政（内戦、内乱、紛争）状況 加盟している地域機構 GDP 主要産業 主要貿易相手国				① 自国にとって望ましい安保理のあり方（＝トプライン） ※各論点について述べてください ② 議会議長と術平配分 ③ 拒否権 ④ 透明性	
<b>2. 安保理について</b> 担当国の安保理における地位・役割（常任理事国である、非常任理事国であるなど） 加入しているグループ（G4 P5 など）及びそのグループの主張 ※各論点について述べてください		① 議会議長と術平配分 ② 拒否権 ③ 透明性			
<b>3. 大使としてではなく、個人として向き合ってみる</b> 最後に、あなた個人の意見を伺いたいと思います。あなたの考える理想の安保理について教えてください。 あなたが理想とする安保理は、どのような組織ですか？各論点について簡単に教えてください。		① 議会議長と術平配分 ② 拒否権 ③ 透明性			

（2016 年かえつ有明練習大会の PP フォーマット、渋谷教育学園幕張高等学校フロント作成）

ほかにも Negotiation Paper (NP) というものがあります。これは、自国の政策を A4 ぐらいにまとめたものです。PP などは、全部を読んでもらえるわけではありませので、重要なポイントを図式にまとめたチラシ資料みたいなものを用意します。フロントに事前に NP を預けて公表してもらったり、他の大使に NP を配りながら、宣伝活動をして回ったりします。練習会などでは、NP は使わないというルールを設ける場合もあります。



# TUNISIA



**主張① 表現の自由を尊重しながら、  
条件付きの情報統制を！(論点1)**

<どのような条件か？>

- 殺人など過激なテロ行為につながるもの
- イスラム教を侮辱するもの

**主張② より活発な、キャパシティ・  
ビルディングを推進！(論点2)**

<そのための政策>

- ITU のもとでのウェブサイト開設  
どの国からどの国に、どのようなキャパシ  
ティ・ビルディングが行われたか公表
- キャパシティ・ビルディングは何を含めるか  
という文言の挿入

(提供：第10回全日本高校模擬国連大会『サイバー空間』、渋谷幕張高等学校、チュニジアペア)

Working Paper（通称 WP、ワーペ）は、作業文章と呼ばれるもので DR（決議案）を作成する過程で提出、共有する文章のことです。公式文章に分類されますので、文書の言語指定が英語であれば英語で作成しなくてはなりません。DR 型 WP というものが主流で、見た目も中身も DR と同じものです。DR は決められたスポンサーが集まらなると提出できませんが、WP は 1 か国でも提出することができます。また WP はスポンサーを兼任することができるのも一般的なルールです。

では、どういうときに出すのか。1 つ目は、会議冒頭で自国が準備してきた DR を議場に配布したいときに使います。「私たちの作成したい DR はこれです。国益の合う国はこれをもとに DR を作成していきましょう」というメッセージになります。会議の冒頭から DR を出せる国はそう多くはないので、会議をリードするうえで有効な手段です。ただし、会議によっては、個別のワーキングペーパーを受け取らないと設定しているものもあるので、その場合は正式に提出することはできず、アンモデの中で他国に示していくことになります。2 つ目は、どうしてもスポンサー国が必要数集まらず、DR の代わりにワーキングペーパーという形で提出するということです。例えば、安保理改革では P5 とされる常任理事国が、その他の国と国益がぶつかってしまうため、なかなか DR グループが形成できません。そこで、必要なスポンサー数は集まっていないけれども、イギリスが音頭として常任理事国でとりあえずはワーキングペーパーとして提出するというを行ったことがあります。ワーキングペーパーはあくまで DR ではないので、その後の交渉で他のグループと折衝してコンバイン（DR をくっつける作業）しないといけないのですが、第 1 段階の提出では安易に妥協せず、国益を守るために数は満たなくても WP で対応するというような行動に出ました。

### ワーキングメモ

ちなみにワーキングペーパーのほかにワーキングメモと呼ばれ、最近では WP のことをそう呼ぶ大使がいますが、ワーキングメモとは本来はメモ回しのメモ（P46 参照）のことを言うのが一般的です。

## Column 1

### ～模擬国連のすそ野を広げ、機会の窓を開放したい～

模擬国連に取り組む多くの生徒は全日本高校模擬国連大会（全日大会）を目指しています。しかし、その門は非常に狭く、出場できるのはわずかです。予選のエントリーも各校2チームまでで、全日大会は80チームに限られています。NY大会に行けるのはさらにその中の6チームで、同じ学校からは1チームしか行けません。模擬国連の知名度が上がるにつれ、年々、参加校が増え、中身も超がつくほどハイレベルになっています。今や予選通過すら本当に難しくなり、常連校ですら本大会に出場できないという事態が見られるようになりました。

私が現在指導している生徒も駆け出して、まだまだ予選通過が当面の夢かもしれません。一方、強豪校は強豪校で、何十人も部員がいて、それぞれ全国大会の中心になれるレベルの生徒がたくさんいても、2チームまでしか予選エントリーできず、多くの生徒は全国の舞台に立つことができない、という悩みを抱えています。

もちろん、全日大会のような高いレベルでの切磋琢磨も大切です。しかし、それだけを考えていると、予選を落ちた時の焦燥感にやられ、それが契機で「模擬国連に取り組むのが億劫になる」という生徒も出てきてしまいます。全員が全員、「悔しさをバネにして、来年度に向けて頑張る」とはなかなかならないのも現実です。

また、模擬国連の敷居が高くなりすぎて、一部の「優秀な生徒」や「帰国生」にしか還元されないものだと思われてしまうのは本意ではありませんし、それはもったいないことです。ぜひもっと多くの生徒に模擬国連に触れてほしいという思いを持っています。総合学習に取り入れたり、授業で模擬国連の要素を組み込んだり、初級者でも楽しめる活動や大会を増やしたり、、、そういう小さいステップを通じて「気軽に」模擬国連に取り組む機会や環境を増やしていきたいな、というのが目下の目標です。高みを目指す活動も必要ですが、「できる範囲でやれる活動」を普及させることも大切だと思っています。

私の生徒たちの中には、全日大会にエントリーせず練習会だけ出たいという生徒もいます。「やるからには全日大会を目指してほしい」という思いもありますが、まあ、それもいいかな、と思っています。模擬国連に触れ、自らの学びを深め、国際平和を考える生徒が増えるということが重要なんですね。そして、それを続けていくうちに、自ずから全日大会を目指す生徒が出てくるでしょう。それがうまくいって、最終的にはNYに進んでくれるといいな、と。

模擬国連は本当に魅力と可能性に満ち溢れています。私自身、その魅力にどんどん引き込まれています。まさに究極の課題解決プログラムであり、グローバルキャリア、アクティブラーニングという点からも秀逸です。ある意味「教育の宝箱」で、そこから学ぶ教育のヒントもたくさんあると強く感じます。そういう意味でも、模擬国連のすそ野を広げて、模擬国連の持つ教育プログラムとしての教育効果や可能性を一般の生徒たちにも発揮・還元していきたいなあ、と模索中です。まずは模擬国連の機会の窓をオープンにしていきたいな、と。

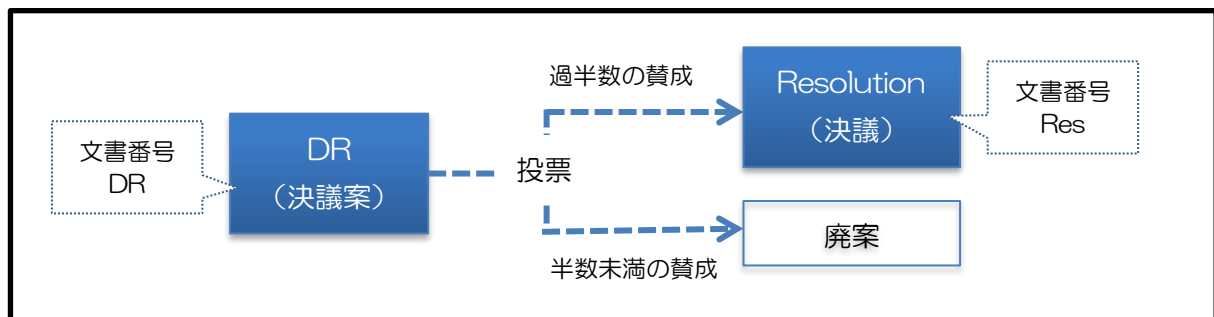
## CHAPTER 3 Draft Resolution

### 3-1 決議と決議案

国連会議では、与えられた議題に対して決議案を作成し、最終的にはそれを採択して「決議」として世に出します。この国連の決議を Resolution（通称：レゾ）と呼びます。ニュースで「安保理が〇〇を非難する決議を表明」といった報道がなされますが、これは採択された後のもの、つまり Resolution として成立したものです。

一方、その決議にかける原案のことを Draft Resolution と呼びます。略して DR です。この DRこそ、討議中の最重要文書で、これを巡って各国がぶつかり、交渉を進めているのです。DR はあくまでも投票される前の原案にしかすぎません。DR は過半数の賛成で採択され、正式に Resolution として世に公表されますが、賛成が過半数に届かない場合は廃案になり、お蔵入りしてしまいます。

書類上でも決議案は DR、決議されたものは Res と文章名で区別されています。採択された場合は、議長から「DR1 は正式に Resolution となりました」と、名称の変更が宣言されます。



### 3-2 修正案

#### アmendメントとコンバイン

模擬国連では、DR を提出したのち、さらにそれをより良いものに修正していくという作業が入ります。その修正案を Amendment（アmend）と呼びます。しかし、ただ単に手直しするものではありません。目標は投票で過半数の同意が得ることです。そのためには、他の DR グループと共通点を見つけて、複数の DR をくっつけ、大きくしていくことが必要になってきます。これをコンバイン（Combine）と言います。DR グループが大きくなれば、そのスポンサー国の賛成が勘定できるからです。そして、究極的には全ての DR を1つにまとめてコンセンサス（満場一致の採択）に至るように交渉していきます。

このあたりの動きは詳しくは、Chapte4-8（P51）で見てください。

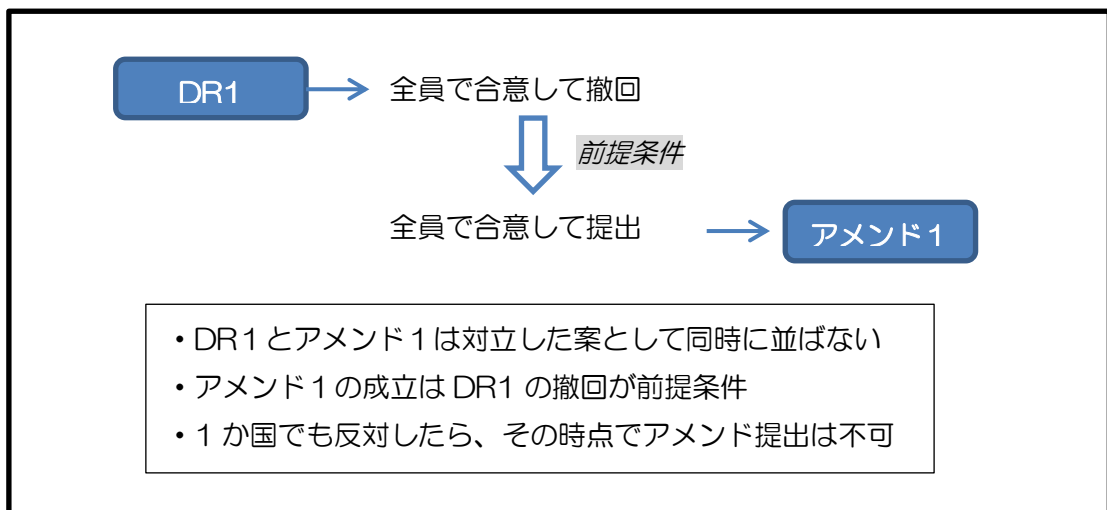


## フレンドリーアmendメントとアンフレンドリーアmendメント

アmendメントにはフレンドリー（友好的）とアンフレンドリー（非友好的）という2種類があります。

### フレンドリーアmendメント（友好的修正案）

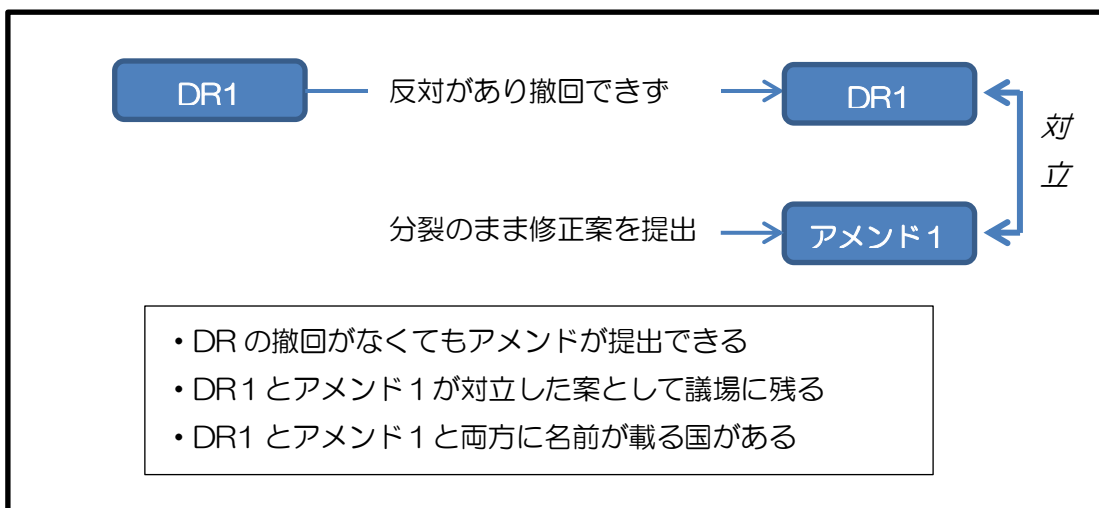
古いDRをスポンサーが全員一致で取り下げ、それに代わる新しいアmendメントを全員一致で提出するというものです。みんなが友好的にDR取り下げに賛成し、友好的に提出するアmendという意味ですね。このケースでは、古いDRが新しいアmendと対立して同じ議論のテーブルに残る必要がありません。逆に言えば、新しいアmendを提出するには古いDRが取り下げられることが条件です。ですから、もしどこかの国が古いDRの取り下げに反対したら、その時点でアmendメントを提出することができません。アmendを提出する前に、全参加国の合意をしっかりと確認しておかなくては、1か国の反対によってアmendが廃案になることもありえます。



### アンフレンドリーアmendメント（非友好的修正案）

古いDRの取り下げに全体の合意がない中で出されてしまうアmendメントです。つまり、全スポンサー国が友好的に賛同した修正案ではない、ということですね。これは、交渉の過程でスポンサー国同士で分裂してしまうことによって起こります。アmend・コンバインの段階で加入してきた国の影響で、アmendのベクトルがもともとのDRから大幅に変更されてしまったということも考えられます。

この場合、古いDRを支持するスポンサーとアmendを支持するスポンサーが分かれ、2つの案が対立していることとなります。古いDRも取り下げられずに議場に残ったままになり、古いDRとアmendがともにテーブルに乗っかっている状態です。投票の際、一方が採択された時点で、もう一方は否決されたとみなされて廃案になります。



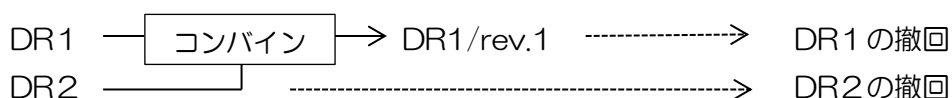
中高生の大会では分裂の混乱を防ぐため、基本的にアンフレンドリーを認めないルールが基本です。つまり、スポンサー間で溝を生じさせるような修正案は想定しておらず、修正案を出す以上は、全スポンサーが合意できる内容にしていかななくてはなりませんし、全スポンサー国が古い DR の取り下げに応じないといけません。

### アmendメント提出の手続き（フレンドリーの場合のみ）

提出国は、古い DR の撤回およびアmendメント提出のモーションを出します。文書の提出、撤回に関するモーションは自動受理なので、そのモーションを出した時点で投票に付すことなく、作業が進みます。1 か国でも反対があれば DR の撤回もアmendの提出もできませんので、議長は、スポンサー国を 1 つずつ呼び上げ、「アmend提出に同意するのか」を聞いていき、大使は「YES（賛同）」「NO（反対）」のいずれかで意思表示をします。全てのスポンサー国が同意していればアmendの提出が認められ、議場に配布されます。その時点で、該当の DR は自動的に撤回が決まります。アンフレンドリーが認められていないので、アmend提出に賛同したということは、古い DR の取り下げにも賛同したということになります。一方で、もし 1 か国でも NO を表明した場合、アmendはその時点で認められずに、古い DR がそのまま残ることになります。

### コンバインによるアmendの提出と DR の撤回

2つの DR がコンバインしてアmendを出した場合、形式上はベースとなった片方の DR にもう 1 方のスポンサーが吸収されることとなります。DR1 をベースにした場合、DR1 の修正案が「DR1/Rev.1」という名称で議場に提出されます。コンバインされた DR2 は形の上では手つかずの状態でもまだ残っていることとなりますが、この DR2 も撤回しなくてはなりません。



DR は以下のように、前文と主文という 2 つの部分から構成されています。

**前文** 主文の前提になる問題の存在や、その決議案の必要性などについて認識させるための文言

【例】 国際憲章や過去の議決等の引用、現状認識

**主文** 加盟国が行う具体的な解決手段に関する文言

【例】 各国に対する政策・行動の勧告、協力要請

DR は主語から、主文最後のピリオドまで 1 つの文になっています。英文法的に言うと、「国連総会は～」の部分が主語で、前文の分詞が「～を鑑み、～を認識し、～を考慮し」などといったように状況説明をし、「～ということを要求する、～ということを強調する」といった主文の動詞につながります。主語が国連総会という 1 つの団体なので、主文の動詞には三人称単数現在の s もつきます。

DR には番号が振られています。3 つの DR が提出されれば、それぞれ DR.1～DR.3 という形になります。修正案になると Rev (Revision) という記号が加わります。そして、これが投票で採択されたら文章番号が DR から Res (Resolution) に代わります。DR は決議案です。採択されればそれが決議になるので、Draft (案) の部分が外れるというわけです。

### 主文の数と会議の質

決議のメインになるのは主文の部分ですが、模擬国連では、主文の数が制限されることがあります。会議の冒頭に「DR の主文は 12 個まで、アmend (修正案) の主文は 20 個までとします」というようなアナウンスが流れます。これは、DR チェックをする際のフロントの負担を考えると会議運営上の理由もありますが、それ以上に「会議の質を保つため」という大きな目的があります。

というのも、主文の数を制限しないと、「とりあえずいろんな国の主張を羅列しよう」と、必要な交渉を経ずにグループ形成していくこともできてしまいます。その結果、オムニバスの DR ができてしまい、大使も「自国の主張が入れてもらったから」という理由で、詳細な点検をせずに賛成票を投じ、採択されてしまう可能性もあります。これでは、軸のある国連決議になりませんし、茶番的な決議になってしまいかねません。ですから、主文の数を制限することによって、大使が国益のためにしっかり交渉をするように働きかけ、国際会議のあるべき姿を維持し、DR の質を担保するのです。



# General Assembly

Distr.: Limited

16-17 November 2013

Original: English

会期と議題

Sixty-eighth session

Agenda item: Child Labour

スポンサー国

Sponsor: Burkina Faso, Cote d'Ivoire, Eritrea, Ethiopia, Ghana, Georgia, Guinea Bissau, Mali, Niger, Somalia, South Africa, Uganda.

主語

*The General Assembly,*

主語は斜体

*Reaffirming* the progress made since the Brazil Global Child Labour Conference 2013, to assess remaining obstacles and to agree on measures to strengthen our actions to eliminate the worst forms of child labour,

前文の冒頭は斜体の分詞で始める

前文

*Recalling that* child labour is work done by a child who is under the minimum age specified for that kind of work, as defined by the national legislation, guided by the International Labour Organization (ILO) Declaration on the Fundamental Principles and Rights at Work (1998) and ILO Conventions No.138 and 182,

前文はカンマで区切る

*Convinced that* the goal of eradicating child labour unites all countries since it constitutes an important issue for development and human rights,

*Recognizing* the efforts and progress made and being made by governments, employers' and workers' organizations, regional and international organizations and NGOs for the eradication of child labour, yet recognizing the need to accelerate the efforts at all levels in particular its worst forms by 2016,

主文

1. *Urges* all States that have not yet ratified the ILO Conventions Nos. 138 and 182 to ratify as soon as possible

主文は数字をつけ、冒頭は動詞で始める

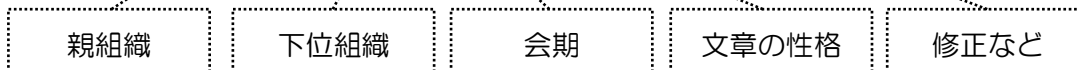
2. *Calls upon* countries to increase multilateral aid to the International Programme on the Elimination of Child Labour (IPEC) to enhance and support their work;

3. *Requests* member states to hold the regional conference specialized in the elimination of child labour issue;

主文はセミコロンで区切る  
最後の主文はピリオド

# A / C.2 /71/DR.1/Rev.1

総会 第2委員会 71会期 決議案1号 修正案1号



文書記号〈基本的な模擬国連では★マークの記号が分かればおおむね大丈夫です〉

## 親組織を表す記号

A	総会★	S	安全保障理事会★
E	経済保障理事会	ST	事務局

## 親組織以外を表す記号

CRC/C	子どもの権利に関する委員会	DP	国連開発計画
TD	国連貿易開発会議	UNEP	国連環境計画

## 親組織を表す記号

C....	第...委員会（常設委員会）★	AC....	アドホック委員会
CN....	委員会	CONF....	会議
GC....	運営委員会	PC....	準備委員会
SC....	小委員会	Sub....	小委員会
WG....	作業部会★		

## 親組織を表す記号

CRP	会議室文書	INF	情報シリーズ
L....	限定的配布	NGO	NGOによるステートメント
PET	嘆願書	PRST	安保理によるステートメント
PV....	会議の逐語的な記録	R....	配布制限； アクセス制限
DR....	決議案★	RES	決議★
SR....	会議の要約記録	WP....	作業文書★

## 親組織を表す記号

Add....	補遺	Amend....	変更
Corr....	訂正	Rev....	改訂（差し替え文書）★
Summary	要約	*	技術的理由による再発行

注意： Amend はすでに公表された公式文書を修正、変更したりする場合に使われる。  
 模擬国連における Amendment（修正案）は、公式文章の変更ではなく、DR の  
 差し替えに当たるため、記号上は Rev.を使う。

DR への関わり方には、模擬国連のルール上はスポンサー（共同提出国）、シグナトリー（署名国）という 2 つの立場があります。中高の模擬国連ではスポンサーのみが認められていて、シグナトリーは設定されていないことが一般的です。本物の国連会議においても、スポンサーはありますが、シグナトリーはありません。

1-3 (P13) の「会議のゴール」で述べたとおり、DR は 1 か国単独では提出できません。会議前もしくは冒頭に DR 提出に必要なスポンサーの数が言い渡されます。その既定の数のスポンサーを集めて、共同で DR を作成し、提出しなくてはなりません。そのグループの中でも、作成の中心者となってフロントに DR を手渡しに行く国は「提出国」と呼ばれ、DR のスポンサーリストでも下線部が引かれることがあります。

#### スポンサー（共同提出国）

- DR の共同提出国であり、その DR を作った国として認められる。
- スポンサーになった DR への賛成票投票が義務付けられる。

#### シグナトリー（署名国）

- 議場でこの DR が話し合われることについて容認する立場を示す。
- 投票の際には賛成票を投じる義務はない。

### スポンサーの責任

DR のスポンサーになったら、責任が生じます。練習会で毎回見られる光景ですが、「自分の DR グループを抜きたい、他に移りたい」、「別の DR のスポンサーも兼務したい」、「自分の DR に反対をしたい」と言う大使がいます。これらは全てダメです。スポンサーは DR を提出した国として、最後までその DR に責任を持ち、投票でも賛成をしなくてはなりません。

これは当然のルールであり、自ら反対票を投じるような DR なら何のために提出しているのか、ということです。また、都合が悪くなったから途中で抜ける、別の DR と掛け持ちするということになれば、「とりあえず名前だけ入れといて嫌なら後で辞めればいい」といったような無責任な DR 作成が横行してしまいます。

また、全てのスポンサーは DR を熟知し、説明できなくてはなりません。提出国もそうでない国も等しくこの義務を負います。「私たちは提出国じゃないから」「ここは私たちの政策じゃないから」という理由は通用しません。スポンサーに名を連ねるということは、自分たちのこだわった政策はもちろん、全ての政策、文言について把握しており、質疑応答ができるということなのです。

確かに、中高の模擬国連では、DR 作成を中心になって引っ張る国と、よく分からずに引っ張られる国が生じ、初級者の中には「なんとなく DR グループに入ってしまった」「後になって考え

ると、別の DR の方が国益に合う」ということもできます。しかし、DR の中心提出国であろうが、それに引っ張られただけの取り巻きの国であろうが、全てが等しく共同提出国であり、同じ責任が生じます。DR のスポンサーになるということは、「国連という国際会議で公式文書に名前を連ねて提出するということなんだ」としつかり意識して、その責任を最後まで全うしましょう。そしてその責任の後ろには自国の国民がいて、自分たちの行動 1 つで自国の利益が損なわれることもあるということを改めて肝に銘じて、スポンサーになりましょう。そのためにも、「なんとなく」「分からないまま」ということではなく、自国の立場と利益をしっかりと考えて DR に名前を載せましょう。また、一度サインしたなら、賛成票を投じなくてはいけない以上、最後の最後まで責任を持って動かなくてははいけません。

### DR 提出前は柔軟に交渉をすることは作戦のうち

DR 提出前の交渉段階では、まだどの DR のスポンサーにもなっていないわけですから、縛りもなく、複数のグループに加わって議論していても問題ありませんし、批判されるものでもありません（もちろん、DR 提出が迫る時までには 1 つに絞らなくてははいけません）。むしろ、他国の DR に乗っかる場合は、それぞれの DR をしっかり理解したり、いろいろな国と交渉するためにも複数路線を担保したりすることは作戦の 1 つです。ただし、2 つの DR にスポンサーを約束しておいて直前で 1 つを裏切るといったようなモラルに反するような行動は、その他国の交渉を阻害し、会議の成立を阻むだけでなく、自国の信頼性と威信を傷つけることにもなりますので慎みましょう。

### 会議難民

各国が DR グループを形成する中で、そこに入らない大使を「会議難民」と言います。出遅れて DR グループに入り損ねた会議難民もいれば、第 1 段階の DR 提出時にあえてどこにも所属せずに、その後の交渉をもくろむ意図的な会議難民もいます。

以前、AIDS を議題にした会議で、サウジアラビア大使を務めるペアが戦略的会議難民になったことがあります。最初から「〇〇のような方針の国とは一切組むことができません」と主張し、その後も強硬な交渉態度をとって、最初の DR 提出時もどのグループにも属していなかったのです。後日、彼らと話す機会があり、そのことについて聞いてみたのですが、「自国の利益を守れる DR がなかったので、大使としてサインするわけにはいかなかった」と言っていました。大使としての責任、DR スポンサーとしての責任を分かっているからこそ、一匹狼になっても国益を死守する姿勢を貫いたのです。DR グループを形成することがゴールになってしまう大使が多い中で、冷静に、しかもサウジアラビアという国とその外交特性をしっかりと理解して、国民を第一に考えた彼らの会議行動は印象的でした。ちなみに、その後、そのペアは、DR グループの 1 つと折衝を続け、後半はそのグループの中で行動を取っていました。もちろん、腕があるからできる大胆な行動で、経験の浅い大使には決して勧められる手法ではありませんが、会議参加の意識という点については、彼らから学ぶものはあるでしょう。

### 3-5 身近な例で考える

DRの前文と主文と言われても、なかなかぴんと来ないですね。そこで、身近な例で考えてみます。生徒総会を国連総会と見立てて考えてみましょう。議題は「登下校マナーの向上と朝のトラブル問題」です。学校において登下校時のマナーは普遍的な課題であり、近隣住民から苦情が寄せられることがあります。これについて、各クラスの代表や委員会、部活動の代表が集まって解決策を話し合い、総会で決議を取るという設定です。そこで、いくつかのクラスや部活を中心としたあるグループが以下のような原案が議場に出されましたとします。

**Max High School Student Union**

**A/C.1/17.1/DR.1**



生徒総会

Distr: Limited

June 31, 2017

Original: 日本語

2017年第1会期

議題： 登校時のマナー向上と朝のトラブル問題

スポンサー： 2-B組、2-C組、2-D組、3-A組、3-B組、3-F組

規律委員会、文芸部、かるた部、英語部、理科部、鉄道研究会

生徒会は

<前文>

自律と責任を求める校訓を尊び、  
過去の生徒会の通学マナー向上の取り組みを振り返り、  
生徒指導部教員と生徒会の連携の重要性を再認識し、  
本校の生徒のモラル低下を憂慮し、  
近隣住民とのトラブルを回避する必要性を訴え、

<主文>

1. 生徒全体に通学路マナーの徹底を促進する；
2. 指導部教員の各生徒委員会による朝の通学路指導を推進する；
3. 通学マナー週間の設置を提案する；
4. 部活動の朝活動自粛の早期実現を勧告する；
5. 通学路変更の検討を職員会議に要請する。



これに対して、利害がぶつかる生徒たちも別のグループを形成し、対立案を提出してきます。さて、この DR、一見すると問題を根本的に解決できる良案のように思えますが、反対グループはどこに突っ掛ってくるのでしょうか。DR を見る上で重要なのが「立場」です。どの DR も一般的に見たら解決案としてよくできているように思えます。しかし、立場を意識すると、その人の利害が浮かび上がってきます。一番わかりやすい「朝活動自粛の早期実現」という項目を中心に、立場と議論をシュミレーションしながら、DR を巡る会議の動きイメージしてみましょう。

### アウトオブアジェンダ

今回の生徒総会では 3 つのアウトオブアジェンダが設定されています。

- ① 議題はあくまでも登校時のマナーであり、部活動は朝活動のみをターゲットにしています。放課後の練習、また下校時についてもマナーの問題や近隣とのトラブルはあるかもしれませんが、そこまで踏み込むと部活動自体ができませんので、一番苦情が多い朝の時間帯にだけ絞り、放課後はアウトオブアジェンダとなっています。
- ② 登校時のマナー問題に乗じて「普段の行動が悪い」と一般化するのは教員の得意技ですが、今回はその他のマナー問題については生徒指導全体の在り方に関わってくるため、議論の対象にしていません。
- ③ 生徒総会での決議ですので、部活の顧問をはじめ、教員の指導責任はアウトオブアジェンダとします。あくまでも「生徒側として取り組めること、提案できること」だけを扱っています。ただし、生徒指導に関わる部分は教員の関与や助けも必要なので、会議監督が「生徒主体の活動」と認めた場合のみ、教員の取り組みについても言及することができます。

### 朝活動に関する立場と利害を巡って

文芸部をはじめとした学術系統の部活はそもそも朝練をしないので、この項目は自分たちの不利益にはなりません。当然朝練を行いたい運動部や文化部は黙っていません。例え他の項目に賛成できても、「朝活動の自粛」がある限りは、この案が採択されることは何が何でも阻止しなくてははいけません。中には一歩も引かない強固な部活もあれば、なんとか協力はしたいと思いつつも、自粛は困るという部活もあり、その態度は様々です。自粛にはすぐには賛成できないけど、部活動が協力して活動日数を減らそうとか、開始時間を遅らせようとか、室内を交代で利用できるようにルール決めをしよう、など、中間策を探る人も多くいるはず。合わせて「放課後の活動時間の確保や体育館のソフト見直しもしてくれるなら」と条件を出して歩み寄るグループも出てくるでしょう。

一方で、運動部の中でも、騒音に直結する屋外の部活と体育館で活動する部活では利害が一致していないでしょうし、強豪チームとそうではない部活、顧問が熱心な部活とそうではない部活の間にも温度差があり、決して一枚岩ではありません。もしかすると強豪チームの中にも「朝はせめて休みたい」と思う部員もいて、表面上は反対していても、内心ラッキーと思っているかもしれません。

### 「朝活動」と「登校時マナー」の定義を巡って

また、ここは定義を巡る議論も起こりえます。「朝活動」の定義は何か、ということですから。いわゆる「朝練」ですが、朝に顧問とミーティングすることはこれに入るのか、音や声が出さない活動まで規制されるのか、ということも極端ですが議論になります。そして「朝練」ではなくて、あえて「朝活動」としている意図は何か。屋外の朝練だけをターゲットにされた運動部は不満を持つでしょうし、それを「かわいそう」と擁護する声も出てきます。平等を求める生徒の中には、音の有無にかかわらず朝の全ての行動が「朝活動」に該当し、一律に自粛しようとするものも出てくるかもしれません。そうすると生物部が朝に熱帯魚にエサをあげることも禁止対象になります。ここまで来ると、もはや登下校時の本質とずれてきているように感じるかもしれません。しかし、朝早い時間に、駅の狭い改札口でグループで待ち合わせをしたり、住宅街を会話しながら横に広がって歩いていたたりすることも近隣からのクレームの対象になっていて、それを含めて「登下校のマナー改善」とするなら、朝活動の種類や形態、活動場所に関わらず、議論の対象になるわけです。そうすると「登下校時のマナー」とは何ぞや、という定義にまた戻ってこないといけなくなります。

### 文言を巡って

この短い 1 文を巡って、朝活動という言葉以外にも文言でのせめぎあいもあります。「自粛」ではなく「節度ある朝活動を奨励する」という文言にしてほしいという人いれば、この問題で「生徒会としてもしっかり取り組め」と突っつかれている生徒会幹部は「自粛じゃ生ぬるい、禁止という文言に強めてほしい」と提案します。しかし、それに対して、「禁止」なんて文言は「自律と責任を求める校訓」という前文に矛盾するという反論もあり、その結果、生徒の自主性と自律の精神を担保するべきだという意見が優位に立ちます。また、『「勧告する」という動詞が強すぎる、『推奨する』のほうが良いのではないか』といった声もあれば、「通学路のマナーは生徒全体の問題なので、『部活動の』と限定しなくて良いのではないか」、「いや、いきなり全部を求めると実現可能性が低くなるので、まずは一番規模の大きい部活動だけを制限して、残りは引き続き議論していけばよい」といったような話し合いが進んでいきます。

### 本当に解決するのかという議論

登校時のマナーと朝のトラブル問題という議題を受け、このような DR が出されたわけですが、果たしてこの解決策で事態は良くなるのかという懐疑的な議論が出てきます。朝練があったからこそ、生徒の登校時間が分散されていたのが、朝練がなくなるとそれらの生徒も普通の生徒と一緒に時間帯に集中して登校してきます。そうすると、道いっばいに広がって登校する、歩いているときにうるさい、バスが混んでいて困る、などの登校時のトラブルは改善するどころか悪化することが容易に予想できます。それなら、「節度ある朝活動」という文言にしたほうが課題解決になるのかもしれませんが、また、

このような対処療法をしたところで、問題の所在が変わるだけで、生徒の意識が変わらないと根本的な解決にはなりません。その意味で、生徒に行動規範を粘り強く訴え、クラス会議で毎回のように話題にしようとか、PR ビデオを作って意識を変えてもらおうといったような長期展望にたった案が出てくるかもしれません。

#### 修正案の交渉

このような多種多様な意見や問題点を聞き入れ、DR を提出したスポンサーたちは、少しでも多くの賛成を取り付けられるように修正案を出します。「音や声を出す朝活動の制限をすみやかに検討するよう求める」という文言に弱めていたり、他の主文をくっつけていたり、文言を修正したりすることになるかもしれません。交渉を進める中で、最終的には運動部の生徒にも協力してもらうためにも、「早朝時の登校に十分配慮する」といった曖昧な主文で歩み寄ります。場合によっては「朝練についての議論は今回は断念して次回に持ち越す」、もしくは「朝活動の在り方を議論する会議を速やかに設定する」という方針表明で妥結するのもかもしれません。

#### 決議

結局、部活動に限定せずに「早朝時の登校に十分配慮する」という一文で修正案を提出し、全会一致で採択されました。最初の DR から比べると、文言についてはずいぶん妥協してしまったように 思うかもしれませんが、半数が賛成できるものでなくてはそもそも廃案になってしまうわけですし、全体で協力できる案でなければ、採択されたとしても根本的な解決にはなりません。DR を提出したグループにとっては多少物足りない結果だったかもしれませんが、生徒会全体では「みんなで意識を変えていかななくてはならない」という雰囲気や全会一致で作れたことは成果だったという評価が大半を占めました。

ここまで見たように、利害が対立するグループはもちろんのこと、考え方が一致しているように思えるグループであっても、そのアプローチや具体的な解決手段は立場によって様々です。課題を山に例えると、皆それぞれ、今より上のゴールを目指していることは共通しています。しかし「どれだけ上を目指すのか」という目標レベル、どの道をどのように登っていきたいのかという観点、アプローチ、手段についてはバラバラです。特に各々の利益が絡むと「一見良さそうな DR」でも、1 つに意見をまとめることが困難になってきます。会議では、自分たちのポジションと利益をしっかりと定めて、交渉に臨むことが大切です。

補足ですが、定義に関する議論は、解決策だけでなく、その要因と現状をどう捉えるのかによっても変わってきます。定義がしばしばアウトオブアジェンダ（論点外）に設定される 1 つの理由は、この複雑な議論が絡んできて、解決を巡る本筋から離れてしまうからです。

DR にはどれぐらい具体的な内容が組み込まれるのでしょうか。実際のところは、具体的な解決行動を明示するものよりも結構抽象的な文言が組み込まれることも多くあります。まず、国連の決議はある意味メッセージなので、具体的な事項や手続きはあまり入りません。また、先ほどの生徒総会の例のように、細かい点まで突き詰めようとしても、結局は全体の合意を取り付けるのが難しくなっていきます。国際問題となればなおさらです。そもそも立場も状況も国益もばらばらの国連会議において、過半数が賛同できる案となれば全ての細かい点で争うことはできません。第 1 回目の DR 提出時ですら、利害が一致している国同士が集まっているはずが、かなりの妥協を強いられていきます。さらに修正案では、スポンサー国が多くなるにつれて、ますます抽象度が高くなります。それにつれて自分たちの主張はどんどん薄れていきますが、結託しなければ DR を提出できないし、過半数の賛同が得られなければ採択されない。だから、各論はぶつかるところがあっても歩み寄り、総論で合意を取り付けていくという形になっていくわけです。そして、その対立する各論のところを交渉し、中身や文言を調整、修正していくのです。

その調整の過程で必要になるのが抽象化と一般化です。この 2 つの言葉のチョイスと説明は私独自のものですので、言葉にとらわれずにイメージだけつかんでください。この 2 つのストラテジーは意識、無意識に関わらず、あらゆる交渉やアイデア発想の過程で見られるものであり、模擬国連以外でも有効です。

#### 抽象化

抽象化とは、対立点を段階的に曖昧にしていき、ぼかしていくことです。溝が埋まらない点は、お互いが合意できるレベルまで内容を薄めていくプロセスです。各国、目標レベル、手段やアプローチは異なっても、課題解決を一步進めたいという気持ちは同じです。山に登りたいけど、登る方法や道筋で揉めているのですから、制限や具体論を弱めれば、「それなら登ろう」という国が増えてきます。

生徒総会の例であったように、利害が異なるグループとは具体的な解決策ではぶつかってしまいます。もちろん最大限具体的にしたいし、実効性のあるものにしたい。でも「朝活動の自粛」という文言がある限り、運動部は絶対に賛成できない。そのジレンマの中で文言を変えるわけですが、これを「具体性がないからダメ」と言ってしまうのか、「抽象的でも、全体で小さい 1 歩踏み出せた」と思うのか、ということです。

初級者にはここが難しいですね。熟練者は曖昧な方向性も駆け引きして、文言のニュアンスや整合性でも議論ができるのですが、初級者は「何かの解決策をはっきり出さなくてはいけない」という思いから具体的かつドラスティックな案を求めてしまう。どのあたりまで具体的に踏み込み、どこまで抽象性を残すかというさじ加減が分からず、「結局この DR って何だったの?」と思って終わることもしばしばあります。

## 一般化

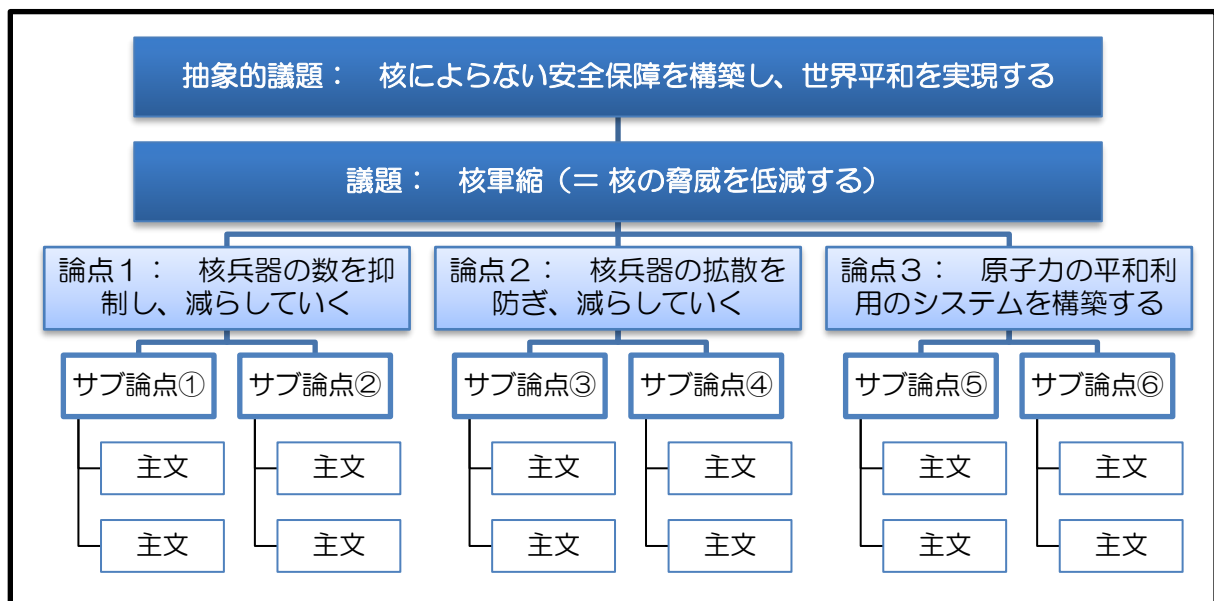
一般化とは、両方をカバーできる文言で2つの意見を1つにまとめるプロセスです。抽象化と重なる部分も多くありますが、アプローチが異なるのであえて分けておきます。

一般化は主文の数と関係してきます。3-3で、DRの主文の数が制限されることがあると説明しましたが、例えば20個も出てきた主文のアイデアを半分の10個に減らさないといけないとしたらどうしますか。当然、1つは優先順位を考えて取捨選択していきます。これは、何が本当に重要なのか議論を通して発見するという行動で、課題の本質に近づくための重要なステップです。もう1つの戦略として、2つの主文をどうにか1つにできないか、といったような合体案を考えますよね。これが一般化です。

この一般化の作業は、アイデアのグルーピングができることとアイデアの上下の位置関係を把握する力が必要です。私がコンセプトマッピングという言葉で表現する通り、情報や概念の地図を頭の中で作るという思考作業です。まず、概念や論点に基づいて主文を分類して、結び付きと関係性を考えます。次に、少し難しい言い方をしますが、上位概念（一般的な概念）と下位概念（具体的な概念）を分けて、上位の概念で2つの主文を包括していきます。簡単に言えば、「その2つは具体的に言うから別々になっちゃうけど、もう広い見方をすれば結局同じ言い方で言えるよね」というまとめ方です。もしくは、2つある主文のうち、1つが上位（一般的）で、もう1つ下位（具体的）の内容だったら、前者を残して、そこに具体的な内容を組み入れていけばよいですね。

模擬国連においてもっとも一般的な概念は議題そのものです（いや、その上に「それによってどう平和実現をしていくのか」という抽象的議題もありますが）。以下のように、議題と論点、決議案を線で結び、組織図としてイメージします。そして、議題や論点を起点としてどのぐらい掘り下げていかななくてはいけないかで、その主文の階層を判断していきます。

模擬国連のコンセプトマップ（核軍縮を例に）



### コンセンサス

国連会議でよく使われる言葉で「コンセンサス〈全会一致の採択〉」というものがあります。つまり、全参加国が賛成できるような決議を目指そうということです。コンセンサスは「全員が満場一致で賛成した」と捉えられがちですが、正確には「積極的な反対がなかった」という意味です。多少の温度差があっても、全員が採択を認めるということですね。

いずれにしても、全会一致なんて無理だろうと思われるかもしれませんが、実際の国連会議でも8割がコンセンサスで決まるということで、それなりに現実にも即した考え方です。模擬国連では「コンセンサスが理想」という価値観も参加者の中で強く、最終目標として位置づけられている感があります。コンセンサスの長所は、全会一致で採択されたものなので決議の実効性があり、また国際社会の総意としてのメッセージも強くなります。一方で、短所は、全参加国が足並みそろえて賛成できるような案であるため、具体性に乏しく抽象的な内容になってしまいかねない、ということです。

### コンセンサスと具体性のジレンマ

具体性と引き換えにどこまでコンセンサスを目指すべきなのか。これは実際の国連でもジレンマになるところです。国際社会のメッセージとして、なるべく多くの国の賛同を得た決議にしたい。でも、多くの国が形として残る文書レベルで公式に賛同できるには、抽象的な内容にせざるを得ません。過去の国連会議でも、例えば核軍縮において、決議に曖昧な部分が多く、実際に大国の核廃棄を促進できず、その後の会議でより具体的な決議を模索するということがありました。

具体策で何歩も前進し、確実に解決のゴールにつなげる一方で、足並みそろった国際協力が得られずに難航するのか、もしくは国際社会の足並みはそろう一方で、その一歩は具体性に欠けて、実際の課題解決は曖昧なまま放置されるのか。そのジレンマの中で、世界共通の利益と自国の利益との微妙なバランスを判断し、一番良い解決策を見つけていきます。

### コンセンサスありきではない

最終ゴールとしてコンセンサスを求めていくことは良いと思いますが、コンセンサスありきで議論を進めていくことは課題解決の本質ではありません。コンセンサスはあくまでも結果論や合意の形態です。大切なのは、「自国にとって、そして全世界にとって良い解決策は何か」という問いに真っ向から答えていくことであって、「みんなが合意できそうな解決策は何か」と探ることはありません。

中高生の模擬国連を見ていると、「コンセンサスを目指そうという形式的目標が強く、議論の順番が逆じゃないかなと思うことがあります。時に最初の交渉からコンセンサスありきで動いている光景も目にします。例えば、ある国が第一アンモデから「むこうのDRグループとコンバインしたいから、そちらの方針に寄せていこう」と訴えていたというケースがあります。最初から落とすところを見つけてスタートしてしまうと、本当に必要な政策議論や国益交渉ができません。

予定調和ありきで会議が進むことは「コンセンサスができた」という達成感は得られるかもしれませんが、それは必ずしも国民にとって、そして参加者にとって有益な決議ではないかもしれません。やはり、国を代表する大使として、まずは自国の立場、主張をしっかりと話し合い、臆することなくぶつかる中で、ぎりぎりの交渉、妥協をしながら合意形成をしていくというプロセスを大切にしてほしいと思います。

3-4 で国益を死守するために会議難民になることを選んだサウジアラビアの事例を紹介しましたが、大使としての責任がコンセンサスうんぬんよりも先に立ち、それによって行動規範を決定していく彼らの姿勢に学ぶところがあります。その結果、もし会議が分裂しても、今後につながる議論であるし、もしコンセンサスに持っていくことができれば、それが本当の意味で価値のある決議になるのです。

### 3-8 DR を作成する

会議をリードし、自分たちの主張を反映させるには、やはり DR を作成することが重要な作業になります。会議では、中心となる生徒たちがパソコンを持ち込み、事前に作成した DR を用意しています。経験の浅い多くの大使は DR を作成するまでに至らないので、他国の用意した DR に乗っかるという形になります。どちらが有利か。やはり実際に文面を作り、自分たちのパソコンで修正するほうが圧倒的に有利な立場に立ちます。そりゃ、そうですよね。文書を提出するのが目的の会議にあって、それを自分たちで書いてきているのか否かは天と地の差です。DR 作成にトライできるようになると模擬国連がぐっと分かるようになります。主導権争いの中で自分たちの作った DR がベースになる保証はありませんが、それでも、自分たちの文言が手元にあるかどうかは大きな違いですし、用意されていれば、組み込める可能性が高まります。

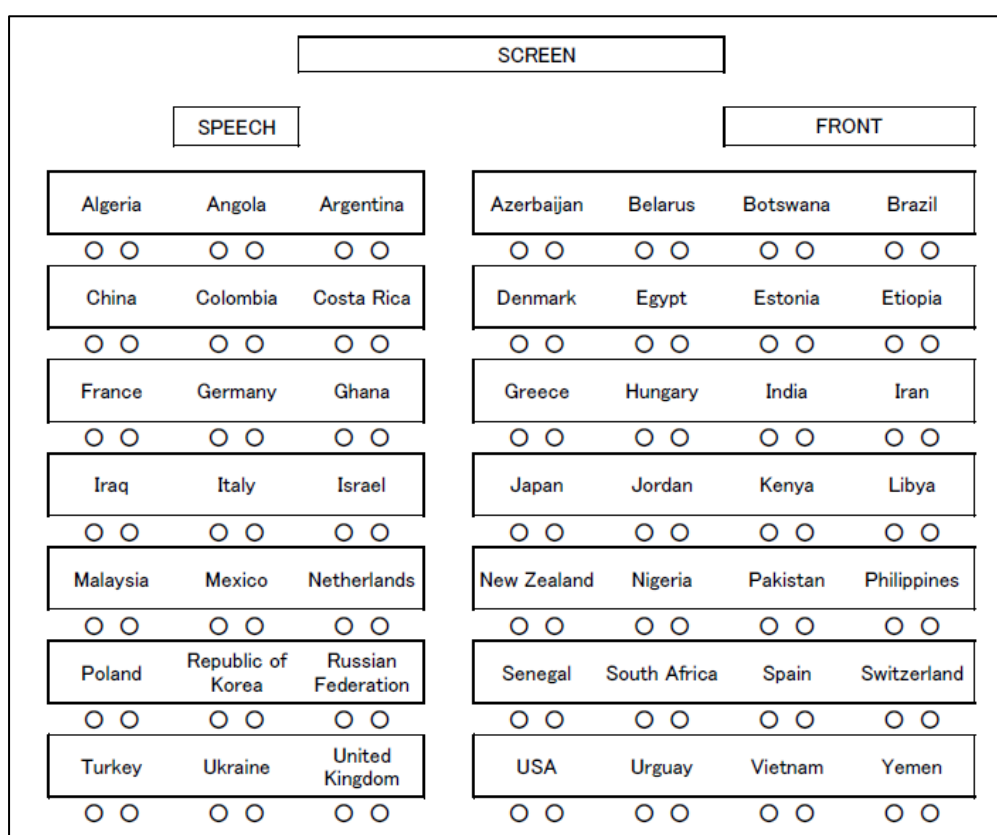
ただし、DR を書くことが会議の振る舞いを決定するものではありません。かなり熟練した生徒でも「DR 作成は得意じゃないから作らない」と決めているペアもありました。彼女たちは、あくまでもリサーチと交渉、調整で会議をリードしていくタイプで、そういう割り切りが功を奏すときもあります（実際に彼女たちは上級者の会議でも中心に入っていけるペアです）。他にも、日本語で文面を作成して、会議に持っていき、ガンガン主張するというペアもあります。確かに、DR を書くことが全てではなく、それを作成するか否かはそれぞれの個性によるところもありますが、いずれにしても、①過去の類似会議の DR を調べておく、②自分たちの求める DR、文面を具体的にしっかり説明できる、ということは必要なことでしょう。

## CHAPTER 4 会議

### 4-1 会議場

会議場の形や座席配置は、場所によって異なる部分もありますが、前にフロント、そして、舞台に向かって左からアルファベット順に参加国が並んでいきます。必要に応じて、非公式会議用に別の部屋が用意されていることもあります。

座席には国名が書かれたプラカードがあり、スピーチを希望する際や動議を出す際などは、それを上に挙げて、意思表示をします。他にも、国名のネームタグが用意されており、動き回るアンモデの際にも、誰がどの国の大使か分かるようになっています。



プラカード



ネームタグ

プラカード、ネームカードについてはホームページ「Max Classroom.net」の模擬国連のページに 193 か国+フロント分保存してあります。ご自由にお使いください。



模擬国連の会議を知るために、まずは国連会議をイメージしてみましょう。

国連会議場の映像でよくニュースなどで流れるのは、大統領や要人がスピーチをしているところだと思います。毎年9月下旬に行われる一般演説は、国連総会の開幕を飾る晴舞台で、各国の首脳が集まり、10日間ほどスピーチを中心に国際外交が展開されます。首脳が集まるこの期間は会議もびっちり詰まり、まさに分刻みでスケジュールが動いていくようです。

193か国も一堂に集まる総会で、実質的な討議や交渉は行われず、延々とスピーチが続いていきます。しかし、そのような声明発表みたいなものだけで国際外交が終わるはずがありません。スピーチはあくまでも国連の表の顔みたいなものです。

裏の舞台では、非公式な会議が行われます。そこでは、元国連事務官の田氏によると、「決議案作りなど本音の意見交換が必要な場合は、それぞれの事案のリード国、あるいは決議案の提案国が中心となって少人数の非公式協議を行い、そうした場で作られた決議案の草案が、全加盟国が参加する非公式協議や公式会議で調整されていく」とのことです。まさに模擬国連のモデ、アンモデと呼ばれる非公式会議と同じです。他にも、廊下外交（Lobbying）と呼ばれる通り、廊下やロビー、スピーチの裏、ランチ、夜のレセプションを含めて、色々なところで実質的な交渉や対話が行われています。これが国連会議の裏の顔、実質的な議論です。田氏は、総会議場に隣接する代表団ラウンジやカフェに「数時間いれば、10数か国の首相や外相に会えるともいわれる」と述べています。そして、表舞台では「〇〇大使（The honorable delegate）」と呼んでも、裏舞台では、盟友の大使同士はファーストネームで呼び合うこともあるようです。この表舞台と裏舞台、それぞれがあって初めて国連会議は機能しているんですね。

#### 表舞台： 公式討議、スピーチ、投票



#### 裏舞台： 決議案作成、ロビー外交、交渉、根回し



## 4-3 模擬国連会議 4つのスタイル

模擬国連では、公式会議と非公式会議を続けざまに交互に繰り返し、しかも非公式会議に費やす時間の方が長いため、イメージしづらいかもかもしれませんが、国連と同じイメージを持ってください。公式討議は表舞台、そして非公式討議は裏舞台と、そもそものシチュエーションや設定舞台が違います。公式討議は Formal Debate と呼ばれ、非公式会議は Caucus（コーカス）と呼ばれます。モデ、アンモデについては、この章の中で、スピーチは次の章で説明を詳しく説明していきます。

### 4つのスタイル

#### Formal Debate（公式討議）

公式な会議進行中の議論です。会議の進行、手続き、投票、決議の採択などがこれに当たります。スピーチも公式討議の1つに数えられます。

#### Formal Speech（公式スピーチ）

公式会議の中でも中心となるのがこのスピーチです。Formal Debate の一部ですが、便宜上分けておきます。大使たちがリストに沿って、順番に1分半～2分ほどで主張や政策を訴えていくというものです。

#### Moderated Caucus（議長調停のある会議：通称モデ）

モデは議長が進行をする非公式会議です。大使は自国の席に座ったままなので、公式会議と同じように見えますが、あくまでも非公式会議の位置づけです。総会議場ではなく、別室でクローズドに行われている調整会議とも思ってください。一般的にイメージする「会議」のイメージに近いもので、細かいやり取りや議論も行います。全日大会はアンモデが多く、全体の議論という意味では、もう少しモデが重視されてほしいと個人的には思います（国際大会はモデが全日大会より重視されます）。

#### Unmoderated Caucus（議長調停のない非公式会議：通称アンモデ）

The 非公式。非公式中の非公式です。会場のいたるところで（時には別部屋も使ったりして）、大使が自由に議論し、交渉します。表舞台の華はスピーチですが、交渉や駆け引きの主戦場はこのアンモデであり、各大使かなり気合が入ります。初心者に説明するとき、私は「ゴチャゴチャやるやつ」と呼んでいます。外から見てるとそう見えるほど混沌と進んでいき、何が話し合われているのかわからないからです。新聞社の締め切り前の編集会議ってこんな感じなのかな、なんて思ってしまう光景です。会議の大半がこのアンモデに費やされます。特に日本の大会ではこのアンモデが好まれる傾向にあります。ここでは、意見調整、DRの作成などが行われます。

議長（場合によっては手を挙げた国）が司会をしながら進行させていく非公式会議をモデレーターコーカス（通称モデ）と言います。大使は座席に座ったまま、ただし非公式会議なので、言語設定が日本語でも良いとされる場合が多くあります。学級委員長が前に出て、議事進行を仕切り、他の生徒が発言をする「学級会」のような感じで、意見や質問をかわしていきます。実際の DR 作成の舞台はアンモデですが、しっかりと議論する、意見を交わす、質疑応答をするという意味では、モデは必要不可欠で、個人的にはここをしっかりと設定することが重要だと思っています。

モデはいろいろな目的で開かれることが可能ですが、主な目的を以下に挙げておきます。なお、①～③は必須ではなく、アンモデのみで進んでいくこともあります。モデのモーションはアンモデよりも優先順位が低いため、特段モデに対して強い必要性が訴えられなければ投票に付される前にアンモデになってしまうことが多くあります。大使は「早くアンモデに入って交渉したい」と思っているため、議長が裁量でモデを設定しない限り、なかなかモデにならないのも実情です。

- ① どのように会議を進めていくのか確認、議論したい。

「会議全体をどのように進めていくのか、論点は何か」など、まず実際の議論に入る前に共有、確認、議論したいという場合に行われます。

- ② 各国の論点や重点政策を共有したい。— 1 か国 30 秒ずつマイクを回して

①と同様に、アンモデの交渉に入る前に、各国の論点、重点政策、考えている会議行動を共有したいという場合に、1 か国 30 秒ずつを目安にマイクを回していく形で行われます。特に、論点が曖昧な場合、議論を軸を定めるためには有効です。ただし、PP に書いていることを繰り返すだけの国も多くなってしまい、論点整理や会議行動の事前共有という要素に欠けることもあります。

1 か国 30 秒となると短いように思えますが、50 チームもいたら、マイクを回す時間なども入れると、30 分以上はこれが続くのです。ぼーっと聞いてしまいそうですが、しっかり、各国の PP と照らし合わせながら、改めてグループ形成の戦略をペアで確認しましょう。また、これだけ単調な時間ですから、淡々と話していたら他の大使にメッセージは届きません。単に政策を述べるのではなく、相手に問いかける 30 秒にしましょう。

- ③ アンモデの後に、それぞれのグループでどんな話し合いが行われたのかを共有して、議場を整理する。

今、議場にはどのような意見とグループがあるのかを整理するために行われます。それぞれのグループがどのような政策を中心に DR を作ろうとしているのか、などを共有し、質疑応答をすることによって、全体像を把握します。その中で、態度を決めかねている国に対して調整をアドバイスしたりして、スムー

ズな会議運営に活かします。

- ④ DR や修正案が出された後に、それに対する議論を行う。

DR や修正案の提出に際して、提出国はその案を説明する時間が与えられますが、それに対して、1 つの DR に対して 10~15 分程度の時間で、質疑応答をする時間を設けます。

### つばぜり合いで火花が散る

会議の冒頭に 1 か国 30 秒ずつマイクを回していく②のモデでは、アンモデに向けたグループ形成の呼びかけも行われ、つばぜり合いが早くも見られます。

例えば、マレーシアが「ASEAN の人はこの後、前の掲示板の前に集まってください」と言ったとします。すると、インドが「アジアで集まりましょう。アンモデの時、後方に集まってください」と言ってきます。そして、カンボジアが東アジア諸国は右前のドアのあたりで話しましょう」とかぶせてきたりもします。

同じグループなのに、呼びかけている集合場所が違うのです。見ている側は「うわ～、どうなるんだ」と思いますよね。すでに主導権争いが始まっています。どの国も自分が中心になりたいのです。メモ回しでも水面下で同様のことが起きています。その結果、どこに集まるか、、、それはアンモデが始まってからの楽しみです。

アンモデでは、会場を動き回り、DR 作成に向けて本格的な議論、交渉、主導権争いなどが行われていきます。

まず、アンモデは熱い！ 松岡修造並みに熱い大使もいます。モーションが可決され、木槌がなると、一気に大使が立ち、「EUはここに集まってください！！」とか「さっきメモ回した〇〇グループの皆さん、後ろに来てください！」と大きな声が飛び交います。グループ形成の火花がバチバチ散るのです。

グループを集めるにあたっては、同じグループの有力国同士が事前にメモで交渉しており、結託して声をかけるというケースもあれば、前項のマレーシア、インド、カンボジアの例のように、主導権争いの中でそれぞれ違う集合場所が指定されている、といったことも起きます。そんな様子を、実況と解説を交えて、シュミレーションしてみましょう。

#### 実況中継

マレーシアのところに多くのアジア諸国が集まり、グループが一気に形成されそうです。カンボジアのところには数か国が集まりました。この数か国でDRを作りながら、マレーシアのグループや他のアジア諸国と交渉していこう、となりそうです。インドも色々な国に声をかけていますが、なかなか集まってきません。仕切り直して、二人でどの国、どのグループと話していくのか、手分けして折衝していくようです。

#### 解説

どうしてマレーシアのところに集まるのか。これは本当に国益としてマレーシアという国と組みたいということもあれば、単純にPPを見てより近い政策のところに集まっているということもあります。場合によっては、その大使を担当している生徒に対する信頼感もあり、「〇〇さんは前の練習会で強かったからそこに乗っかろう」ということも現実的にはあります。

インドは悔しいでしょうね。でも、彼らはまだまだ会議の中心になりえます。グループを集めようとするぐらいだから、DR作成の準備は万端なはずでしょうし、後追いでDRグループに入ったとしても、大きな影響力を持ちます。なので、気付いたらマレーシアとインドがDR作成の中心になっていて、彼らの主張をもとにアジアの意見が取りまとめられる、なんて展開も考えられます。

## グループダイナミズムを見極める

アンモデが始まると一気にグループダイナミズムが発生します。とりあえず様子見、とりあえず話してみよう、みたいなゆっくりした時間の流れではなく、場合によっては勢いよくグループが形成されていきます。そんな雰囲気にもまれる失敗例を主に2つ見てきました。

### とりあえず、なんとなくグループに入って、自国の利益を失う

初級者や準備不足のペアですが、彼らはとりあえずどこかに巻き込まれることとなります。しかし、それは「とりあえず」「なんとなく」巻き込まれただけで、必ずしも自国の利益が守れるDRグループではないかもしれません。なんとなく入って、なんとなくサインして、よくわからないまま自国の主張と違う流れに乗ってしまうということも何回も見てきました。しかし、自国を代表する大使の責任という点から、これは避けなくてはなりません。

### 頭数だけ集めようとして、破たんする

これはむしろ経験者のペアに見られます。中心になりたいがあまりに、主張の異なるグループまで頭数をそろえるために取りまとめようとして、後々分裂してしまうというケースです。一言でいえば、ごり押し分裂です。最初グループの中心にいたはずの国が、結果、取り残されてしまうということもあります。主導権争いに加えて、DR提出の焦りもあって、「まずはなんとかグループ作らなきゃ」「自分たちのDRを突き通したい」という思いがあらさまに出てしまうと他の国が引いてしまいます。やはり押しだけの交渉では破綻してしまいます。

グループダイナミズムに乗り遅れないことも大切ですが、その勢いにもまれることなく、がつつきすぎず、全体の様子を見て、色々なグループと折衝、交渉していければベストです。特にアンモデの最初は動きも激しいですが、それはあくまでも第1段階です。比較的流れがゆっくりになり、グループが固定しかけてからも、しっかりと国益をもとにDRを見極め、大使として動いていけるようにしましょう。

## 4-6

## メモ回し

模擬国連では、会議の進行中に大使があちらこちらで手を挙げて、指に挟んだ紙をスタッフ渡して、そしてスタッフはその紙を別の大使のところに届けるのです。これがノートパッシング、俗に言う「メモ回し」です。実際の国連会議では水面下交渉はメールや携帯電話、裏での非公式会議などいろいろありますが、模擬国連ではこのメモが交渉の大事なツールとなっています。モデの間、スピーチの合間など、他国と紙で交渉をしているのです。メモ回しはスピーカーの募集が終わったところから解禁されるのが慣例です。すでにこの段階から国同士の交渉や駆け引きは

このメモで行われているのです。

メモを回す係（アドミニ）は、大きな大会では運営スタッフが、練習会や小規模の大会では会場校のお手伝い係や見学者、場合によっては教員がこの役を担います。50 チームが参加すると  
なると、ピーク時は 10 人はメモ回し係が必要になります。

メモの例（資料なども回すことができます）



### スピーチ中はメモ回しを自粛する

特に会議の冒頭はグループ形成および最初のアンモデに向けてさばききれないほどの数のメモが飛び交います。しかし、ここに 1 つ問題があります。どうしてもスピーチの間にメモ回しが行われてしまい、スピーチが軽視されてしまうのです。時によって、メモ回しが激しすぎて、スピーチを抑えてそちらが主になってしまう大使も多くいます。

つついメモ回しに大使もスタッフも必死になってしまいがちですが、会議の中心はあくまでもスピーチです。国連の一般演説中に、他国の大使や首脳が登壇している際に、携帯をいじっていたり、メモを回していたりすると無礼になるのは言うまでもありません。

同様に、模擬国連でも、スピーチ中は登壇している大使に敬意を払い、しっかりと耳を傾けるためにもメモ回しは自粛します（会議によってはその行為自体が禁止されます）。メモ回しのスタッフ側も、大量のメモを受け取り、宅配業者がそうであるように、時間内に必死に届けなければと思ってしまいますが、スピーチの時間は動きを止めます。仮に裁ききれず、最初のアンモデまでに配達が終わらなくても、それはそれでいいのです。メモはあくまで水面下交渉の紙にしかすぎません。会議の華であるスピーチを邪魔してまで配布するものではありませんし、大使もスピーチを無視してまで受け取るものではありません。裁ききれなかったメモは、その後、例えば大使がその場を離れていたとしても、座席に置いて来れば問題ありません（時々、アンモデ中にわざわざその大使を探して渡しに行く律儀なスタッフを見ますが、その必要はありません）。大使の皆さんも、もしメモが遅れて届いても、「メールを確認するのが遅かった、入れ違いだった」ぐらいの気持ちで受け止めるようにしましょう。

## メモを用意する

まず開会前から、折衝したい国を決めて、メモを用意しておきましょう。ただ回せばよいというわけではありませんが、積極的に会議に参加するためにも最初の段階で5～10ぐらいはメモを回したいですね。

最初のうちはどの国にもメモが結構回ってきます。初参加でメモが届くと嬉しいものです。しかし、会議が進むにつれ、グループの中核から外れている国にはメモが回ってこなくなります。交渉が進むと核になる国ができるので、それ以外の国は蚊帳の外になってしまうからです。

なお、メモは大使たちが自分で用意しますが、メモ帳を切り取ったものもあれば、担当国の国旗を印刷したオリジナル用紙を用意してくるペアもいます。

## メモを送る相手と目的を絞る

最初のメモは「とりあえず色々な国に送っておこう」という大使もいますが、はっきり言うとそのような声かけや普通の交渉であればアンモテで行えばよく、メモでやる意味はありません。では、誰に何をメモで送るのか。最初のメモの意義は、アンモテで他国（特にライバル国）が自分の本命にオープンに交渉してくる前に水面下で交渉を持ち込むことにあります。

例えば、アメリカとして核軍縮で交渉する際に、まずは押さえておきたい相手はイギリス、フランスあたりのヨーロッパの核保有国で、その国とともに「アメリカの核の傘」に入る国を取り込んでいきたいのです。核保有国という点については、ロシア、中国という相手もタッグを組む交渉相手になりえますが、その2か国とは安全保障上は難しい立場にあるので、安易にそちらと政策を組みたくないという意図もあります。しかしイギリスが「とりあえずロシア、中国も含めて保有国と組んでいこう」と動き出してしまったら、自分たちの戦略は最初から修正を余儀なくされます。イギリスやフランスがロシアとコンタクトをとる前に、メモでなんとしてもアメリカの意図、グループ形成を伝えたいのです。もし、出だしからイギリス、フランスが同じ方向で交渉に乗ってくれたら核の傘に入る各国も取り込み、強固な勢力を形成できます。

このように、いろいろな国がオープンに交渉を始める前にどこと何を交渉すべきなのかを明確にし、的を絞ってメモをおくることが有効です。しかし、前述のとおり、そのメモはアンモテの前に配達されるかわかりませんし、メモだけでどれだけ交渉成果がでるかはわかりませんが、一つの戦術として用意しておきましょう。

## メモ作成、メモ渡しの注意事項

スタッフは多くのメモを預かります。私自身もメモ回しに参加しますが、数が多いとちょっとした気遣いの有無でメモ回しが楽にも面倒くさくもなります。ぜひ宛先含めて「見てわかる」「配達するに堪える」メモを作成してください。その点から、私の経験も含めて、あえてここで注意事項として記載しておきます。

- From 欄、To 欄をメモの外側にはっきりと書く。

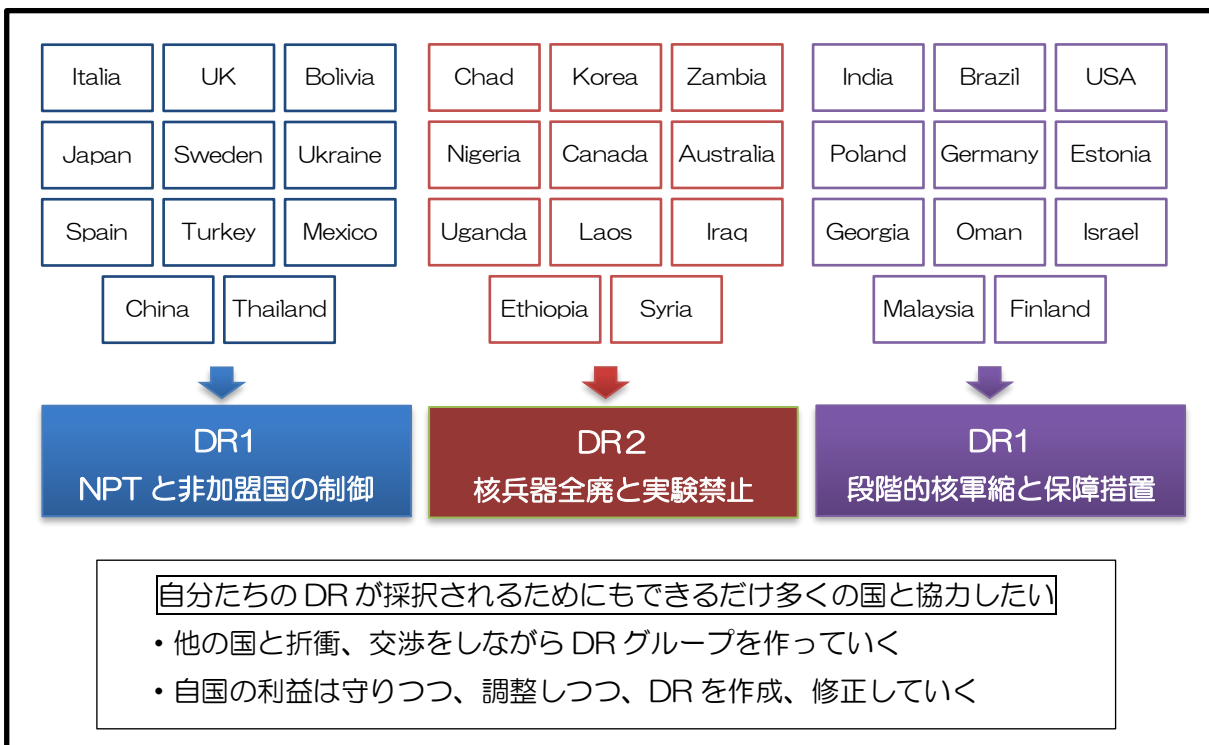
中に宛先を書いて折り曲げられると、それを開かなくては配達先が分かりません。そのまま自国と相手国が分かるようにしましょう)



- 返信するときに、From 欄と To 欄は新たに書き直す。矢印での宛先変更はしない。  
受け取ったメモにそのまま返信を書いてもとの相手に送るケースがありますが、From 欄と To 欄が⇄という矢印で交換されているだけのものを受け取ります。大使からすれば「分かるでしょ」と言いたいのですが、1 対 1 でメモを配達しているわけではないので、他国にもメモを回す過程で、結局どちらに届けられよいか分からなくなります。しかも、「返信の返信（再返信）」や第 3 国に転送するメモも受け取ったことがあります。矢印が複数あったり、ぐちゃぐちゃしていたりしており、当事者が思っているほどこちらは分かりません。）
- メモをスタッフに渡すとき、受け取る時は軽く会釈をしましょう。  
メモを回してもらって当然という態度ではなく、メモ回しのスタッフにもきちんと敬意を払いましょう。ただでさえ、メモを渡すときはウェイターを呼ぶような感じで、偉そうに見える行為です。私は教員なので、「お願いします」「ありがとうございます」と声をかけてくれる大使もいますが、そこまでしなくても、ほんの軽い会釈で構いませんので、感謝を表して、気持ちよくスタッフが仕事ができるようにしましょう。そこも大使の品格です。
- 一気に大量のメモを送らない。  
スタッフが回せるメモの数には限度があります。特に会議冒頭は許容範囲を超える数のメモを渡されますが、前項で述べたとおり、スピーチの間はメモ回しできませんので、結局は配達しきれないで終わってしまいます。必要なメモを絞り、回すようにしましょう。なお、一度、用意してきた DR の原稿を「全参加国に配ってください」という依頼を出した大使がいました。それは、メモ回しを超えるものですので、アンモデで自ら各国に渡し、訴えるべきものです。

前半戦は DR の作成です（2 日間会議なら、初日がこれに当たります）。アンモデ開始を皮切りに、グループを形成し、主張をぶつけながら DR 作成に取り掛かります。ある程度の大枠合意ができれば、核となるグループが PC を開き、協力する国がそれを囲み、意見をぶつけ合いながら 1 つの DR を作成していきます。

DR 提出を前にした中盤になるとアンモデもずいぶん様相が変わってきます。DR 作成の中心にいるグループは 1 分 1 秒たりとも予断を許さないほどせわしなく動いているのですが、一方、DR の中心にいないグループは取り残された感が出てきます。全日本大会ぐらいになると必死にみんなが議論に食いついていくのですが、初級者の多い練習会では残念ながら参加度の差は顕著に見られます。

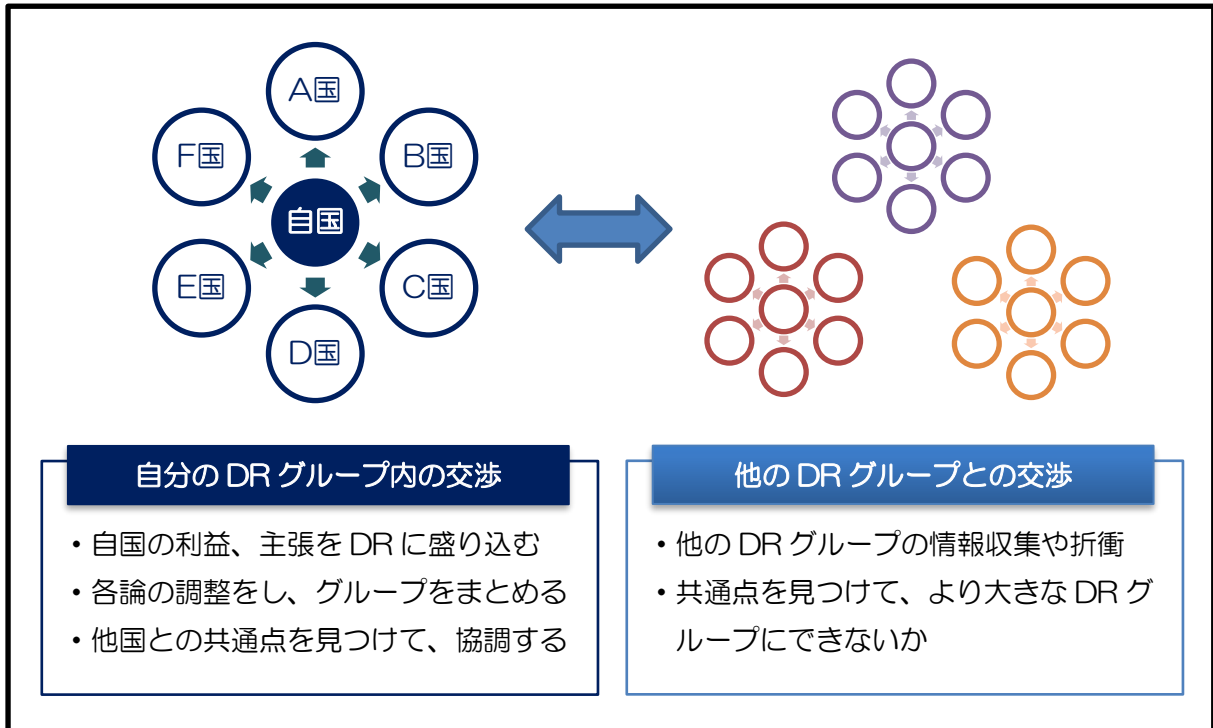


（上記のグループはランダムです）

### 内政と外政： 2 つの交渉

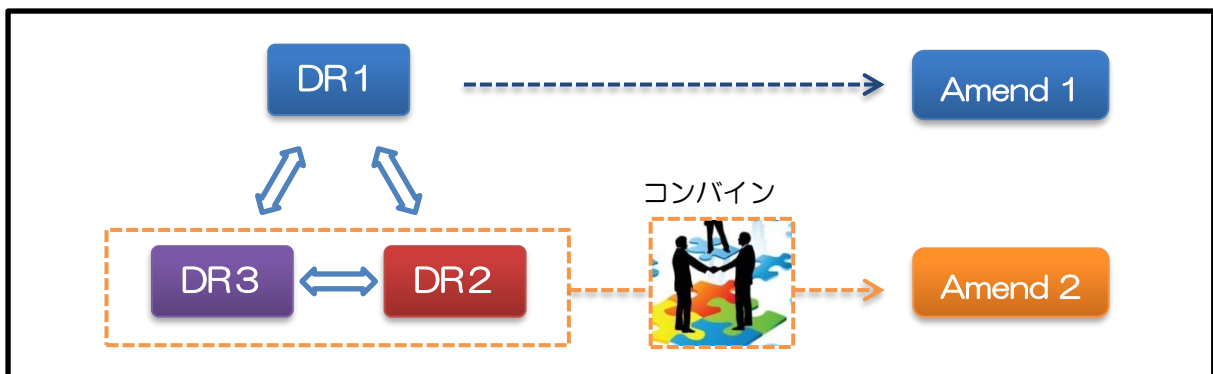
DR 作成の交渉には 2 つのベクトルがあります。内政と外政という言い方がしっくりくるかもしれません。アンモデでは 2 人 1 組で動いても意味がありません。もちろんお互いがコミュニケーションを取りつつも、それぞれの特性に合わせて、立場、役割を決めて動けるようにしましょう。場合によっては、2 人が異なる DR グループの中に入り、交渉を進めながら、より自国の利益に合う DR を見極める、という方法もあります。両方にサインするふりして直前に片方を裏切

るというような道義的に問題のある方法はあまりよろしくありませんが、DR を見比べて、色々な国と交渉をフラットにしてみても、賢く動くということは外交戦略として当然かつ必要でしょう。



**4-8 会議後半の動き – アmend、コンバインに向けて**

後半戦は、修正案（アmend）の提出です。投票で過半数の同意が得ること、あわよくばコンセンサスを目指して、交渉が進んでいきます。ここでは、クオリティ作業とクオンティティ作業（数の作業）が必要になります。前者は、DR を実効性、具体性を担保しつつ、より多くの国が賛同できる質に向上させていく）ということ、後者は単純にスポンサーの国を増やして、グループを大きくするという事です。



なぜスポンサー数が多いほうが良いのか、なぜより大きいグループの方が良いのか。中には「グループ大きくななくてもいいじゃない」と疑問に思うかもしれませんが、それは、DR 採択が投票によって行われるからです。最低でも過半数の賛成票がほしいですし、より実効性のあるものにするには、より多くの国が賛同してくれている決議にして、国際社会の一致した声にしたいわけです。自国の DR には必ず賛成票を投じなくてははいけませんので、DR グループが大きくなればなるほど、賛成票が増えていき、結果、採択へ近づいていくのです。そこで、利害の近い他の DR グループと交渉し、コンバインを試みます。

しかし、これはなかなか簡単ではありません。DR 提出に向けた第 1 段階のグループ形成は、利害の一致が分かりやすく、共通項も見つけやすかったのですが、しかし、アmendに向けた第 2 段階の交渉は、そもそも利害が一致しないから異なるグループを形成し、異なる DR を出していた国々が相手です。第 1 段階では磁石の S 極と N 極をくっつけていくかのように一気にグループ形成ができたところもあったかもしれませんが、第 2 段階では場合によっては S 極同士をくっつけようという試みで、難易度が上がっていきます。もちろん主義主張が違うので簡単にはくっつきません。かといって、過半数を取れなければせっかくの DR は廃案で、強硬な姿勢を貫くことは最終的な利益にはなりません。そのジレンマの中、延々と交渉が進んでいくのです。

第 1 段階で十分妥協したはずなのに、コンバインでさらに譲歩を重ねていくことになります。最初に期待していた DR と比べると、自分たちの Win は一粒、二粒しか入っていないかもしれない。でも、その小さな Win をいかに確保するのか、そして妥協の中でも自分たちのボトムラインは死守するという交渉になっていきます。

### **自国は拡大を目指し、相手グループは拡大させない**

Win-Win を目指した積極的なコンバインだけではありません。仮に DR1 が最大勢力だとしましょう。その主張だけは絶対通したくない DR2、DR3 のグループが、自分たちの主義主張は相反するものなのに、DR1 に対抗するためだけに手を組むこともありえます。与党にぶつかるための野党連合みたいなものですね。極端に言えば、Lose を出さないためのコンバインです。

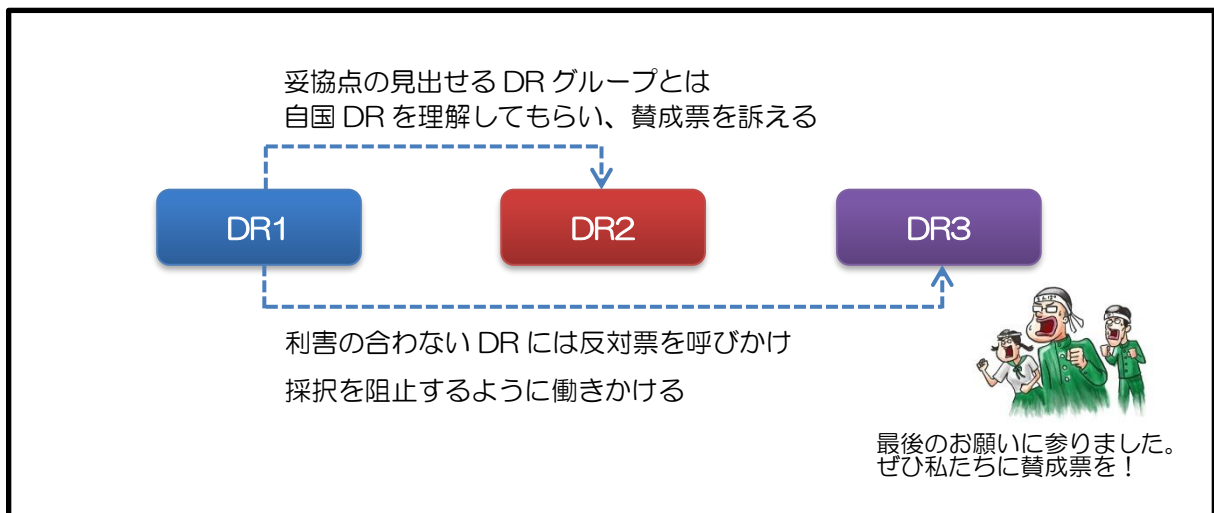
またこのケースはどうでしょうか。DR1～DR3まで 10 人ずつのグループがあるとします。30 か国の会議で過半数は 16 です。一度スポンサーになったらそこから抜けられないので、別の DR グループを切り崩して賛成してくれる国を連れてくるという手法は使えません。DR グループ同士のコンバイン、つまり母数の足し算で国の数が増えていきます。自分の DR1 を通すには、DR2 とコンバインをすれば、過半数 20 が確保できるので、投票結果を待たずとも採択が決まります。逆に敵対する DR3 に DR2 を取られてしまったら、自国の DR の廃案、そして敵対 DR の採択、という最悪の結果を招いてしまいます。この状況は他の DR グループも同じで、三者とも「自分たちはコンバインを目指し、相手にはコンバインさせない」ということが死守すべきラインになってきます。

アmend、コンバインという段階になると、中心となる国がますます絞られてきます。それぞれのグループの中心となる国同士が調整をしており、その他の国は蚊帳の外。座って待っているなんて光景も見られます。議論の弱肉強食を目の当たりにします。

修正案が提出されて、作業としては一段落しても、まだ交渉は続きます。自分たちの DR が過半数を取れるように、投票を呼び掛け、また利害の反する DR には投票しないように呼びかけていくのです。選挙の「最後のお願い」みたいなものです。投票直前までギリギリの交渉が続いて行くのです。

一方で、各大使は修正案をしっかりと読み込み、どの DR に賛成票、反対票を投じるのかをしっかりと検討します。もちろん、自国がスポンサーとなっている DR には賛成をしないといけないが、それ以外についても自国の利益やプライドを考慮に入れ、責任ある一票をどう投じるのか考えなくてはなりません。

投票については、Chapter 7 (P73) で見ていきます。



## Column 2

### ～世界平和を目指した「純」な思い～

模擬国連で重要なのは、国益を守るために交渉しながらも最終的には「みんなでより良い世界を追求しよう」という共通ゴールが中心にあるということです。立場も文化も違えば、意見もぶつかり、交渉も難航し、紛糾することもあります。でも、それが「世界共通の利益」を探ろうという未来志向の議論の中で行われるからこそ意味があるのです。大会には「優秀賞」などの表彰もありますが、本来勝ち負けを決めるのが目標でもなければ、ゲームでもありません。模擬国連の至極のゴールは「世界平和：より良い未来を目指して」ということです。そこに中高生が模擬国連に取り組む意義があります。現実の国際会議は、世界平和よりも個々の利益が優先されることもあります。もつとリアルだからこそ、もつと生臭いものです。しかし、中高校生の大会は本当に「世界平和を目指す」マインドで溢れています。「この課題を解決していこう」、そういう目線で議論が進んでいきます。

模擬国連はあくまでも高校生同士が仲良くやる会議ですから、現実の生臭さがない分、馴れ合いや予定調和もあれば、茶番染みた部分も少なからずあります。特に日本の大会など、均質な価値観の生徒同士で行うとその傾向が強くなります。そりゃ、そうですよね。高校生が2日で至る結論だったら、とっくにこの世界は平和になっているはずです。でも、「茶番でも良いのかな」と思う部分もあります。中高生だからこそ、夢を持って模擬国連に臨んでほしいと思うんです。現実を生臭く語るのではなく、現実に基づいて夢を語る、そういう若者を模擬国連は育ててくれるんだな、と感じています。

中高生は単純です。理想論の決議案が2日間で全会一致で通ったりします。でも、単純の「純」は純粹の「純」でもあります。だからこそ、それができるんですね。その純粹さ、世界平和を目指したいと思う生徒の思いや、キラキラとした日の輝きこそ、一番大切です。

前任校が4年連続NY大会に進出したこともあり、現在自分が指導する生徒に対しても「全国大会に出場して、できれば世界に進むぐらいの頑張りを見せてほしい」という思いはどこかにあります。経験不足、リサーチ不足の生徒を指導するともどかしく思うことも無きにしもあらず。「楽しみたいだけじゃなくて、しつかり取り組めよ」と思うことは常です。しかし、リサーチ不足や交渉力、知識はまた指導していけばいいし、今後の経験で補えます。それよりも今、中高生の彼らが「こういう未来にしたい」という思いを持ち、それを語っていることが大切です。ゲーム感覚も大いに結構。ゲーム感覚で世界平和に触れ、これだけ社会課題を考えるきっかけができるなら、それもいいじゃないか。そのきっかけをつかんだ生徒をどう後押しするかはまた私たち教員が考えればいいのか、と。

繰り返しになりますが、全日本大会に出て、賞を取るだけが模擬国連ではありません。強豪校だけが模擬国連のモデル校ではありません。なぜか。「世界平和：より良い未来を目指して」、この基本理念があるからです。結果や賞だけを求めずに、教員として、大切な理念を体現できるように、より多くの生徒に広げていけるようにできればいいな、、、なんて偉そうに思っています。

## CHAPTER 5 スピーチ

### 5-1 スピーチは会議の華

スピーチは、自国の立場や政策を表明する重要な舞台で、国際会議の華です。国連でも各国の首脳、外相、事務総長に限らず、その他の著名人が総会の舞台で弁をふるいます。有名なスピーチをいくつか紹介します。

- ・「世界で最も貧しい国の大統領」の愛称で知られる元ウルグアイ大統領のムヒカ氏の「持続可能な開発」についてのスピーチ（2012年、リオ会議）
- ・バングラディッシュのマララ・ユスフザイさんの女性の人権と教育についてのスピーチ（2013年、国連本部）
- ・女優エマ・ワトソン（UN Woman 親善大使）によるフェミニズムについてのスピーチ（2016年、国連本部）
- ・オバマ元アメリカ大統領の任期最後のスピーチ（2016年、国連総会）



ホセ・ムヒカ



マララ・ユスフザイ



エマ・ワトソン



バラク・オバマ

#### 一般演説の時間にまつわるエピソード

一般演説の持ち時間は1か国15分が慣例です。残り1分になると会議場前の緑のランプが黄色に変わり、時間が経つと赤ランプが点滅をするそうですが、この慣例を堂々と無視するケースもあります。リビアのカダフィ大佐は2009年の総会での演説は95分にも及びます。安保理を「テロ理事会」と痛烈に批判し、国連憲章の冊子を放り投げてしまいます。もっと強者がいます。キューバのカストロ議長の国連デビューとなる演説はアメリカに対する攻撃姿勢で269分という総会での最長の記録を残しました。国連史上一番長いスピーチは1957年の安保理におけるインドのメノン国連大使によって作られました。その時間はなんと8時間。これはカシミール地方の領土問題に関する議論に対する議事妨害です。彼は途中過労で倒れて病院搬送されたものの、それでも止めず、議場に戻った後も1時間演説を続けました。

他にも、Newsweekのサイトに「国連総会の仰天スピーチトップ10 (The Top 10 Craziest Things Ever Said During a U.N. Speech)」と題して、悪い意味で(?)印象的なスピーチが紹介されているので、興味ある人は読んでみてください。

<URL : <http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2009/09/10-2.php>>

スピーチは公式討議の言語で行われ、一般的な大会や練習会では英語です。時間は1分から2分が目安です。キューバであっても、リビアであっても制限時間内におさめないと、議長の木槌になります。

スピーチは会議の中心ですので、それが終われば、議論は終わるということになります。具体的に言うと、スピーカーズリストから国がすべて消えて、発言する国がなくなったら、決議案の投票に入ります。仮に議論が熟す前に発言国がなくなった場合、「このままでは投票に移れない」と判断されれば、議長がスピーチを促し、希望する国を募ることもあります。

### 目的

スピーチの本来の目的は、熱いメッセージを伝え、知ってもらい、共感してもらうことです。その中で、自国の政策やDRを訴え、議論をリードし、決議案作成の同志を募るといった戦略的な目的も果たせるようにしていけるとベストです。

### 内容

スピーチに組み入れる内容ですが、私は生徒に以下の4つの内容を入れるように指導します。

- ① 伝えたいメッセージ
- ② その課題に関する自国の状況と立場
- ③ 重要視する論点、求めるDR、解決策の方針
- (④ 組みたい仲間)

まずはポジションペーパーを英語で要約するということからやってみましょう。その後、「どのように自分たちの思いを伝え、政策の正当性を訴え、共感してもらうか」という視点で修正を加えてみましょう。

また、スピーチを作成する際のポイントの1つとして、具体的な内容をどこまで盛り込むか、ということがあります。最大2分という限られた時間で政策を訴えるのが主眼なので、細かいことは入れすぎない方が良いのですが（というより、入れても聞いている側は分からない）、ある程度、核となる根拠などは数字や具体例を入れて話したほうが、政策の正当性も高まります。

過去のエネルギー安全保障の会議の際に、生徒に指導した際原稿が残っていたので、ここに掲載します。< >内の斜体の文字（白黒なら薄字、カラーであれば青字になっています）が私からのフィードバックです。初稿なので、生徒の文面も短絡的ですし、私のフィードバックも簡素ですが、1つの参考にはなるかと思えます。



Hello, honorable chairs and fellow delegates, We are the Ambassadors of the Republic of Korea. At this energy security session, we, the Republic of Korea, would like to conduct the following in cooperation with the other member states.

First of all, our country has a significantly limited amount of natural resource reserves. Consequently, we request the energy exporters to supply us with the energy at a stable constant price. *<Give some examples or numbers, such as the ratio of domestic or imported energy supply and the major kinds of resources that you are dependent on.>*

Unfortunately we are currently not in a position to contribute to the global energy security. *<I think it would be safe to delete this expression, as it sounds that your country has no clear standing point on the current energy problem. It's somewhat true that your country does not control the energy market but you are of course concerning the matter. So, I would say "As we are dependent on imported resources, the unreliable supply and prices are crucial problems affecting our industry and life-supports... continued...>* Therefore, we would like to contribute to the global society by advancing technological developments. Specific examples include technological developments in both renewable energy and discovering of resources. ***Especially***, renewable energy must be developed by us, mankind, since there is an anxiety of resource exhaustion in the future. In addition, we would like to commend the use of sustainable and renewable energy domestically.

*<SPECIFY who you would like to tie up with. You said "cooperation with the other member states," but who are they? Say names of the countries, groups or areas, or features of the countries that you 'd like to talk with >*

Thank you for giving us the floor.

*<Overall, your speech seems organized enough as the first draft, Please revise it to more clarify and implement your MESSAGE. You'd better relate your resolution not only to the interests of your own but also to those of all the countries concerned, by arguing how and why this leads to the shared benefits of those participating countries.>*

## 5-3 スピーカーズリスト

スピーチは勝手に回ってくるものではありません。自分たちが希望しないとスピーチできません。議長が会議冒頭にスピーチの希望国を募るのですが、そこでプラカードを挙げてください。すると議長がこれらの国を呼び上げ、右のようなスピーカーズリスト(Speaker's List)に記載していきます。どの順番でリストに入れていくかは議長の裁量です。簡単に言えば、議長の目についたプラカードの順と言えるでしょう。

もしここで手を挙げそびれても、フロントに「スピーチを希望します。リストに入れてください」というメモを渡せば、リストに入ります。その場合は、すでに多くの国がリストに名を連ねた後ですので、順番は最後になり、場合によっては、時間の関係で回ってこないということもあります。

スピーチは1度終わり、リストから消えれば、フロントにメモを回して、何度でも希望することができます。議論を続けるにはスピーチを続けたいといけませんので、初心者の会議では、スピーチをする国が不足して、同じ国が何度も演台に立つということが起きることもあります。

### Speaker's List

India  
Bolivia  
Ukraine  
Germany  
New Zealand  
South Africa  
Italy  
Vietnam  
USA  
Romania

### スピーチの順番はいつが良いか

スピーチの順番は自分たちで選べないとはいえ、いつ回ってくるのかは気になるところですね。(ちなみに、時間切れで回ってこないというリスクはありますが、後でやりたい場合には、冒頭で希望せず、後でメモをフロントに回すという手法があります。)

早い順番であれば、まだ会議が動き始めてないので、自分たちの用意した政策をそのまま訴えれば良いという利点があります。また、最初の方が観客が聞き飽きていないので、フレッシュには聞こえます。本物の国連でも、最初のほうが注目度が高く、人気があるようです。

一方、後になればなるほど、会議の流れができてきているので、最初に用意したスピーチを修正しないとイケない場合があります。例えば、自分たちの用意した論点がすでに会議全体からは重要視されていない場合、そこを訴えているものは意味がありません。後半の利点は、より会議の核心に迫ったスピーチができる、よりDRに基づいたスピーチができるということにあります。雑に言ってしまうと、初心者は絶対に速いほうが良い、熟練者は後ろでやることも戦略的にあり、と言えます。

前任校の実践女子は、全日本大会初エントリーで優秀賞を取り、NYに進んだのですが、その時指導していた奥井先生が前にこんな話をしていました。「彼女たちの運はオーストラリア大使になれたことかもしれない。1つは学校のプログラムでその年に3か月間オーストラリア研修に行っていたのでモチベーションや経験という点で功を奏した。次に、彼女たちが会議全体の一番最初のスピーチだったことで、なんとなく流れに乗れたということもある。スピーカーズリストに載せる時、アルファベット順に議長が右から見ていったときに、一番最初にプラカードが目留

まったのかもしれない。」その真偽は議長に聞かなければ分かりませんが、最初にスピーチをしたことが功を奏したのはあなたが間違いではないかもしれませんね。

## 5-4 メッセージを届ける

### 「話す」ではなく「伝える」 相手に届くスピーチを

模擬国連に参加すると、帰国生を中心にスラスラと英語で話す生徒を多く目にしますが、申し訳ないけれども、どんなに流暢でも何を言っているのか伝わらないものが多くあります。もったいない。原稿は用意しているし、英語もうまいんだけど、でも朗読であってスピーチじゃないんです。模擬国連に限らず、どんなスピーチでもそうですが、相手にメッセージを伝えようと思わなければ伝わりません。全国大会レベルでも「用意されたものを読んでいる感」が強くて、主張がよく分からないケースが見受けられます。

しかも模擬国連では、本来「華」であるはずのスピーチに、参加者は必ずしも耳を傾けません。それもどうかと思いますが、大使たちは DR やその後の交渉のことで頭いっぱいということもあるのです。「どうせスピーチ誰も聞いていないですよ」と言う生徒もいます。

その状況で聞かせるスピーチをするには、、もうこれは、スピーチの基本にして最重要の原則、「分かりやすく、堂々と情熱をもってメッセージを伝える」です。とにかく「話す」という意識ではなく「みんなに聞いてほしい」「これを伝えたいんだ」というメッセンジャーとしての思いで、語りかけてください。先ほど 5-2 でも述べましたが、スピーチの中身を考える最重要のベースは「どんな内容を入れるのかではなく、どんなメッセージを伝えたいのか」という視点です。模擬国連は議論の日数もスピーチの時間も限られているので、スピーチにもどうしても戦略的な内容ばかりが目立ってしましますが、会議場の演題で何を話し、どう伝えるのか、それこそ大使の品格と手腕が問われる場面です。単に原稿を読んで事務的にこなすのではなく、マラウさんやムヒカ氏のように、熱い思いで溢れたメッセージを参加者全体に届けてほしいと願っています。

### 記憶に残るスピーチ

これまでに見たスピーチで印象に残ったものを 1 つ紹介します。強豪校・渋谷幕張高等学校のエースが見せたスピーチです。彼女の発した一言目から会場が張り詰めました。「なぜ核軍縮が必要なのか」、議場全体を見渡し、ゆっくりとそう語りかけたのです。威厳の中に意志を感じる口調、議場全体を包み込む語り掛け、そしてその強いメッセージ、、圧倒的なスピーチ技術でした。その間、会場は完全なる静寂に支配され、他の大使たちは、音を出すこともできませんでした。ゆっくりした話し方ゆえに具体的な中身はそこまで多くありませんでしたが、残したインパクトはどこよりも強かったです。彼女は、核軍縮でイランという難しい立ち位置の国を担いながら、一気に議場の流れを作りました。イランに付いていくしかない、そう思った大使もいたのではないのでしょうか。たかだか 2 分間のスピーチにあって、その会議のハイライトの 1 つだったと思います。

## 英語力だけじゃない

もちろん、英語は上手いにこしたことはありません。田氏も『国連を読む』の中で、「英語力もまた力なり」として、英語の大切さをブータン首相のスピーチを例に次のように語っています。

ティンレイ総理は、「幸福」を人類が希求する開発目標の一つに掲げることを提案した。この提案は、氏の英語力に裏打ちされた卓越した交渉能力によって、翌年七月一九日に決議案となり、総会史上最も多い六八の共同提案国を得て、加盟国の全会一致で採択された、ブータンが国連加盟以来三九年目で提案した決議案は、「幸福決議」として実を結んだのである。



(中略) ティンレイ総理は地元紙のインタビューに答えて、総会の幸福決議はブータンの外交能力の高さの現れと語っているが、そうした交渉能力の一端に氏の卓越した英語力、演説力があつたことは確かであろう。(P63-64)

模擬国連の中でも、残念ながら、英語が不十分で言っていることが分からないというケースも実際にあります。英語スピーチの技術や英語そのもののトレーニングも必要であることには変わりありません。

しかし、英語力が全てではありません。上で述べたように英語が流暢でも分からない、伝わらないスピーチや戦略的な内容に終始したつまらないスピーチは腐るほど聞きました。もう1つ印象に残っているスピーチの例として、決してうまいと言えないけど、頑張っけて相手に語っている大使を見たことがあります。正直、英語は下手だけど、伝える思いや雰囲気づくりはその会議の中でも優れていたと思います。それまでは「スピーチなんて誰も聞いていない」典型と言える議場だったのですが、その時は会場の目は彼らに向いていたし、彼らが英語を間違えると会場が笑ったりするのです。ある意味ハチャメチャなスピーチで私も笑いをこらえられませんでした。笑う場所がわかるほど相手に聞かせられていた、ということです。

## グローバル時代、胸を張って英語で話そう

しかし、今や、グローバル時代。いろんな英語が飛び交っています。2013年、アルゼンチン・ブエノスアイレスでのIOC総会。「お・も・て・な・し」という流行語まで作った東京オリンピック招致のスピーチは強烈なインパクトを与えました。高円宮妃が美しい英語で会場をうっとりさせ、滝川クリステルが素晴らしいフランス語で一気に引き込みま



した。パラリンピアン佐藤選手のスピーチも感動的で注目を浴びました。その一方で、もう1つの話題となったのは元東京都知事の猪瀬氏のスーパージャパニーズイングリッシュでした。こぶしを突き上げながらの「ダイナミック」という部分は誇張されたように何度も映像として流れました。(ちなみに、私はあのスピーチはあれで良かったと思っています。)

しかし、競合国であるトルコ、スペインもその点では負けていませんでした。まず聞き取れないっ！You Tube で音声聞いてみてください。まず英語に聞こえません。猪瀬氏の英語のほうがよっぽど耳に優しい気がしてきます。それがグローバル時代だということです。オリンピック開催地を決める最終決戦という重要な場ですら、そういう英語が飛び交っているのです。大丈夫です、今の日本人高校生のほうがよっぽど上手です。



スペイン・マドリードもグローバルイングリッシュ

正直、個人的には英語教師として「ジャパニーズイングリッシュが良い」とは思っておりません。高円宮妃の英語が世界を魅了したように、きれいな英語から発されるメッセージの力は認めざるを得ません。しかし、世紀の大舞台で、何十回、何百回も練習したであろう人たちがあの英語なんです。頑張っても埋まりきれないコンプレックスと戦うより、中高生ならなおさら、自分たちのベストを尽くした英語であれば、思い切ってそれを伝えるだけです。「このメッセージを伝えたい」その思いがあればいいんです。胸を張って演壇に登りましょう。

#### 佐藤真海選手のインタビュー

東京五輪を呼び寄せた日本のプレゼンテーション。そのトップバッターとして、会場の雰囲気を変えたのは、3大会連続でパラリンピックに出場しているロングジャンパー、佐藤真海だった。



3月のIOC評価委員会が終わった後に、最終プレゼンテーションでも挨拶をしてもらえない、と、打診されていたんです。「突然の抜擢」と言われているんですけど、自分ではあの場で話をすることを意識して英語の練習もしてきましたし、覚悟はあったんです。

でも、まさかトップバッターとは思ってなくて(笑)。ブエノスアイレスに向かう1週間前にそれを言われてビックリしました。東日本大震災後に「スポーツのチカラ」をテーマに、英語のスピーチをした経験を招致委員会の方々に評価してもらっていたのかもしれない。

プレゼンは他のスピーカーの紹介を含めて4分間しかありませんでした。でも、普段学校などに呼ばれて子どもたちに話しかけるときのようにやろうと思っていました。

最初、子どもたちは私の義足ばかりに視線をやっているし、「かわいそう」「障害者だ」と思っているのが伝わってくるんです。でも、だからこそ自分が感じてきたことを笑顔で素直に話したり、一緒に走ったり、幅跳びをしてみたりするんです。小学生相手だと私が勝つんですけど(笑)、そんなふうにスポーツを通じたコミュニケーションをすると、相手のイメージも変わりやすい。最後にはちゃんと私の目を見て、人と人として接してくれるようになる。だから今回も、言葉に気持ちを乗せて、表情や姿勢でも自分の言いたいことを表現しようとしたつもりです。読まれた原稿では、何も伝わりませんから。すごい大舞台でしたけど、自分が体験したことを話そうと思っていました。

(出典： Number Web、2013年9月)

## CHAPTER 6 プロシージャー

### 6-1 プロシージャー

プロシージャー（Procedure）とは会議進行のルールです。国連会議にもルールがあり、それに基づいて会議が進められていくのです。193 か国も集まった会議で、それぞれの国が自分勝手に行動するわけにはいきません。ただでさえ文化や価値観も違う人たちが集まり、そこで国益を争うわけですから、無法地帯で会議を勧めたらとんでもないことになってしまいます。ですので、共通の会議ルールを設けて、それに沿って議論、決議を行うのです。

そろそろ公式討議を終えてアンモデやりたいと思っても、勝手に始めることはできません。議長に目で合図を送っても無意味です。DR を提出しようと思っただけを議長に渡したところで、自動的にそれが議場に配布されるわけではありません。さらに言えば、決議が承認され、会場から拍手が沸き起こったからと言って、勝手に会議が終わるわけでもありません。議長が「はい、皆さん、お疲れ様。これで会議を終了します」と言ってくれるのを待っていてもダメです。全て、プロシージャーに従って手続きをしなくてはなりません。交渉に入るのも、文章を提出するのも、さらに言えば休み時間を取るのも会議を終えるのも全て手続きが必要なのです。模擬国連の会議はある意味プロシージャーというルールに拘束されて成立しているのです。

スポーツと同じで、ルールを知っているとゲームが分かるし、優位に会議を進めていくことができ、場合によっては流れを変えることもできます。逆に、スポーツにしろ、模擬国連にしろ、ルールを知らずに参加することは圧倒的な不利になります。より有意義に模擬国連に参加するためにも、ぜひ基本となるルールとその意義を理解しましょう。

具体的なプロシージャーは、「プロシージャーマニュアル」「議長マニュアル」を読んでいただければ分かりますし、このガイドブックでも Chapter 11 で具体的なシミュレーションを示していますので、そちらを参照してください。ここでは、模擬国連会議を理解するうえで、基本的かつ重要な事項を中心に話をしていきます。

なお、プロシージャーについては、大会や練習会などにおいて微妙に異なるものもあります。ルールにもいわば方言のようなものがあり、これが正しいという絶対的なものがあるわけではありません。国際的にも、ハーバード方式とハーグ方式という種類があるということですが、国内でも中高と大学でもルールの違いがあったりもするようです。一般的に日本の中高では、日本模擬国連（JMUN）やグローバルクラスルームの定めている全日本大会のルールが広く使われています。本冊子でも、グローバルクラスルームのマニュアルに沿って説明をしていきます。

モーションとは「会議進行や手続きに関する提案」だと思ってください。日本語では「動議」と訳されます。あえてこの言葉に寄せて説明をするなら、「次の動きに対する提案」ということです。模擬国連を始めて見る人の中には、裁判の「異議あり！」的な発言だと思う人もいますが、そうではありません。

模擬国連会議では公式討議中、スピーチがずっと続いていきます。何もしなければずっとそのままです。しかし、もちろんそれだけでは実質的な議論はできません。「そろそろアンモデに入って DR の交渉をしたいな」「DR を提出したい」「もう会議終わりにしようよ」など、いろいろ思うわけですね。そこで、流れを変える一手がこのモーションです。例えば「アンモデを 30 分行う」といったようなモーションを出し、それが全体で承認されたら、晴れてアンモデに移れるのです。細かいことは会議参加をしながら、覚えていけば良いですが、まずは「何をするにもモーションが必要なんだ」ということを理解しましょう。そして、会議経験を積むにつれて、モーションを使いこなして、会議の流れを作れるようになっていきましょう。

ちなみに、会議の所どころで、カッコよく Motion を出す姿を見て、会議後に初心者たちの中で「Motion」がブチ流行語になるというのは「模擬国連あるある」です。

## モーションの取り扱い

### ① モーションの募集

公式討議中、スピーチが数か国終わった段階（で議長が“Are there any points or motions?（申し立てや動議はありますか）”と聞いてきます。これが「動議の募集」です。一度に何か国ずつスピーチをやるのかは会議細則で決められています。

### ② モーションの提案

それに対してモーションを出したい国は、プラカードを上げながら“Motion”と発言します。議長がプラカードを上げている国を順番に読み上げていきます。その後、順番に「What is your motion?」と内容を聞いていくので、その内容を言います。議長は、とりあえず全ての国のモーションを聞き出します（時間短縮のため「モーションを聞くのは 3 か国まで」と会議細則で決めている場合もあります）。

#### Motion

Brazil – Unmod 30 min  
Sweden – Mod 20 min  
Egypt – Unmod 40 min  
USA -

このようにモーションを聞き出していく

### ③ モーションの受理と投票

モーションが出そろったところで、優先順位の高い順に処理をしていきます。例外的に、議長が必要かつ有益と認めた場合は、議長裁量で採択の順番を変更することができます。

自動受理の場合は、投票なしに処理され、文書が配布されます。投票が必要な場合は、参加者全員に YES か NO かをプラカードで挙げてもらい、過半数もしくは 3 分の 2 が賛同している場

合はそれを可決し、そうでなければ否決します。可決された場合は、そのモーションを実行するので、他の優先順位が低いものは投票に至らずに自動的に不採用となります。否決された場合は、次点の優先順位のモーションの投票に移ります。

なお、このモーション採択に対する投票は、実際の決議の内容（実質的事項）に関するものではなく、あくまでも会議のあり方や進行（手続的事項）に関することですので棄権ができません。全参加国がしっかりと YES、NO のどちらかの意思表示をする必要があります。

## **モーションの種類**

モーションにはいくつかの種類があります。大きな分類としては、以下の 3 つに分かれます。モーションの受理および可決の条件はそれぞれ異なりますが、そのモーションの意義が分かっていたら簡単です。

### **1 文書提出に関するモーション**

ワーキングペーパー、決議案、修正案を提出、撤回するときのモーションです。会議のゴールは決議案の採択ですから、文書提出の権利が保障されていなければ会議になりません。もし「過半数の同意がないと提出できない」というような拘束があれば、敵対国に数の原理で邪魔されることもあるかもしれません。ですから、文書提出に関しては、提出国の数などの条件がクリアしており全てのスポンサー国が提出に賛同しているものなら、自動的に受理され、文章が議場に配布されます。文章提出のモーションの優先順位が高いのも文書提出を一番に保障しているからです。敵対グループの DR 提出を先延ばしにさせたいからと言って、アンモデのモーションばかり出すグループがいたとしたら会議の進行、決議の採択に支障が出てしまいます。そのようなことがないように、文書提出のモーションは速やかに、そして誰からも邪魔されることなく処理されるようになっています。

### **2 議事進行に関するモーション**

アンモデやモデに入りたい、会議を終了したい、討議を終えて投票に入りたい、など会議進行に関するものです。会議は参加者みんなのもので、どう進行するのか、終了するのか否かは過半数の賛成がなくては可決されません。ただし、討議の終了については、話し合いの打ち切りを意味するものですので、半分の国が賛成しているだけでは不十分です。本当に必要かつ十分な議論を尽くし、決議の採択に際して責任のある一票を担保できるように、3分の2以上に設定されています。

### **3 公式発言に関するモーション**

議事進行に関するモーションに似ていますが、スピーチの時間を制限したり、スピーカーズリストを閉じたりといったようにスピーチに特化したモーションです。これも会議進行に関わることなので、参加者の過半数の賛成が必要です。



タイプ	モーシヨンの種類	モーシヨンの内容	可決条件	優先順位
文章 提出	<u>作業文章の提出</u> Submission of a Working Paper	ワーキングペーパーの提出	自動受理	1
	<u>決議案の提出</u> Introduction of a Draft Resolution	決議案を提出する	自動受理	1
	<u>修正案の提出</u> Introduction of a Amendment	修正案を提出する	自動受理	1
	<u>決議案、修正案の撤回</u> Withdraw of a Draft Resolution/Amendment	決議案、修正案を撤回する	自動受理	1
議事 進行	<u>アンモデレートコーカス</u> Unmoderated Caucus	アンモデに移る	過半数の賛成	2
	<u>モデレートコーカス</u> Moderated Caucus	モデレートコーカスに移る	過半数の賛成	3
	<u>討議の終了</u> Closure of the Debate	討議を終了する (投票に移る)	3分の2以上の賛成	4
	<u>会期の停止</u> Suspension of the Session	会期を延期する (翌日に持ちこす、休みに入る)	過半数	5
	<u>会合の終了</u> Adjournment of the Session	会期の終了 (会議全体が閉会になる)	過半数	5
公式 発言	<u>発言時間の制限</u> Limitation of the Time of Speech	スピーチの発言時間を制限する もしくは制限を解除、緩和する	過半数	
	<u>スピーカーズリストの閉鎖、再解放</u> Closure/Reopening of the Speaker's List	スピーカーズリストの閉鎖、再解放をする (スピーチの受付を停止する、再開する)	過半数	

それぞれのモーションをより詳しく見ていきましょう。

### 1-1 アンモデレートコーカス 過半数の賛成

アンモデに移りたいときに出します。時間を指定して提案します。

文言) We would like to move for a 30 minutes unmoderated caucus.  
We would like to move for an unmoderated caucus for 30 minutes.

### 1-2 モデレートコーカス 過半数の賛成

モデに移りたいときに出します。for the purpose of ~という表現で目的を指定して提案します。以下は良く出されるモーションの例です。

- ① どのように会議を進めていくのか確認、議論したい。

文言) We would like to move for a moderated caucus for 15 minutes for the purpose of discuss how to proceed this conference.

- ② 各国の論点や重点政策を共有したい。— 1 か国 30 秒ずつマイクを回して

文言) We would like to move for a moderated caucus with each country 30 seconds for the purpose of sharing(clarifying) discussion points (priorities of discussion focus).

- ③ アンモデの後に、それぞれのグループでどんな話し合いが行われたのかを共有して、議場を整理する

文言) We would like to move for a moderated caucus for 20 minutes for the purpose of sharing what each group has discussed.

- ④ DR や修正案が出された後に、それに対する議論を行う

文言) We would like to move for a 15 minutes moderated caucus for the purpose of discussing the DR. 1.

### 1-3 討議の終了 3分の2以上の賛成

公式討議を終え、投票に移る時に提案します。スピーカーズリストから発言国がなくなったら自動的に投票に入ることになりますが、発言国が残っている前でも「DR も十分に練れ、議論も出尽くしたので投票に入ろう」という空気になれば、動議によって公式討議を終了させることが

できます。原則としては、修正案の確認や議論が終わり、その後のスピーチが終わったところが討議を終了するタイミングです。

文言) We would like to close the debate.

#### 1-4 会期の停止 過半数の賛成

会期を停止したいときに提案します。簡単に言えば、会議進行を一度止めて、休みに入るときに提案します。具体的には、ランチ休憩や、その日の会議をいったん終了して翌日に持ち越すようなケースです。練習会によっては、昼休みにアンモデを入れて、ランチ兼話し合いを取ることもありますし、練習会では、普通に We would like to have lunch time for 50 minutes. と直接的なモーションを出すこともあります。ランチ休憩の場合は、時間も指定しましょう。

文言) We would like to suspend the session (for 50 minutes).  
We would like to move for the suspension of the session.

#### 1-5 会合の終了 過半数の賛成

会議を終了したいときに提案します。投票、決議の採択が終わり、会議が全て終了した段階で提案します。決議の採択が終わっても、この動議が出されなければ会議を終えることができません。4の「停止」と間違えやすいですので気を付けましょう。なお、「会期」はその年度の国連の開会期間全体を指すものなので、1つの議題が終わった後もまだまだ会期は続いています。なので、終了ではなく延会 (Adjournment) という言葉を使います。

文言) We would like to adjourn the session.  
We would like to move for the adjournment of the session.

#### 2-1 作業文章 (WP) の提出 自動受理

各国、各グループが決議案作成に向けて準備している作業文章を提出するときに出します。自動的に受理され、文章が議場に配布されます。提出した国には説明する時間が与えられます。ただし、会議によっては「WPの提出は行わない」もしくは「説明する時間は与えられない」という設定がされている場合もあります。

文言) We would like to submit our working paper officially to the floor.

#### 2-2 決議案の提出 自動受理

決議案を提出するときに出します。DRは全てのスポンサー国が賛同しなくては提出できません。このモーションが出されると、議長はスポンサー国を1つずつ呼びあげ、それに対し各大使はYES/NOで意思表示をします。反対する国がいれば提出が認められません。全てのスポンサー国が賛同すれば、議長から文章番号が振られ、文章が議場に配布されます。

文言) We would like to submit our draft resolution officially to the floor.

### 2-3 修正案の提出 自動受理

修正案を提出するときに出します。DR 提出同様、全てのスポンサー国が提出に賛同しなくては出せません。手続きなども同様です。

文言) We would like to submit our amendment official to the floor.

### 3-1 発言時間の制限/解除 過半数の賛成

スピーチの時間を制限したり、それを解除もしくは緩和するときに出します。

文言) We would like to limit the time of speech to 1 minute.

We would like to remove(lift) the limitation of the speech time back to 2 minutes.

### 3-2 スピーカーズリストの閉鎖/開放 過半数の賛成

スピーカーズリストを閉鎖したり、それを再び解放したりするときに出します。閉鎖されれば、その時点から新たに発言国を加えることができません。

文言) We would like to close(reopen) the speaker's list.

We would like to move for the closure(reopening) of the speaker's list.

## モーションの優先順位

モーションの処理は以下の優先順位に従っていきます。これは資料によって順位が微妙に異なりますが、ここでは、グローバルクラスルームが全日本大会用に定めているものを高校生の共通理解ということにして採用します。

① モーションよりもポイントの方が優先的に処理される（ポイントは次項を参照）

② 基本順位（上から順に優先順位が高い）

- 1 公式文書の提出、撤回
- 2 アンモデレートコーカス
- 3 モデレートコーカス
- 4 討議の終了
- 5 会議の停止、会合の終了

- ③ モデ、アンモデについて時間の異なるモーションが出された場合は、時間の長いほうから投票を行う

### モーションの撤回

自分の出そうと思っているモーションがすでに別の国によって出され、重複している場合は、それを取り下げます。誰がモーションを出したかが問題ではなく、会議進行がスムーズにいくようにします。また、モデ、アンモデについては、時間の長いほうが優先順位が高いですが、自分たちのモーションが採択されたいからという理由だけで、いたずらに長い時間を指定することは控えましょう。

文言) We would like to withdraw our motion.

## 6-3 POINT

モーションの募集の際に、議長から「Are there any points or motions?」と聞かれますが、次は point について理解をしていきましょう。日本語では「申し立て」という言葉になります。ポイントはモーション募集時以外にも出せます。ポイントの文言は、モーションのように複雑ではなく、プラカードを掲げながら、Point of Order! などの名称をそのまま言えば大丈夫です。

### 1 Point of Personal Privilege : 円滑な会議を享受する権利に関する申し立て

「ちゃんと会議に参加する権利を保障してくれ」という申し立てです。例えば、「議長や発言者の声が小さくて聞こえない」「会場が騒がしくて声が通らない」など、大前提として担保されるべき会議環境、会議参加の権利が侵害されている場合に申し立てます。スピーチや議事進行が聞こえないことで不利益にならないように、このポイントに限って、発言や議事進行の最中にも出すことができます。会場の空調が寒すぎるといったこともこれに入りますが、議事進行に直接関係ないものはメモでフロントに回しましょう。

### 2 Point of Order : 議事進行に関する申し立て

議長に対して議事進行に関する異議申し立てです。特にプロシージャラーから逸脱して進行されている場合に出されることが多くあります。練習会も含めて、これまでに実際にあったものを例に挙げます。

- 例)
- ・モーション処理の優先順位が異なる（アンモデよりもモデのモーションが先に処理されている）。
  - ・全員が挙手していない中で、モーションに対する投票が済まされてしまった。
  - ・DRの提出の際に、スポンサーに入っている国が呼ばれずに飛ばされていた。

- ・ スポンサーであるにもかかわらず自国の DR に棄権票を投じている国がいて、訂正を促した。

### 3 Point of Inquiry : 議長に対する質問

議長に対して議事進行に関する質問です。Point of Order は異議申し立てですが、これは質問です。

例) 議長裁量でモデを取る意図や論点について質疑する。

### 4 Point of Information : 公式発言に対する質問

公式発言をしている国が、余った持ち時間を質疑応答に移譲するケースに見られます。質疑のある国は、このポイントを使って、発言国に質問を行うことができます。中高生の模擬国連会議ではスピーチの時間が限られているため、公式発言の時間が議場全体に委譲されることはめったになく、またモデの中で DR の質疑応答は行うので、Point of Information 自体はほとんど出す機会がありません。

## ポイントの優先順位

ポイントの処理にも優先順位があります。ポイントとモーションが同時に出された場合は、ポイントの方を先に処理します。モーションは次の動きに関することなので、新しい動きに入ってしまう前に、申し立てや質疑をクリアにするためです。ポイント同士の優先順位は、上記の1～4の順番です。何よりも、会議参加の権利保障が優先され、その後、会議の進行に関する意義や質疑を受けます。Point of Information は中身に対する質問であり、最後に回されます。

## 6-4 Right of Reply

「答弁権」と呼ばれるものです。他国のスピーチの中で、自国の威信が傷つけられたり、事実と反したものがあつた場合、これによって反論や異議申し立てを行うために使われます。

答弁権はその当事国のみ認められています。答弁権を行使したい場合は、その該当するスピーチの直後に「Right of Reply!」と意思表示をします。そのタイミングを失うと行使することはできません。なお、答弁権を認めるかどうかは議長の判断です。認められた場合は、設定された時間内でスピーチを行うことができます。ただし、本物の国連会議でも、公式会議中はスピーチが主で、答弁権による議論や演説を行うことは稀です。

スピーチやモデにおいて、自分たちの発言の持ち時間の全部もしくは一部を他国や議場に譲ることができます。これを「委譲」といい、英語では yield という動詞を使います。委譲を認めるかどうかは会議監督の判断によります。

文言) We'd like to yield the rest(all) of our time to OO.

具体的な場面としていくつか挙げましょう。

- ① DR 説明の際に共同提出国に時間を委譲する。

まず、DR を提出した後に説明時間を与えられるのですが、ほかの提出国と一緒に説明をしたいときに行います。DR 提出のモーションを出したのは自国なので、説明時間はあくまでも自分たちに与えられていますが、全体を説明したのち、個々の論点については「残り時間をOOに委譲します」という形でマイクを手渡します。

- ② モデの際に、自分たちの時間を他国に委譲し、補足してもらったり、質問に答えてもらったりする。

モデで1か国1分が与えられているとしましょう。その中で、ある国に質問をしたいとき、自分たちの質問をしたのち、残り時間をその相手に委譲し、質問に答えて」もらいます。

### Column 3

#### ～国連の成り立ちを知ろう～

国連はいつできたか知っていますか？そう聞かれるとぱっと答えられないものです。生徒に同じ質問をすると、50年とか30年とか、100年とか、、色々な答えが返ってきます。実際には1945年10月です。国語の教科書や戦争ドラマで、例えば、相手国の空襲が始まったとき、「連合軍が来たぞ！」と言って、部屋の電気を消すといったようなシーンを見たことがありますか。もしくは大本営の会議で「連合軍は…」みたいなセリフで聞いたことがある人もいるかもしれません。この連合軍こそ「国際連合」の実質的な前身です。

構想自体はもっと早くから始まっており、1941年8月に英首相チャーチル、米大統領F. ルーズベルトのトップ会談で協議されていました。日本の真珠湾攻撃が同年12月ですので、実は太平洋戦争が始まる前からすでに「戦後構想」が始まっていたというのは意外ですね。その後も、その惨禍が渦巻く中で、ソ連、中国を交えて1943年のモスクワ会議、テヘラン会議、1944年のダンバートン・オークス会議を経て、1945年6月のサンフランシスコ会議で国連憲章が起草され、50か国によって署名されました（ここに参加しなかったポーランドも後に署名し、加盟国は51か国からスタート）。そして、終戦後の同年10月24日、過半数の国が批准したのを受け、正式に発足しました。

いわば国連は第二次世界大戦という未曾有の惨劇の中で生まれた産物なのです。ですから、国連には戦中戦後の世界事情がそのまま反映され、75年たった今でも変わっていない部分があります。その典型が安全保障理事会の構成です。常任理事国はアメリカ、イギリス、ソ連、中国、フランスという当時の大国が占めています。この5大国が互いに対立を避け、足並みをそろえて協調していくことが戦後の混乱を収束し、世界平和を実現するための絶対条件だったからです。基礎知識のない生徒に「国連の常任理事国はどこ？」と聞くと、たまにドイツ、日本といったような答えが返ってきますが、そもそもこれらの敗戦国であり、国連がまさに敵対していた相手だったので（少なくとも当時は）常任理事国であるはずがありません。それどころか国連憲章の53条と107条にはいわゆる旧敵国条項というものがある。簡単に言うと「敵国が不穏な動きを見せたら、制裁していい」という内容です。この敵国は「第二次世界戦争中にこの憲章のいずれかの署名国の敵国であった国」と規定されています。日本とドイツがメインターゲット国で、他にもその同盟国であったイタリアや、ソ連に宣戦布告をしていたブルガリア、ハンガリー、ルーマニア、フィンランドが当たると日本政府が見解を出しています（第118回国会 安全保障特別委員会 第3号）。もちろん、この敵国条項はすでに死文であり、日本は平和を愛する国として世界に認知されていますが、この条文はいまだに国連憲章に残っており、文面の上では日本は旧敵国として晒されているのも事実です。

日本人にとってはその成り立ちや旧敵国条項は心情的に複雑な部分もありますが、そのような背景を背景をはじめ、国連の知識を深めていくことも大切です。



## CHAPTER 7 投票

### 7-1 投票に入る

#### 投票に入るには

DR もしくはアmendが出そろった後、以下の2つの手続きで投票に移行します。

- ① スピーカーズリストから発言国がなくなる
- ② 討議終了（Closure of the debate）のモーションが可決される

#### 投票行動説明

投票の前後には「投票行動説明」というものが設定されている会議があります（省いている会議も多くあります）。これは希望する国から選ばれるのですが、「私たちはここに投票します」「私たちのDRはこういうものなので、ぜひ投票してください」といったような宣伝ではありません。逆に、自分がスポンサーとなっているDRには言及できないという制約があります。

では、何を言うか。投票前であれば、「今日は皆さんの誠意と努力のおかげで、良い会議になったと感じています。その努力に感謝し、国際平和を目指して、誠実に投票を行います。皆さんも国益と世界の共通の利益をしっかりと考え、責任を持った投票をされることを期待します」といった宣言みたいなものです。一方、投票後であれば、「私たち、ミャンマーは、今回の会議そして投票結果には国際社会の声が十分に反映されていないと感じており、非常に遺憾です」といったような表明です。

#### 退場の禁止

投票行動に移ったら、それ以降の退席はできません（議長からアナウンスが流れます）。もし深い事情で退席を願い出たい場合は、その前までにしなくてはなりません。ただし、自国がスポンサーになっているDRの投票には欠席ができないことになっていますので、現実的には退席はできないことになります。

ただし、これまであったケースで、ペア同士で揉めてしまい、憤慨した片方の大使が投票前に退席したという例があります。もう1人が会場に残っているため、欠席にはならず、一応ルール違反ではありません。

投票には主に以下の3つの方法があります。まず、投票方法に関するモーションを募集して、どの方法を取るのか決めます。投票方法はそれぞれのDRごとに決めていき、1つの投票が終わった後、次のDRの投票方法を決めるという形です。DRによって異なる投票方法を取ることも可能です。

### 投票方法の優先順位

3つの投票方法の間には優先順位があります（以下、上から順に優先順位が高い）。1国でも希望が出た場合はその優先順位が反映されます。仮にロールコールを希望する国が1か国でもあれば、残り全ての国がコンセンサス投票を希望していたとしても、優先順位の高いロールコール投票になります。もし、何のモーションも出ない場合は、無記録投票が実施されることになります。

#### 1 ロールコール投票 (Roll-Call Voting) 優先順位 1

アルファベット順に国名が呼ばれ、Yes、No、Abstention（棄権）の3つで投票をします。1回だけパスをして、他国の投票を見ることも許されていますが、その場合は、YesかNoしか認められず、Abstentionはできません。この方法ではどの国が賛成、反対、棄権したのか公になります。

文言) We would like to request a roll-call vote (on the draft resolution 1).

#### 2 コンセンサス投票 (Consensus Voting) 優先順位 2

最終的にアmendが1つしか出ていない、圧倒的多数がそのDRのスポンサーになっているなど、賛成多数が予測される状況で採用されます。コンセンサス投票の希望が出たら、議長は全大使にその方式に反対意見がないかを聞きます。1か国でも反対のプラカードが上がれば、投票方式のモーションを再度募集します（実質的には、コンセンサス投票が否定された時点でロールコール方式が選択される流れになります）。

文言) We would like to request a consensus vote (on the draft resolution 1).

#### 3 無記録投票 (Unrecorded Voting) 優先順位 3

Yes、No、Abstentionのいずれかにプラカードを挙げます。投票の記録に国名は残されません。

文言) We would like to request an unrecorded voting (on the draft resolution 1).

## DR スポンサーの責任（確認）

Chapter 3-4 (P30) のところで説明しましたが、改めて確認します。自分がスポンサーとなっているDRには賛成票しか投じることができませんので、責任を持って投票をしましょう。余談ですが、練習会に初参加した私の生徒で、投票がよく分からなかったようで、自分のDRに対して「Abstention!」とかっこよく言い放ったペアがいました（笑）。

## Abstention

Abstentionは一応深い政治的な事情があり、YesもNoも言えない場合に使います。「賛成でも反対でもどっちでもない」「決めかねる」という意味合いでは使いませんので、安易に棄権はしないようにしましょう。

## 採択

採択されたらその後、議長から「DRからRES」へと文書番号の変更が伝えられます。「決議案」から「案」が取れて、公式に「決議」へと変わるのです。

## 7-3 票のカウント

### 棄権を除いた有効票の総数を基準に判断する

ロールコール投票と無記名投票の際には、賛成票、反対票をカウントしますが、DRの可決否決についてはAbstentionを除いた有効票数を母数として判断します。例えば、50か国が参加する会議の中で、Abstentionが8か国から出されたとします。その場合50ではなく、その8か国を除いた42が母数となり、半数は21、よって過半数は22以上となります。

### Abstentionは賛成派を助ける

ですから、棄権をするということは、過半数のラインを下げ、賛成派を助けることとなります。投票を前にして、それぞれが自分のDRを通すために「賛成票を入れてほしい」と他国に訴えにいくのですが、場合によっては「賛成できなくても棄権してほしい」という交渉を持ちかけてくる国もあります。お互いが「棄権し合おう」という約束を取り付ける国もあるでしょう。確かに、棄権が増えれば可決が近づきます。戦術としては有効なものです。

しかし、本当にこれでよいのでしょうか。まず、棄権は深い政治的事情がある場合に限られていて、安易に使うものではありません。賛成したいけど、公に賛成できない理由があるというなら棄権は妥当かもしれません。核軍縮の会議で、被爆国でありながら、「アメリカの核の傘」に入って安全保障を担保している日本がこれまで棄権してきたのはその一例です（その日本も2016年10月の総会で「反対票」を投じて、大きなニュースになりました：下記参照）。しかし、棄権票は「どちらでもない」という中途半端な判断で選ぶものでもなければ、自己のDRを可決させたいからと言って「棄権しあおう」と取り引きして入れてあげるものではありません。本

当に自国にとって、そして世界平和にとってどういう票を入れるべきなのか、大使の責任の元し  
 っかり判断をして、賛成できるものには賛成票を、そうではないものには反対票をしっかりと投じ  
 て、棄権はあくまでも「どうしても取らざるを得ない最終選択肢」として考えていきましょう。

**投票は Abstention を除いた総数でカウントされる**

例) 参加国 50、DR 提出国が 12 と決まっている場合 = 12 の賛成票は固定

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px; text-align: center;"> <b>どの国も棄権しなかったら</b> </div> <p style="text-align: center;">有効投票総数 50 過半数 26</p> <p style="text-align: center;">→ あと 14 か国も賛同を取り 付けなくてはならない</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px; text-align: center;"> <b>10 か国が棄権した場合</b> </div> <p style="text-align: center;">有効投票総数 40 過半数 21</p> <p style="text-align: center;">→ 9 か国も賛同を取り付け なくてはならない</p>
--	--

### 話題になった決議と日本の投票

2016 年 10 月 28 日、オーストリア、メキシコほ  
 か、57 か国を共同提出国として、「核兵器禁止条約」  
 の決議案が提出されました。アメリカを中心とした保有  
 国は「核の傘の抑止力が悪影響を受ける」と強く反発し、  
 NATO 諸国、アジア諸国に反対票を呼びかけました。  
 これまでは核の問題は「被爆国」の立場から棄権するこ  
 とが多かった日本ですが、この時は「対策が不十分で賛  
 成できない」反対票を投じて話題になりましたね。その  
 時の投票結果が右の表です。この時は 177 か国のうち  
 賛成が 123、反対 38、そして棄権が 16 か国でした。  
 当時の岸田外相は、北朝鮮の核・ミサイル開発の脅威に  
 触れて、「核兵器国と非核兵器国の対立を一層助長する」  
 と言及しています。

核兵器禁止条約を巡る採決結果  
 2017年交渉開始に ※は事実上の核保有国を含む

賛成 123カ国	反対 38カ国	棄権 16カ国
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">決議案提出</div> オーストリア、 メキシコ、 南アフリカ、 ブラジルなど	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">※核保有国</div> 米国、ロシア、 英国、フランス、 イスラエル	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">核保有国</div> 中国、インド、 パキスタン
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">非核保有国</div> 主に中南米、 アフリカ、中東、 東南アジアなど	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">米国の 「核の傘」 に依存</div> 日本、韓国、 ベルギー、 ドイツ、カナダ など	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">その他</div> スイス、 フィンランド、 オランダ、 スーダン、 ニカラグア など
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">その他</div> 北朝鮮、イラン		

毎日新聞「核兵器禁止交渉決議を採択 日本は反対」(2016年10月28日)より

## 7-4 投票の持つ意味

田氏の「国連を読む」を読み、私なりに咀嚼した投票のポイント、意味を以下に記します。国連としては、国際社会の一致したメッセージと言うことで、満場一致を目指し、コンセンサス投票が取れば理想ですが、全加盟国が賛成できるものとなると決議の抽象度が高く、実効性、具体性が乏しいものになってしまいます。

実効性、具体性に富んだものになると、利害がより明確にぶつかるため、反対する国も多々出てきます。その場合、ロールコール投票が行われるわけですが、この方法では、当然自国の投票が公になります。採択の是非はともかく、国際社会に自国の態度を示すという意味合いもあります。「この決議は仮に採択されたとしても、私たちは従う気はありません」と反対姿勢を表明する場にもなるのです。

ロールコールで採択されたとしても、過半数の支持を得ただけで、同様に反対票も多く投じられているので、「国際社会一致のメッセージではない」ということになってしまいます。実際に、足並みそろって、決議を実行していくのは、これまた課題がでできます。

### 等しい1票の重み

最後に、国連総会での1票の意味を考えてみましょう。総会には193の国が集まっていますが、それぞれが等しく1票を持っています。国の大きさ、経済力、人口、国連への貢献度、それらに関係なく1国1票です。どんなに大きくてもアメリカは1票だし、逆にアフリカは結託すれば54票もあるのです。

確かに、国連総会の決議は、法的拘束力がありません。しかし、国連の決議である以上、むげにはできないものです。その投票に際して、大事な1票を各国が持っている。そういう思いで、模擬国連でも責任を持った一票を投じてください。

## 7-5 複数のDRが採択されるということ

模擬国連では複数のDRが採択されるということがよく起こります。例えば3つのDRが提出されて、そのうちの2つが過半数の賛成票を獲得してしまうのです。決議が複数通るということは、国連として複数の意思、方向性を存在させてしまうということです。安保理改革の会議で2つのDRが採択されたことがありましたが、講評の際、ある先生が「あなたたちは安保理を2つ作るつもりなんですか」と全体に苦言を呈したことがあります。DRが複数通るというのはまさにそういうことなのです。国際社会として協調して解決にあたるなら、2つも解決策があっというわけがありませんし、1つでも大変なのに2つの方向性を両方とも達成するなんてことは現実的ではないし、各国の十分なコミットメントは得られません。

では、なぜ模擬国連ではそんなことが頻繁に起きるのでしょうか。まず第1の理由として、全か国がDR提出に絡まないといけないからです。実際の国連では、2017年7月7日に「核兵

器禁止条約」が採択され大きなニュースになりましたが、核保有国や日本など採択に消極的な国はこの交渉に参加していません。129か国が参加し、賛成が122票、反対はオランダの1票、棄権はシンガポールの1票のみでした。本当の国連会議なら、DRは出したい国だけが出し、1会議につき1つのDRだけを議論し、さらにその議題を避けたい、決議を求めない国はDRを作成せずに、反対や棄権を投じるだけ、場合によっては不参加という行動がとれます。しかし、模擬国連は都合が悪い国もその会議に参加し、DRを作成、提出するという行動に加わらなくてはなりません。ですから、実際の国連では交渉を避けるであろう国からもDRが出ますし、必然的にDRが複数存在するようになってしまいます。その中で、DR同士の競争が始まり、自分のDRを通すために、別のDRグループと結託して投票に臨むということになるわけです。

2つ目の要因は、2日間ないし1日という時間制約です。結託するぐらいならコンバインして1つのDRにするべきですが、時間の関係で調整に至らなかったりして、コンバインの努力が実らないのです。

3つ目の要因は、投票する大使の意識です。簡単にYesやAbstentionを投じてしまう大使が多いと複数のDRが通りやすくなります。2つのDRが通るということは、単純に考えると複数のDRにYesを投じている大使が半数以上いるということになります。またAbstentionが増えると、賛成に有利に働きますので、より複数採択につながります。自分たちのDRを通すために、他のDRグループと「お互い賛成しよう、棄権しよう」という投票協力を取引していたりすることもあります。

### **複数DRを採択した責任**

確かに自分たちのDRが採択されるとうれしいものです。しかし、決議案の採択は会議のゴールかもしれませんが、課題解決はここからがスタートなのです。あともう少し時間があればコンバインできたはずの2案だったかもしれませんが、最終的には会議の中では「何かが違うから」別のDRとして残ったはず。「時間があったら」は仮定であり、現実はそうではありません。しかも、唯一の成果物である公式文章で別案として残ってしまったものであり、ロールコールであればその投票行動は世界中に知らされるものです。

本当にこれらの決議に責任をもってコミットできるのでしょうか。本当にこれが正しい課題解決だったのでしょうか。自分たちのDRを通す「競技」の中で、失われている国益や国際協調、国際平和はありませんか。みなさんは「2つとも通ったよ」と自国の国民に提示できますか。

模擬国連では、上述の通り、もともと複数DRが出るようになっていて、それを限られた時間で議論し、なんとか成果物を出そうとすることこそ、複数の決議が採択されてしまうことがあるのですが、それが結果的に仕方ないとしてもプロセス、意識の面では責任あるDR作成、責任ある投票を行いましょ。

## CHAPTER 8 課題解決

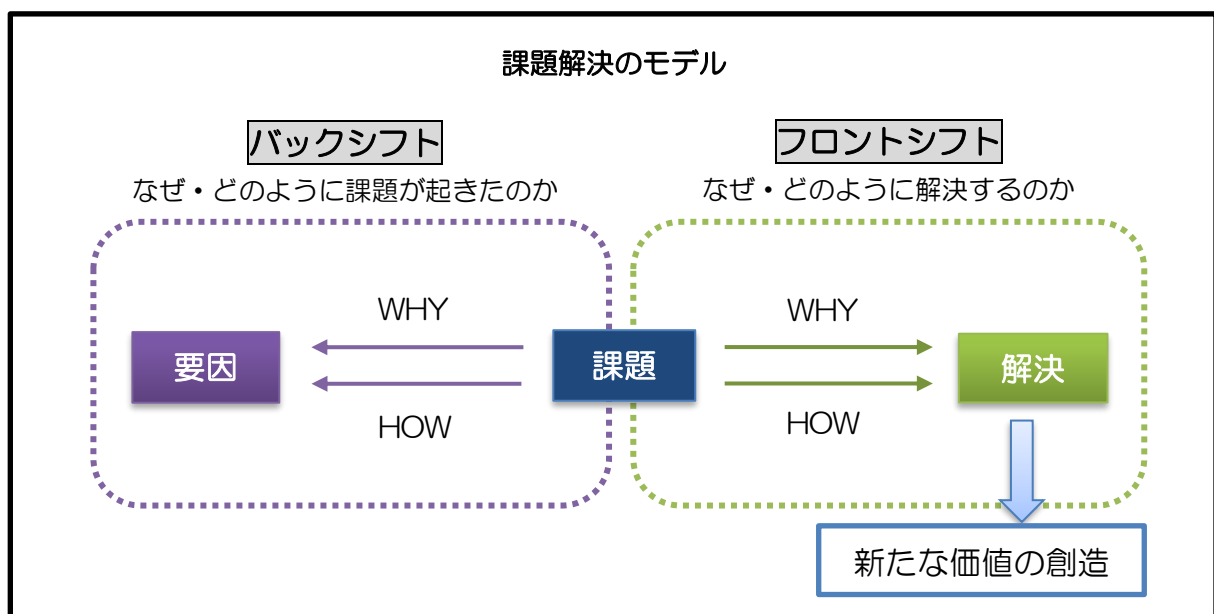
ここでは、模擬国連に欠かせない課題解決についてこれまで課題解決プログラムをデザインする中で私が提唱してきたモデルとアプローチを共有します。触りの部分だけで、かなりざっくりとした話になりますが、模擬国連のみならずその他の課題解決プログラムにおいて参考にさせていただければ幸いです。

### 8-1 課題解決のモデル

模擬国連はまさに課題解決ですが、単純にその問題を考えるだけではなかなか課題解決は進みません。やはり課題解決に対する思考、観点、そしてマインドを育てて、根付かせていくことが大切です。

そこで、まずは課題をマクロ的にとらえていきましょう（各国ごとにローカライズするのではなく、赤大全体を本質的にとらえていくということです）。私が、課題解決のモデルとして意識しているのは以下の図です（これまでも課題解決プログラムやアクティビティを作ってきましたが、常に根本にこの図式を意識しています）。

よくあるアプローチとして、課題に対する5W1Hを分析していくというものがありますが、実は課題解決において重要なのは「課題は何か」というWhatの部分と、それに付随するWhy「なぜ」とHow「どのように」です。そして、それぞれについてフロントシフト、バックシフトを考えていくことが課題分析の本筋になります。「モデル」と言えば大それたものに聞こえますが、行っていることはごく当たり前のことで、皆さんが課題解決をする時に自然に行うことをモデルとして意識化しているだけです。



## フロントシフトとバックシフト

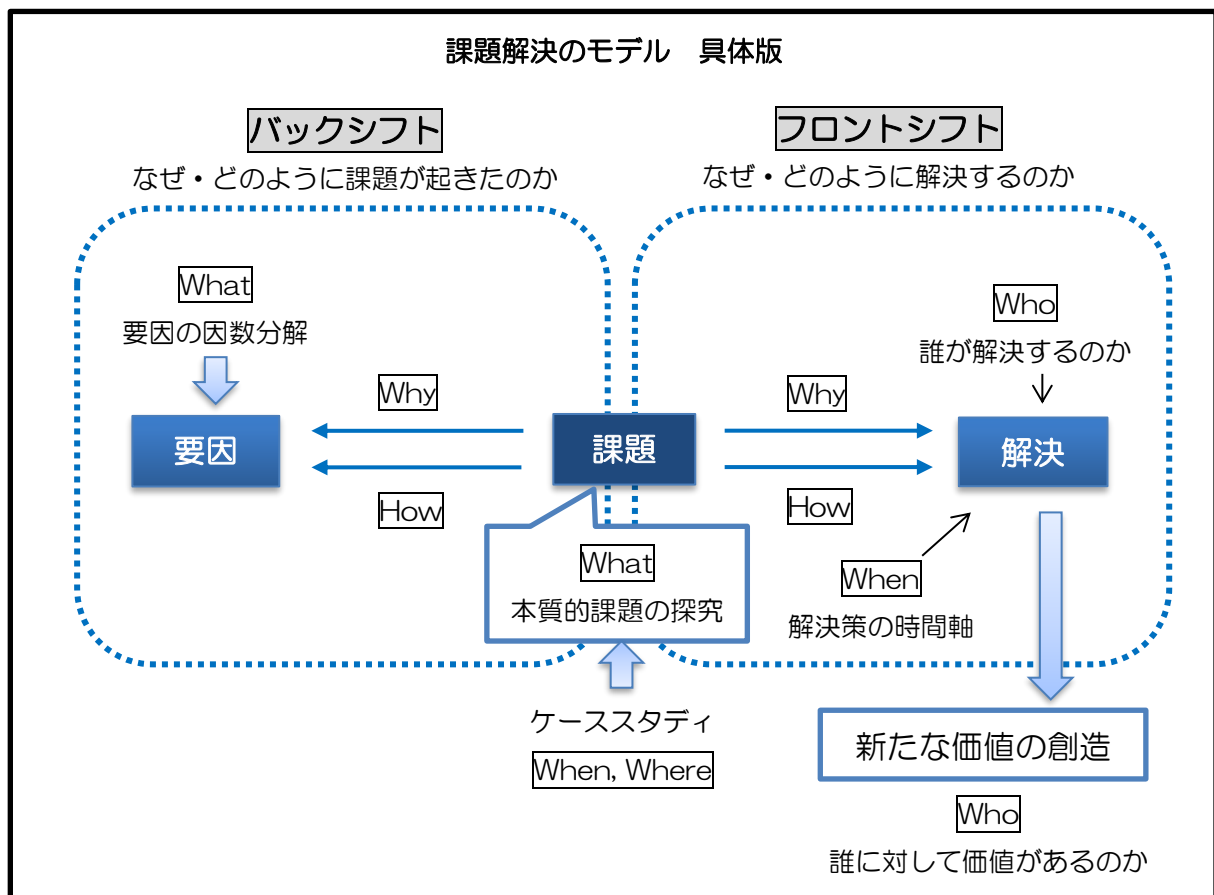
ポイントは後（過去）と前（未来）の2つのベクトルがあることです。私はこれをバックシフトとフロントシフトと呼んでいます。この2つのシフトを理解し、重要変数のWHYとHOWを探究していくことが課題解決の肝になります。課題から遡って「なぜ、どのようにその課題が生じたのか」という課題分析と、未来志向で「どのように解決し、なぜそのように解決するのか」という解決策、ひいては「どのような価値を付与できるか」という探究が求められるのです。

## その他の要素

もちろん、Where、When も分析すべき要素です。異文化理解、グローバル社会課題などでは、Where が特に文化考察の点から重要になりますし、模擬国連でも国益という観点から必須な要素になります。しかし、これらはあくまでも補助的な変数であり、課題の状況を説明するための項目と言えます。また When は、後ほど述べますが、短期・中期・長期という時間軸で解決策を考えるというアプローチとして生きていきます。

Who というのは、とても重要な要素で、「誰に対して」価値がある課題解決なのかという設定になりますし、「誰が」その解決を担うのか、という主体を示します。例えば、先進国で通じる課題解決手法が必ずしも発展途上国で通じなかったり、途上国からは歓迎されず、同じ価値観を共有できなかったりというケースがありますが、それは Who が不在の課題解決ということです。

そこで、それらの要素も入れたより具体的なモデルを以下に提示します。





以下の課題解決の9つのプロセスを見ていきましょう。

- ① 現象、事実の分析
- ② 課題設定
- ③ 課題分析
- ④ 要因の因数分解と特定
- ⑤ 解決策の探求
- ⑥ 課題の書き換え
- ⑦ 解決による新たな課題設定
- ⑧ 生じた価値の評価
- ⑨ 新しい価値の追求

### 課題解決のプロセス 基本編

#### ① 現象、事実の分析

まず、情報を集めて、何が起きているのかという分析をします。できれば、この段階では課題を設定せず、まず先入観のない目で事実を確認していくことが良いでしょう。情報収集力、処理力、分析力、クリティカルシンキングなどが求められます。

#### ② 課題設定

次に、これらの情報や分析に基づいて、課題を設定します。与えられた課題に取り組むだけでなく、「**そもそも何が課題なのか**」、自分たちで考える力が求められます。あわせて、ここで課題解決のゴールを設定していきます（当たり前ですが、ゴールがなければ課題は存在しません）。

#### ③ 課題分析

設定した課題に対して、まずはバックシフトで WHY と HOW を探ります。つまり、「なぜ、どのようにこの課題が生じたのか」という分析です。

#### ④ 要因の因数分解と特定

次に、課題を作り上げた原因を探っていきます。短絡的に「これが原因」と決めるのではなく、分析をさらに突き詰め、因数分解していくことで、その根本にある要因を特定します（因数分解ですから要因の素数を見つけていくのです）。そして、発展編では、この因数分解を「課題の書き換え」というものにつなげます。ちなみに、多くの社会課題、自然課題は、因数分解すると「人口問題」「文化の問題」が根底にあるのが分かります。逆に言うと、人口問題、文化の問題に目を

向けずに、課題解決をするということは、表面的なアプローチにとどまってしまうということになります。

#### ⑤ 解決策の探求

次に、フロントシフトでWHYとHOWを探求します。「なぜ、どのようにその課題を解決するのか」という議論です。しかし、本物の課題はとても複雑で、解決困難なものばかりです。どんな解決策を講じても全ての課題が解消されるわけではありません。単なる課題解決をシミュレーションすることに満足せず、さらに課題を探求することが重要です。

### 課題解決のプロセス 発展編

#### ⑥ 課題の書き換え

これは、課題の本質を見抜き、課題設定そのものを書き換えるというプロセスです。課題解決を突き詰めるうちに、最初に課題と思っていたことが実は本質的な課題ではなく、もっと根本的な課題が見えてくる、ということがしばしばあります。それに合わせて、課題設定を上書き修正していくという作業が生じてくるんですね。この課題の書き換えについては、次の項目で例題も含めて、考えていきます。

#### ⑦ 解決による新たな課題設定

課題解決はらせん状にループします。解決に向かったと思ったらまた出発地点に戻ってくる、といったように課題と解決の間をぐるぐる行ったり来たりしながら続いていきます。1つの問題が解決しても、その解決が次の新たな課題を連れてくるということです。やっと解決したと思ったら、それが次の課題解決のスタートになるのです。

皮肉にも、課題解決は課題発生のプロセスでもあるのです。場合によっては、課題を解決したがゆえに状況が悪化したり、課題の軸がずれてしまったり、ということが起きます。実際の課題解決でもまさにそうですよね。例えば、シェールガスといった新エネルギーが発見されて、エネルギー問題が解決されたかと思えば、それをめぐる利権や競争が勃発し、新たな課題が発生します。このループこそ、課題解決の醍醐味です。課題解決がループする中で、試行錯誤しながら探求をつづけることで、一步一步課題解決の本質に近づいていくのです。

#### ⑧ 生じた価値の評価

課題解決は自己満足ではいけません。人々に新たな価値を付与して、初めて意味のある課題解決と言えるでしょう。「この課題解決は誰にとって価値のあるものなのか」という視点から、「具体性」「実現可能性」「グローバル性」「社会貢献」「生産性」など、あらかじめ設定していた基準やコンセプトをもとに、価値の評価を行います。

### ⑨ 新しい価値の追求

自分たちの出した解を、さらにクリティカルに評価し、新たな価値を追求します。課題解決がループする中で、より良い解決策はないか、新たに生じた課題にもアプローチできる解決策はないか、といったような探求を続けます。究極のゴールは、価値を高めるのではなく、新たな価値構造を創ってしまうことです。

## 8-3 課題の書き換え

課題を分析しているうちに、「あれ、これが本当に課題なのか？本質はもっとこういうことじゃないのか？」と疑問が沸いてくるのがよく起きます。そんな試行錯誤を繰り返す中で、最初に設定していた課題より、もっともっと深くに入っていく、問題の核に迫っていく、それが課題の書き換えです。

逆を言えば、与えられた課題に疑いもせずにはせせと取り組むのは、表面的な課題解決であり、「課題→解決策」という単純なフローしか機能しません。

一番身近な課題の書き換えは、悩み相談でしょう。相談をしているうちに、いつの間にか違う相談になっている、なんてことがありますよね。悩んでいる本人自身には、なんとなく「悩み」があるけど、実際には話している本人でもうまく分かっていない場合があるんですね。単純な例ですが、課題の書き換えは、まさにそれと同じだと思ってください。

そうは言っても、課題の書き換えはすぐにはできるようになりません。意識していないとそもそも課題設定を疑うことができませんし、トレーニングしていないと行き当たりばったりで本質にたどり着きません。しかし、逆に言えば、意識をし、トレーニングを積んでいけばできるようになるのです。何となくのコツがあるんですね。・・・ということで3つお示しいたします。

### 3つのコツ

#### ① 課題解決のゴールを考える

ずばり、最大のコツは、「そもそもこの課題解決で何を達成したいのか」というゴールを考えることです。私たちは意外と目の前のゴールだけを考えがちです。そもそも何のために課題解決しているのだろうとWHYを考え連ねて、本質に迫っていきます。具体例で考えてみましょう。

*「水槽をイメージしてみてください。そこには洗濯や食事に必要な生活用水がたくさん入っています。しかし、水槽には穴が開いており、そこから水が流れ出していきます。どんどん水を補給していかなくは、水がなくなっていきます。」*

ここで、与えられた目の前のゴールは「水を補給すること」です。そして、解決策として考えられるのは、まずはパイプで川から水を補給する、といったようなことでしょう。

しかし、水を補給すること自体が本当の目的ではないですよ。そこで WHY を考えてみるわけです「なぜ水を補給するのか」・・・そもそも「水を確保すること」が目的ですよ。ここで課題が上書きされます。そして、そうすると、水槽の穴を埋めてしまおうという解決策のほうが理にかなっています。

でも、ここで終わりません。もっと WHY を考えてみましょう。「なぜ水を確保したいのか」。単純に言うと、生活するためです。ということは、本質的には「快適に生活する（それを水という視点から考える）」ということがゴールです。ここでさらに課題が上書きされます。すると、現在の水槽を使うことも必要なくなるかもしれません。節水家電があれば、必要な水は減ります。また、生活スタイルが変化すれば、この課題へのアプローチも変わります。

ここで、この話を「水」から「お金」「エネルギー」「食糧」などに変えて考えてみましょう。もちろんそれらは「使うため」にあるのです。しかし、使うことが最終ゴールではありません。「質の高い生活をする」ために使うのであり、「使う」という観点に捕われず、より高次の視野からこれらの問題に取り組むことが重要です。

## ② 目的と手段を見分ける

目の前のことだけにとらわれていると、本来は手段であるべきものがいつの間にかゴールになってしまっていることが多くあります。「果たしてこれは目的か、それとも手段か」、そう問いかけてみると、課題の本質が見えてきます。

1つ例を挙げると、「ハウ・レン・ソウ」、いわゆる報告、連絡、相談です。また会議や手続きといった類のもの。これらは重要ですが、あくまでも手段です。しかし、これにこだわるがあまり、それらが目的になってしまうケースがあります。「会議時間が1時間設定されているから、とりあえず集まる」なんてことは日本の社会では日常茶飯事です。結局その先に何をしたいのかという本当のゴールがよく分からない、なんてことはありませんか。

<具体例で考える>

例えば、企業内のコミュニケーションを高めるために、ある取り組みを行うとします。すると、それを成功させるにはどうしたらよいのか、と試行錯誤します。プロジェクトチームなんか作ったりして。そして、次第に「そのプロジェクトをする」こと自体がゴールかのようになり、本来の目的にとって代わってしまいます。場合によっては、その試行錯誤を巡って、人間関係が荒れたりしてしまうとこともあったり。。

しかし、そもそもそのプロジェクトは「コミュニケーションを高める」というゴールのための手段にしか過ぎないのです。その手段がいつの間にか課題解決のゴールになってしまっていることが多々あります。もっと言えば、コミュニケーションを高めることも、業績を上げるための手段ですよ。

このような目的と手段の見極めが課題の本質に迫るときには重要になります。

### ③ あいまいな部分を見分け、クリアにする

課題解決では、あいまいさをクリアにしていくことが1つの方法論として挙げられます。例えば、「快適な通勤」といった場合、「何をもって快適というのか」ということです。別の例でいうと、「顧客の反応が悪い」という課題について、では「どういう反応なのか、反応が悪いと感じる基準や根拠は何か、どのような場合だと反応が良いのか」ということを突き詰めていきたいのです。「反応」という一言で全部くくってしまおうとしがちですが、実はその一言の中に不明確な変数が多く含まれており、そのあいまいさに突っ込んでいきます。

あいまいなものに対して、「どのように」と問いかけて明らかにしていく、いわばHOWを探る作業と言っていいでしょう。すると、いろいろな因数分解ができ、課題の書き換えができるようになります。

### 課題の書き換え = 価値観の書き換え

前ページの水槽の例をもう一度考えてみましょう。最初の課題設定であれば、「水 = 生活に必須 = 多いほうが良い」という考えでした。つまり、「水は使い捨ての資源」という価値観がベースになっているのです。その中では「大きな水槽を作ろう」「川から水をもって来よう」という資源獲得の解決策しか生まれません。

しかし、技術が進めば、節水やリサイクルということが可能になります。すると、水が使い捨てではなく「再生可能な資源である」という価値観が生まれます（再生可能という概念が先で、技術開発が後というのが実情かもしれませんが）。その結果、さらに「水を賢く使う」という価値観が生まれ、資源再生という解決策が出てきます。当然、大きな水槽を作ったり、川からパイプを引く工事よりも、再生技術や節水技術の開発が命題になるわけです。

さらに時代が進むと、水がいない生活も考えられます。もちろん生きるためには恵みの水は必須ですが、水を必要としない場面も出てくるということです。例えば、防災用や介護用に水のいないシャンプーが出ていますが、これが改良されより便利に、より広く応用されるとしたらどうでしょうか。また洗濯なども水なしでできる技術が開発されつつあります。水田はその名の通り、水が必要ですが、将来的には畑で作れる米も流通するかもしれません。いや、ピーカーの中で米ができないとも限りません。まだまだ実生活での実用は遠いのかもかもしれませんが、そんな時代がこれから来るかもしれませんよね。その時、私たちは、水を使う技術、価値観から、水を使わない技術、価値観へとシフトすることもありうる話です。

こうやってみていくと、課題の書き換えはイノベーションのプロセスとも言えるでしょう。まさに、課題の分析、因数分解、そして課題設定の書き換えがクリエイティブなアイデアにつながるのです。

模擬国連でも議題の下に隠れた本質的な課題を見つけ、探究してみましよう（私は探求的課題と言っています）。

例えば、核軍縮。議題は「核の脅威を減らして平和を創造する」であり、各大使がそのゴールに向けて決議案を作っていきますが、核軍縮において「核の脅威をなくす」というのは技術的ゴールであって、本質的なゴールは「核に頼らない安全保障システムを構築する」ということです。しかし、「核に頼らない安全保障」ということを考えた時、もっとその奥底に探求的課題が生まれてきます。「核がない世界は今より平和なのか、今より不安定なのか」ということです。核は抑止力という観点から必要悪とも言われていますし、核がなかったら冷戦はもっと悪い結果を導いていたという仮説も一般的にあります。実際に、米ソはあれだけの緊張関係に立ちながら、実際に通常兵器による衝突は起こしていません。核によって微妙なバランスが保たれていたからかもしれません。核は平和を脅かすものであると同時に、核の均衡によって平和が保たれている、と言えるのかもしれませんが。そう考えた時、核とは何なんでしょう。そして、核のない世界が訪れたとき、何が起きるのでしょうか。核をなくすということは、現代世界情勢において、パンドラの箱を開けることでもあるのです。

もちろん模擬国連では、核軍縮をベクトルに交渉をしていくのですが、このような会議に取り組む機会がある以上、いち高校生として、「核軍縮の先に何かがあるのか」「安全保障において書くとは何か」という探求的な問いもぜひ意識していただきたいし、それによって自分の見ている核軍縮の枠組みがBGを超え、より広い視野でものを考えることができるはずで

ちなみに、みなさんは先ほどの「核がない世界は今より平和なのか、今より不安定なのか」という問いにどう答えますか。…と聞いてすぐに答えはおそらく本質的なものではありません。本質というのはもっともっと深いし、そもそも答えがないのです。それでも私たち人類が「平和」という漠然としたものを目指して、探求的課題を発見し、何度もその課題を書き直し、解決策を修正し、何度もループしていくなかで1歩でも近づいていく、、、それが模擬国連の課題解決マインドです。

上述の水の例ですが、水が豊富にある場合は「水 = 使い捨ての資源」という古典的な価値観でも生活には困りません。そばに川が流れていて、雨も定期的に降るような場所に住んでいたら、水を引っ張ってくればいいわけですね。わざわざ水をリサイクルする必要性も感じなければ、まして水を使わない生活にシフトしようなんて誰が思うのでしょうか。

その状況に慣れてしまい、それが当たり前になってしまえば、パイプと水槽以外の解決策は思いつきません。たとえ水が不足しても、どうやったら川から水を持ってこられるのか、ということ在必死に考えてしまうわけです。水槽の穴から水がダダ漏れしているのに、がむしゃらに水を

補給して、水槽を埋めようとしている姿は滑稽なものでしょう。

私たちの周りにも、こういう例がたくさんあるのだと思います。私たちが当たり前だと思っているがために、課題の本質が見えていないことが。そして、その時、おそらく私たちも外から冷静に見れば滑稽なのでしょうが、自分たちはその滑稽さに気づきもしないのです。

そこで重要なのがクリティカルシンキングです。批判的思考というように訳されますが、一般的には、「常に、『これって正しいのか』と疑いを持ち、自分で考える力」と言われます。この言い方では不十分です。私の定義は「本質を問う探求型思考力とマインド」です。

「2つとも同じじゃん」と思われてしまうかもしれませんが、「疑う」、「自分で考える」はあくまでも手段です。重要なのは「何のために疑うのか、何のために自分で考えるのか」ということです。それは、うわべの課題ではなく、本質を見抜きたいからです。「そもそもこの課題解決で何を達成したいのだろう」とゴールを問うから、課題の本質が見えてくるのです。

クリティカルシンキングではWHYを問うことを大切にしていますが、そういう意味では、か何度も「WHY?なんで?」問い重ねて、ゴールに迫るということがキーになります。キーですね。前述の水槽の例でも述べましたが、「なぜ水を補給しているのだろうか → 水を保つため → なぜ水を保つのか → 快適に生活するため」というように進んでいくわけです。有名な話ですが、トヨタでは5回WHYを繰り返して、本質を見抜くということを新人トレーニングの段階からやっています。それが全てではありませんが、1つの方法論としては理にかなっていると思います。

### 「当たり前」の本質を探求する

もう一度水の例に戻ります。「失って初めて、その大切さに気付く」とよく言われますが、本当に水が不足してきたら、レベルの違いはあれども、誰でも課題の書き換えを始めます。「大きな水槽を作ろう」「パイプで水を引いてこよう」と解決策を思いついてもそもそももう川に水がないのなら、強制的に違う解決策を模索しなくてはなりません。要は、差し迫れば、否応なしに課題の書き換えが起きるのです。

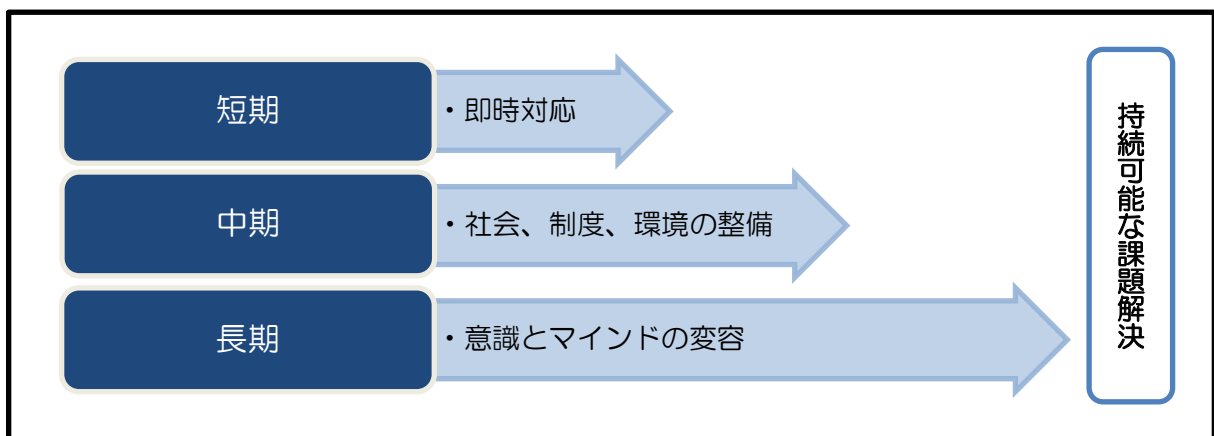
しかし、それは最初に立てた課題設定が自ら崩壊してくれているだけであり、とりあえずの解決が成されれば、またそこでストップしてしまいます。場合によっては、元の状況にもどることもあり得る話です。

私たちが養いたいのは、自発的にそして能動的に課題を書き換えていくマインドと思考力です。当たり前が当たり前でなくなってから走り出すのではなく、当たり前である段階から、本質を探究しようというマインドが、本質的な課題解決、ひいてはイノベーションにつながっていくのだと思います。

2017年2月、玉川学園でSGH模擬国連大会が開催されましたが、その前日講演会で田瀬和夫氏（前国際連合人道問題調整部・人間の安全保障上級顧問）の話を聴く機会がありました。その時は児童労働がテーマだったのですが、「権利とは人類の発明である」という冒頭の話から1時間余り、彼の話に引き込まれ、久しぶりに鳥肌が立つような刺激を受けました。その中で、彼が述べていたことは課題解決のアプローチの肝として重要なことであり、ぜひここでも共有したいと思います。

彼が言うに、「課題解決は短期的、中期的、長期的な政策を考え、それを同時にスタートする」ということです。例として、東京の渋滞があげられていました。30年前の東京は今とは比較にならないほどひどいもので、排気ガスの排出も多大なものがありました。そこで、まず左側レーンの駐車違反の罰金を一気に引き上げました。路上駐車が邪魔ということもありますが、それにより左折が滞る車が出てきて、渋滞の原因になっていたからです。罰金を上げることによって、まずその滞りをなくし、短期的な効果を生み出しました。次に中期的政策としてGPSカーナビなどの利用により、渋滞緩和をなくしていきます。最後に、何十年もかけて高速道路や環状線の整備などインフラ面を整備していきました。おそらくそこには都市計画も絡んできたでしょうし、車以外のインフラ（地下鉄の延線など）も含まれます。同じスキームを女性の権利問題を例にとって提案していました。まず暴力を受けていたり差別被害を受けている女性を男性から引き離し、保護する緊急策を講じる（短期）、法的整備をして、重罰化などで差別を制度的になくしていく（中期）、教育により緩やかにでも確実に差別意識をなくしていくこと（長期）という3つのフローが示されていました。

これを私なりに解釈すると、短期的政策は「目の前の問題に対処することで、モグラたたきのな解決策」、中期的政策は「社会と制度、環境を変えることであり、ハード面の整備（外発的行動変化）」、長期的政策は「人の意識とマインドといったソフト面の変容（内発的行動変化）」です。そして田瀬氏が述べるとおり、この3つを同時にスタートさせ、同時に取り組むことが必要だということです。言い換えれば、①問題の対処、②社会、制度、環境の整備、③教育などによる意識改革は全て連動しており、どれか1つをとっても機能しないということです。





これまでも確かに分野や論点に分けての解決策の議論は行ってきたはずですが、例えば、この問題にはこう対処しよう、法整備はこうしよう、教育はこうしよう、など論点ごとにはなしをしていきますが、それを時間軸と結び付けていくということは十分にできていませんでした。その政策が短期的なのか、中期的なのか、長期的なのか、それは全て後付けで決まってしまうことの方が多いのではないのでしょうか。しかし、論点と時間軸をつなげて「短期的政策としてどのように問題に対処し、中期的にどのように社会を変え、そして長期的にどのように意識を変えていくのか」と議論していくことは重要かつ有益でしょうし、解決策の時間軸もはっきりし、政策の質や一貫性、具体性も高まってくるでしょう。

## 8-7 解決策に求められる要素

解決策が十分に機能するには以下のような要素が求められます。これらは立案の際に意識すべき要素でもありますが、後で決議案の評価をする際にも規準になるものです。

- ① 具体性
- ② 実現可能性
- ③ 不可逆性
- ④ 持続可能性
- ⑤ 透明性
- ⑥ 検証可能性
- ⑦ 正統性

### ① 具体性

課題解決を進めるには具体案、具体政策が必要になります。「核を減らしていこう」と言っても、「だれが、いつ、どのように」など具体的な責任とアクションにつながらなければ解決にはなりません。責任や時期、手法が決まっていなければ解決にはつながりません。模擬国連では国際合意を取りつけるため決議案が抽象的になっていくことがしばしば見られますが、やはり具体的な行動につながればより良いことには変わりありません。

### ② 実現可能性

これは具体性と対になる概念ですが、どんなに理想が述べられていても、それが実現できないようなプロセスであれば意味がありません。核軍縮では、核廃絶をいきなり求めても現実的ではありません。核保有国も非保有国も一緒になって具体的な一歩が踏めるように、プロセスと段階的目標を定めて、実現可能なものにする必要があります。

### **③ 不可逆性**

せっかく決議がもとに戻らないようにしていかなくてはなりません。みんなが協力して解決に当たったのに元に戻ってしまうのであれば、努力が無駄になり、ばかばかしくなって責任を果たそうという人がいなくなってしまう。現実的には、アメリカのトランプ政権によるパリ協定（気候変動の協定）脱退など、せっかくの努力が対抗してしまうこともあります。そういうことがないようにしていく努力や対話が必要です。

### **④ 持続可能性**

不可逆性を担保するためにも、課題解決が一時的なものではなく、持続していくことが必要です。これには中期的、長期的政策がしっかりと組みこまれていることが肝になります。

### **⑤ 透明性**

課題解決がオープンな手続き、オープンな形で進んでいくことを意味します。各々がしっかりと責任を果たしているか、課題解決が進んでいるのか、そういうことが関係者全員に見えるようにし、共有されていく必要があります。この透明性が確保されていることが、次の検証可能性を担保する前提でもあります。

### **⑥ 検証可能性**

ここで言う「検証」には3つの役割があります。1つは「解決策が実際に有効なものであったか」という自己評価、2つ目は「目標通りに進んでいるか」というプロセス検証、そして3つ目は「各々がしっかりと責任を果たしているのか」という相互検証です。特に3つ目については内部調査や自己申告だけでは信用性も欠けますし、分かりづらい部分があります。例えば、軍縮の目標を決めたとして、本当にそれぞれの国が決めた目標について努力し、進めているのか、正確に自己申告をしてもらうことも必要ですが、他者、第三者の目で見えていくことも求められます。その検証を可能にするためには、透明性だけでなく具体性が担保されていることが前提です（具体的な目標やアクションがない所で検証はできないため）。

### **⑦ 正統性**

どんなに良い解決策であっても、そこに正統性がなければ実現しません。その正統性とは「誰もが納得する内容と実施方法、手続き」という意味で、「だれかの」解決策ではなく、「みんなの」解決策でなくてはならないということです。アメリカが作った解決策をアメリカが主体となっていくとなれば、反発が出ますし、どんなに良いものであっても賛同できない国が出てくるでしょう。しかし、国連という主体が（大国主義だとしても）中心になってオペレーションを進めていくのであれば、その解決策は正当性を帯び、より多くの国が「自分たちの」問題として関わっていくことができます。

解決策が提示されたら、ぜひ考えていただきたい問いが2つあります。

1つ目は「なぜこれまでその解決策は実行されていないのか」もしくは「(実行されているとして) なぜそれで今なお問題は解決されていないのか」ということです。模擬国連に限らず、あらゆる課題解決プログラムにおいて生徒たちは創意工夫にあふれた解決案を提示してくれ、中高生だからこそ着眼、発想できる「目からウロコ」というような案もあり、私たち大人も感心させられることもしばしばあります。それぞれの具体的評価はさておき、生徒が課題に誠実に向き合っただけの解決案ですので、どれも意義のある成果物です。しかし、一方で、中高生が考える程度の解決案はすでに実世界で考えられているはずで、例えば、模擬国連で言えば、中高生が2日で考える解決案は70年を超える国連の会議の中でとっくに考えられているものです。しかし、なぜいまだに課題が残っているのでしょうか。「世界は決議案よりも奇なり」ですから、課題なんてそんな簡単に解決されるものでないし、万能な解決策なんてないのかもしれませんが、もしかしたら自分たちの解決策が取られてこなかった理由があるのかもしれない。その観点から、前項の「解決策に求められる9つの要素」をもとに解決策を評価してみてください。きっとそこに新たな視点が生まれ、より課題探求を深めることができるでしょう。

2つ目は「この解決策が連れてくる新たな課題は何か」ということです。「課題解決はループする」ということをもう一度意識してください。1つの課題解決があらたな課題を連れてきます。答えのない課題解決である以上、課題解決はらせん状にループしながら続いていきます。いたちごっこのようですが、それが課題解決の本質であり、私たちにも求められる意識ですし、それをつなげてきたことが人類の知恵です。さて、では、皆さんの出す解決策はどんな課題を生み出したのでしょうか。特に模擬国連は、1つの議題について焦点を絞って課題解決に取り組んでいますが、実はほかのところで連鎖反応が起き、別の分野でバランスを崩してしまっているかもしれません。また国際社会には「国同士のパワーバランス」という永遠の課題があり、それが課題の動力になっている以上、課題解決が止まることはありません。ぜひ解決案を提示したことに満足せず、その後の評価、未来予測をふまえて、解決案に対する問いを自身で探求してみましよう。

## Column 4

### ～国連に託された平和の願いに触れて～

*WE THE PEOPLES OF THE UNITED NATIONS DETERMINED to save succeeding generations from the scourge of war, which twice in our lifetime has brought untold sorrow to mankind*

(われら連合国の人民は、われらの一生のうちに二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救い)

これは国連憲章の冒頭文です。2度の戦争とは言うまでもなく第一次世界大戦、第二次世界大戦を指します。残酷な戦争が生命、権利、尊厳、自由を奪い、人と世界を破壊していく様子を目の当たりにし、二度と戦争を後の世代に経験させてはならない、そういう平和への強い思いを持って、国連は設立されました。

元政務官の田氏によると、国連憲章の草案には元バーナードカレッジ学長のバージニア・ギルダースリーブ女史の力が大きく、彼女はルーズベルト大統領の「4つの自由」を体現し、上述の冒頭文を憲章に盛り込むことに貢献したということです。

そのルーズベルトの「4つの自由」とは、1941年1月の一般教書演説の中で述べられています。その演説の中で、彼は「米国民だけでなく万人の権利である普遍的な自由を守るのだ」と声を上げ、独裁主義、軍国主義に対して民主主義の徹底抗戦を宣言しました。

#### ルーズベルトの「普遍的な4つの自由」

- freedom of speech and expression (言論と表現の自由)
- freedom of every person to worship God in his own way  
(すべての個人がそれぞれの方法で神を礼拝する自由)
- freedom from want (欠乏からの自由)
- freedom from fear (恐怖からの自由)

その平和の誓いは、戦争終結後いきなり米ソ冷戦という試練に遭遇し、その後も多くの戦禍に見舞われました。そして現在もおテロの脅威、ISILなどの諸問題に囲まれており、また、人類の大多数が4つの自由を享受できていない現状があります。国連創設から70年以上たった今もルーズベルトやギルダースリーブの願いはいまだ果たされていません。しかし、だからこそ、私たちは国連憲章、そしてルーズベルトの思いに立ち戻り、先人の願いを改めて引き継ぐことが大切なのではないでしょうか。現実的には平和に程遠い70年でしたが、その尊い願いと理念は今でも私たちが目指すべきものであるはずで、模擬国連を通して、次の世代を担う生徒の皆さんがその願いに触れ、動き、考えてくれれば、この世界は少しだけ豊かになるのかもしれませんが。その思いを込めて、この冊子の冒頭と巻末に国連憲章とルーズベルトの言葉を載せておきます。ぜひご一読ください。

## CHAPTER 9 コミュニケーションと交渉

### 9-1

### 交渉の大前提

大前提として、交渉は答えが1つに定まっていない時に起こります。つまり答えが複数ある場合やむしろ答えがない場合に起こるということです。1+1の答えは交渉する必要がないですよ。買い物の値段交渉だって相手からは「1つ100円」という解が提示されているけれども、いや「もう少し安い解でも許容範囲だろう」ということで交渉するわけです。さすがに「1リットルの水を中身をそのままに500mlとして売ってくれ」と解をねじ負けて交渉することはないでしょうし、あったとしてもそれは交渉ではなく理不尽なクレームです。

ですから、交渉に臨む際の一番重要な大前提は「正解がないんだ」という理解をしていることです。「自分が正しいわけではない、相手が正しいわけでもない。ただ今のままではお互いが首を縦に振れないから、交渉によってお互いが納得できる答えを出そう」、それが交渉と呼ばれるものではないでしょうか。この大前提は、当たり前のことなのに多くの人が十分に理解、意識していないことです（おそらく皆さんもそうだったのではないのでしょうか）。

つまり、交渉は「正解」を探すプロセスではなく、意見や立場の違いがある中で「納得解（納得し、受け入れられる答え）」を創り出すというプロセスです。交渉では「Win-Lose」という言葉を使いますが、それはあくまでも「Right-Wrong」ではありません。自分の交渉が上手くいくと、自分の解が正しかったかのように錯覚してしまいがちですが、あくまでも交渉の結果が当初の自分の立場、意見に近い形で終わらせることができた、ということです。

同様に、交渉を始めるにはその相手にも「正解がない」ということを理解してもらうことが大前提です。扱っている問題が本当は多面体のように色々な角度から観察できるものなのに、相手はその一面しか見ていないのであれば、その多面体を相手の目から全体像が見える距離まで引き離していくことです。いろいろな立場から見ることによって、実は多面的な要素があるということ客観的に提示していくプロセスが必要です。

#### 大前提は難しい

相手も「正解がない」「答えは1つじゃない」と共有してくれているなら、ひとまず交渉はスタートできます。しかし、これは意外と難しいのです。というよりも、人間の性質上、フラットに「正解がない」と認めることは現実的には不可能なのではと私は思っています。口では「正解がない」と言っている、自分が導き出したものである以上それは立派な「解」だからです。その自分の解を譲ってまで、別の解を受け入れるには何のメリットがあるのでしょうか。私たちだって交渉をしていて、「なんで分からないのかな」とイライラすることもあります。それも結局は自分たちの解が少なくても「より正しい」と思っているから出てくる感情です。

文化価値観、とくに宗教が絡むと交渉が難しくなるのはここに一因があります。宗教は精神の中枢を支えるもので、信者にとっては真実・真理であり「正解」なのです。この正解を疑うことは、彼らの精神そのものを否定することになりますし、それを否定できるぐらいだったらそもそ

も信者ではないのかもしれませんが。いくら多面体を持ってきて「他の角度から物を見よう」と言われても、彼らが見ているのは1つの面だけで、それが彼らの世界です。

また、相手が成功体験を持っているケースも、その解が「正解」として認識されているので難しいです。例えば、教育でも良くある話ですが、時代が変わる中で「古い教育」と批判されるものであっても、「私が生徒の時はこれで大学に受かった」とか「これまでもこのやり方で難関大学に生徒を出してきた」などといった成功体験があると、少なくともその人にはそのアプローチが正解なので、リスクを負ってまで別の解を考慮する必要がないわけです。

もう1つ交渉に持ち込むのが難しい相手は「いろいろな解があっていいじゃないか」というタイプの相手です。一見、柔軟なリベラリストに感じますが、悪く言うと「人は人、自分は自分」というタイプです。この手の人は、交渉を「干渉」と見なすので、こちらの解に突っ込んでくることもしませんが、自分の解に交渉の手が伸びることを極端に嫌がります。「いろんな」価値観があっていいんでしょ、だから自分の解だっていいじゃない」と開き直り、交渉の土台にあがることを拒みます。実は私自身が性格的にはおそらくこの類に入るので、よく分かるのですが、一番厄介な相手です。

このように、交渉の大前提を共有するだけでもタフな相手が出て、一口に「交渉」と言っても、その土台に上がることも時に容易ではありません。

## 9-2 Win と Lose による交渉の動機

では、どうやったら交渉の大前提に引き込めるのか。「別の解を受け入れることのメリットがある」、もしくは「今の解を保持することのデメリットがある」という2つの動機です。交渉で扱うのは「正解」ではなく「納得解」であるということをもう一度頭に入れておいてください。そこには「納得度」という価値がついて回ります。その価値がより高ければ、つまり、納得度がより高ければ相手も興味を示すでしょうし、現状の解の納得度が下がってしまうのであれば「より良い解を模索せざるをえなくなります。逆に言えば、新しい価値を相手に提供することなしに、交渉は始まらないということです。

後で説明する通り、交渉は Win-Lose となるゼロ・サム交渉と Win-Win を目指すプラス・サム交渉に大きく分類されますが、これも簡単に言えば解の価値を巡る2つの動機が根底にあります。「負け分 (Lose) は出たくないし、勝ち分 (Win) は大きいほうがうれしい」というごく単純な動機です。ですから、相手の解に対するデメリットや Lose を提示し、自分たちの解のメリットや Win を理解してもらいように働きかけます。Lose の部分が強調され、対立軸になれば「勝つか負けるか」のゼロ・サム交渉になりますし、Win の提示が共有されるなら Win-Win を目指すプラス・サム交渉になります。

### 何が Win なのか

何が相手にとって Win なのか分からなくては交渉は進められませんし、まして相手に価値ある

提示はできません。つまり相手の利益であり、模擬国連で言えば国益です。経済や軍事など分かりやすい直接的な利益もありますが、他にも名誉、体面、イメージを含めて、ひと言で言えば「国際社会における地位・評価」という目に見えない利益もあります。1956年に国連に加盟する際に「世界で名誉ある地位がほしい」と述べた日本のように、国際平和に貢献するということは1つの利益になりえますし、その逆もしかりです。

最近の例で言えば、アメリカ・トランプ政権がパリ協定を離脱するなどアメリカファーストを主張する中で、国際社会から非難を浴びる形になり、ドイツのメルケル首相がG7の会議で「アメリカに頼ることはできない」というニュアンスのことを表明しました。一方、中国がアメリカに取って代わろうとし、北朝鮮に対する非難決議の賛成も含めて柔和な態度を取りつつあります。この2国のスタンスについて、評価するほどの知識も思考も私にはありませんが、アメリカは実質的な国益を取る一方で失っているものもあるでしょうし、中国は柔和な態度を取る一方でWinを得ている側面もあるでしょう（ちなみに、このアメリカ、中国の話は私の個人的な見解ではなく、2017年6月の上智国連WEEKのパネルディスカッションで話されていた内容です）。

### 9-3 ゼロ・サム交渉とプラス・サム交渉

交渉には大きく分けてゼロ・サム交渉とプラス・サム交渉というものがあります。以下の表は御手洗氏が『ハーバード流交渉術』の中でまとめた2つの交渉の特徴です。彼曰く、前者は片方が負ければ、他社が負けるというWin-Loseの交渉になり、競争関係が生まれます。後者は全ての参加者がWinを享受するというWin-Winの交渉で、こちらは協創関係で行われます。同じ「きょうそう」でも全く別の関係性がそこにはあります。

模擬国連では、対立軸のはっきりした議題だと結果的にゼロサムのな決議案になることも多くありますが、「コンセンサスを目指そう」というゴールがあり、それぞれの国が納得がいく政策を作り、みんなで世界平和を1歩前進させようという趣旨なので、プラスサムを理想として課題解決が進んでいくことが理想です。

	プラス・サム交渉 (Win・Win 型)	ゼロ・サム型
スタイル	双方がメリットを探求 (相互相乗)	勝つか負けるか (ディベート型)
戦略	相互に利益を掘り起こす	闘争を通して利益を勝ち取る (要求中心)
条件	多種多様	単一的
前提	可能性が多い	資源が限定されている
両者の関係	継続有の長期決戦	その場限りの短期決戦
結果	Win-Win	Win-lose

日本人は交渉下手と言われるますが、一般的に言われている理由を含めて、私が感じる理由を以下に4つ挙げておきます。

### 直接的な言い方を好まず、交渉をネガティブにとらえる文化的価値観

「交渉」というとどんなイメージがありますか。1つには「巧み」といったイメージが出てくると思います。あれこれ手を使って、相手を説得するというイメージです。巧みであるがゆえに専門的なイメージもあります。さらに、直接的な言い方を好まない日本文化にあって、交渉というとなんとなくネガティブな、場合によっては「反論」「姑息」といったようなイメージが私たちのどこかに根付いているように思います。

例えば、仕事において給与というのは労働対価であり、仕事を決めるうえで重要な要素であることは言うまでもありませんが、日本の採用試験では「規定による」と言ったように給与が明示されないまま行われるところがあります。その給与について面接で聞いたり、自分をアピールして交渉しようとか、なかなかそういうことは難しいですし、話題に出すだけで心証を悪くしてしまうのではないかと心配してしまいますよね。しかし、欧米を中心とした海外では給与面について話題に出すことは一般的で、そのことによって採用が左右されるということは日本より少ないでしょう。これは文化の違いでもありますが、企業の労働に対する態度の違いでしょう。欧米は近代法がそう定めているように「労働は契約である」ととらえており、双方が納得して契約をするために交渉は許容されますが、日本では仕事を「会社への奉仕」と考えてきた側面がまだ残っており、「奉仕なのに交渉するとはけしからん」とか「何かにつけて反発しそうだ」といったようなニュアンスが残ってしまうからです。採用試験のような人生に大きな影響を与える場面じゃなくても、スーパーや家電量販店で値段交渉をすることすら苦手です。値段交渉すると「大阪のおばちゃんみたい」なんて言いたくなります（このステレオタイプは大阪のおばちゃんへの偏見でもあります、実際に関西人は交渉回数が多いというのは何かの実験で出ていました）。

### 「話せば分かる」という思い

御手洗氏も述べていますが、日本人はなんだかんだ「話せばわかる」という思いが強く、「交渉なんて生臭いものをしなくても顔と顔を突き合わせて話しすればいいんだ」という方向に進んでしまいます。良くも悪くも日本人は人が良いのでしょう。だから人と人のつながりで何とかなると思うし、その関係性を破って交渉ごとに入ることに躊躇してしまうのでしょうか。

### 言語（英語力）の不足

2つ目は言語の問題ですが、これは思った以上に大きな理由です。「日本人は交渉が下手」というセリフは、国外と比べて言われた言葉に他なりません。つまり、その評価は国際的な舞台で下されたものか、もしくは異文化比較によるものです。簡単に言えば、日本人は英語力が十分でないから、国際的に交渉が下手なのです。「英語が全てじゃない」という人もいますし、実



際その通りなのですが、言語からは絶対に逃げられません。心理戦やその他のスキルが必要だと言っても、古代ギリシャのソクラテスの問答法がそうだったように、なんだかんだ交渉の最大の武器は「言語」だということです。これは英語を苦手とする多くの日本人にとって厳しいですが、直視しないとイケない事実です。私たちが英語を苦手とする限り、交渉で力を発揮できず、パフォーマンスレベルを下げてしまいます。「日本人は母語でも交渉下手だよ」ということも言われますが、それが真だとしても、追い打ちをかけるように英語力が大きなハードルになります。英語がきれいでも、大胆に主張を述べる勢いがあればよいのですが、他のアジア諸国の人と比べても、日本人は概してよく言えば繊細、悪く言えば神経質であり、「交渉＝ニュアンスまで分からないとできない」という思いから、英語となるとさらに引っ込み思案になってしまいます。

### **交渉を体系的なシステムととらえる意識の欠落**

4つ目の理由として、交渉を「システム」としてとらえているかどうかの違いです。欧米ではコミュニケーション学も早くから発達し、交渉が学問として根付いています。『ハーバード流交渉術』の著者、御手洗氏も、交渉はアメリカの高等教育でも当たり前のように教えられ、教養人の必須スキルであるということを述べています。欧米では、多文化共生社会も手伝って、コミュニケーション、交渉が一種の科学として成立しているということです。難しい言葉を使いますが、欧米では交渉がメタ化されています（ただ技術を使うのではなく、客観的に意識すべきもの、研究すべきものとして捉えられているということです）。「交渉は学び、意識すれば上手になる」という価値観から、体系だった交渉術が教えられています。本当に交渉が科学的に機能するものなのかは分かりませんが、心理学的な研究との関連もあり、一定程度の効果はあるでしょうし、何よりそう信じていて試行錯誤していれば、交渉に対して意識が高まることは事実でしょう。日本人にとってももちろん交渉は身近なものですが、体系的にそして科学的に捉えることや教育の中で教えられるということはまだできていません。このように「交渉科学」における発展度の違いが、日本人が交渉にまだなじめていない理由の1つだと考えています。

これに関連して、P.C.G.（パンネーションズ・コンサルティング・グループ）のウェブサイトでは、日本人の交渉スキルが自らの経験に基づいた我流の交渉スタイルであるということが問題点として挙げられています。その結果、「個人的志向の強いワンパターンなもの」になってしまうということですが、これも交渉をシステムとしてとらえられていないからと言えます。

## **9-5 コミュニケーションと交渉の文化差**

日本人のコミュニケーションスタイルは概して間接的と言われますよね。それは時に「あいまい」「はっきりしない」「白黒つけたがらない」など、ネガティブにとらえられることもあります。コミュニケーションスタイルには文化による違い、個人差があるのは当然で、「はっきり言わないとダメ」とか「間接的なコミュニケーションは良くない」などといった優劣はありません。むしろ日本的なコミュニケーションは洗練されたやり取りであると思いますし、ある種共感型で

あると言えます。しかし、一方で、交渉、特に国際交渉、異文化交渉という舞台にあっては、日本的なコミュニケーションスタイルが必ずしもこちらが思うように相手に受け入れられ、機能するわけではありません。その中で、どのようなコミュニケーションを意識すべきか、欧米型と日本型のコミュニケーションスタイルの違いを含めて考えてみましょう。

### ハイコンテキスト文化とローコンテキスト文化

コンテキストは「文脈」という意味で、会話の空気やその場の状況のことを言います。ですので、ハイコンテキスト文化とは「文脈の依存度が高く（High）、言葉をはっきりと言わない文化」であり、一方、ローコンテキスト文化とは「文脈の依存度が低く（Low）、言葉をはっきり言う文化」です。簡単に言えば「お互い空気読みながら、悟りながらコミュニケーションとろうぜ」というのがハイコンテキストで、「伝えることははっきり言葉で伝えなきゃわかんないよ」というのがローコンテキストです。日本は「空気を読む」とか「顔色をうかがう」といった言葉があるように、間違いなくハイコンテキスト文化ですよ。

昔あるテレビ番組で、取引先の上司と食事をしている際に「テーブルの上の醤油を取ってほしい」ということを伝える際、一番正しい言い方は何かというクイズがあったのですが、その正解は「あの…醤油…」でした。「醤油をお取りいただけますか」ですら直接的で失礼であり、「醤油…」だけで察してもらうのが良いというような解説でしたが、その答えが妥当かどうかは別として、直接的な言い方を好まないという究極の例でした。

対照的に欧米文化に近い人はより直接的な言い方をしてきます。共同作業が多い日本の稲作に対して、より個人作業の多い畑仕事だったからという説もありますし、ソクラテスの問答法にみられるようにディスカッション文化が根付いているということも関係があるかもしれません。しかし、私が一番大きい理由だと思っていることはやはりその文化の多様性です。陸続きであること、そして昔も今も移民が盛んで、いろんな文化価値観が混在しています。その多文化の中では、自分の当り前はほかの人の当り前ではなく、はっきり物事を言わなくては通じない、主張できないという風土が出来上がったことだと思います。

そうは言っても「欧米の人だって同じ人間だし、なんだかんだ表情や雰囲気で察することはできるでしょ」と思うかもしれません。もちろん彼らも空気を読みますし、コンテキストに基づいてコミュニケーションをします。しかし、私の経験則ですが、欧米文化の場合、言葉が空気、コンテキストよりも優先される傾向が強いと感じ、日本人とは思った以上に差があります。この「言葉が優先される」という点については、国際交渉にあたる際に心にとめておくといよいでしょう。

### コミュニケーションの責任は話し手にある

コミュニケーションの参加者は主に話し手と聞き手に分かれますが、「コミュニケーションの成功」に責任を持つのはどちらでしょうか。私はこの点について、日本と海外では考え方に違いがあると感じています。日本では「行間を読む」「空気を読む」「1を聞いて10を知る」など、聞き手に努力を求めている部分が多くあります。「コミュニケーションは話し手と聞き手の共同作業」といった感じですよ。

一方で海外のコミュニケーション、異文化コミュニケーションでは、「話し手がコミュニケーシ

ョンの責任を負う」という価値観が強いように感じます。言語学の Pragmatics（語用論）という分野で Grice's Maxim（グライスの原理）という有名な原理があるのですが、そこでは「コミュニケーションの成功には、話し手が量、質、関連性、様態の全てにおいて責任を持たなくてはならない」とされています。これは言語学の理論にとどまらず、海外のコミュニケーションにおいて、実践的にも広く持たれている価値観だと感じます。

ちなみに、私が生徒に受験や TOEFL の英作文を指導する際には、ここは重点的に指導する1つになります。どうしても生徒は相手に理解の努力をゆだねる文を書き、その結果ロジックが乏しい文章に仕上がってしまいます。例えば「高校生は留学すべきだ」という主張があり、それに対して「様々な文化に触れることができるから」という理由があるとします。一見問題のないロジックに思えるかもしれませんが、「様々な文化に触れることがなぜ、どのように高校生にとって必要なのか」ということが述べられていません。生徒の中では「異文化体験＝素晴らしいこと」という一般論が当たり前のロジックとして埋め込まれていますが、実はこの2つは必ずしもつながっておらず、その解釈は読み手に委ねられてしまっているのです。この点を1歩踏み込んで話し、自分の意見としてロジカルに話をするのであれば、より説得力を持ったものになりますよね。特に異文化であれば、聞き手に解釈を委ねたはずが、その通りに受け取ってもらえなかったり、立場が違えば逆のロジックに解釈されてしまうこともあります。この「自分がコミュニケーションの成功に対する責任を持つ」という意識は、少なくとも交渉、主張という言語機能を果たすときにはとても有効であり、特に異文化コミュニケーションの局面では重要です。

## 9-6 自分のコミュニケーションスタイルを理解する

コミュニケーションスタイルには個人間でもバラエティがあります。株式会社バリューイノベーションのホームページに掲載されていた4つのスタイルが面白いと思ったので、1つの例としてここでも引用させていただきます。

場面に応じていろいろなタイプを演じられるのが良いのかもしれませんが、やはり自分のスタイルを変えるのは難しいですし、変えることで他が上手くいかないということもあるでしょう。また4つのスタイルは便宜的な区分であって、実際はこのようにはっきり分けることができず、程度、バランスの問題と言えます。重要なのは自分のスタイルの特性を把握して、その特性が生きるようにコミュニケーションをとっていくことと、経験を積むうちにそのスタイルの幅を少しずつ広げていき、足りない部分をカバーしていくということです。

まずは自分、そして相手のコミュニケーションスタイルを把握することが大切ですが、模擬国連においては自分のペアパートナーがどのようなタイプかを把握することがとても重要です。2人で補い合い、役割を分担できるといいですよ。



- ① 総論でまとめ、各論で交渉する
- ② 自分たちから交渉を仕掛ける
- ③ トップライン、ボトムライン、各ラインの優先順位を設定する
- ④ Win のパイを広げる
- ⑤ 持つ者と持たざる者の多角的な関係性を掘り起こす
- ⑥ All win は求めない。相手に Win 感を持たせながら、自国の Win を広げる
- ⑦ Lose は抽象度を高める
- ⑧ 立場に焦点を置かず、利害に焦点を置く
- ⑨ 客観的事実や根拠に紐づける
- ⑩ 意見を批判する、相手を非難しない

### ① 総論でまとめ、各論で交渉する

立場が違えば、細かい部分では意見が合わない部分が多くあります。最終的にはそこまで摺合せしていく必要がありますが、最初の段階から細かい部分にこだわってしまっただけでは合意にたどり着くことはできません。まず総論として意見の一致を大枠の議論で図り、細かい点は細かいやり取りで交渉していきましょう。特に模擬国連では DR 提出にスポンサー数が指定されていますので、まずは大枠合意を取り付けられる国でまとめ、その後、国益の確保に向けて喧々諤々やり取りをしていくことになります。

### ② 自分たちから交渉を仕掛ける

交渉に慣れていない人は気が重いし、難しい気がするので、とりあえず相手の出方を見るというスタンスを取りがちです。しかし、複数条件がある中で、相手の土俵で相手の選んだ条件からスタートするのはとても難しく、その時点で不利な立場になります。ですので、自分たちからまず交渉を切り出し、流れを作ることが重要です。しかし、交渉を切り出したもののリサーチやプランが十分でなければその流れは続きません。大胆かつ冷静に進めていきましょう。

### ③ トップライン、ボトムライン、各ラインの優先順位を設定する

交渉に際してトップライン、ボトムラインという2つをしっかりと意識することが重要になります。トップラインとは100点満点の理想ラインで、ボトムラインは最低限のライン、簡単に言えば「これだけは死守しなくては国に帰れない」というラインです。日常の買い物でも「できればこの値段で買えれば理想、最大でもここまでしか払えない」といったようにこの2つは設定していますよね。模擬国連でもこれらの設定が必要で、それこそ国益とは何かということに直結します。初心者にありがちですが、ボトムラインがしっかり分かっておらず、成り行きのまま DR

グループに入った結果国益を損なっていることが見受けられます。

またトップライン、ボトムラインにも優先順位があります。複数の論点がある場合、各論点ごとにラインを設定していきませんが、それらは全てが等しく重要なわけではありません。例えば安保理改革で、議席、拒否権、透明性といった論点があったとして、それぞれ自国の利益の含んだトップラインを設定しますが、その中でも、G4 など議席が最重要だと考えるグループもあれば、S5 のように常任理事国の権力構成を変えることは難しいという理由から透明性に重点を置くグループもあります。また議席の論点を1つ取っても、常任理事国の数なのか、非常任理事国の数なのか、地域代表制なのか、優先順位が細かくあるはずで、その優先順位をしっかりと把握して、何をまず達成したいのか、何が絶対譲れないものは何か、妥協できる論点はどこか、など、考えておきましょう。

こう考えると、実はトップライン、ボトムラインとは「ライン」というよりも少し幅のあるゾーンとして考えたほうがより運用的です。その中で、トップライン、ボトムライン段階的に設定し、最終的な局面ではその優先順位を判断しながら交渉していくことです。

#### ④ Winのパイを広げる

限られたパイの中で Win を分け合っても手もとには小さな Win しか残らず、結果的には奪い合いが起きてしまいます。もし Win のパイを広げることができれば、全員の Win が増えていき、共存共栄が実現できます。ここに競争関係ではなく共存共栄を図るメリットがあります。ビジネスにおいてもそうですよね。業界内で競争しあうことも大切ですが、業界全体を盛り上げて消費者のニーズを底上げしていけば、必然的に利益が膨らみます。

1つのアプローチは新しい価値、付加価値を創造するということです。今の価値だけで Win を争うのではなく、新しい価値ができれば Win が増えますよね。そのアプローチは次の「持つ者と持たざる者」の部分で触れます。

さらに国際関係において「パイを広げる」のに必要な重要かつ根本的なことは、「平和そのもの」だと私は思います。各国がより平和な世界を享受できる、それこそが Win を広げることではないでしょうか。一步平和に近づけば、立場が違えども全ての国がより良い社会実現に踏み出せるわけで、みんなで Win を広げることができます。核で言えば、保有国も核を削減することができるし、非保有国も持たないことによるデメリットがなくなります。食糧にしてもエネルギーにしても「食料やエネルギーが原因で争いが起きない世界を作る」ということが目標であり、その意味で「安全保障」なんですよ。だから、国連会議のゴールは、平和な社会を構築するという究極ゴールに近づけるという広い意味ではあらゆる議題において「安全保障」的な意味合いがあり、それを確立することが全ての国にとっての Win になるように考えていくのです。

#### ⑤ 持つ者と持たざる者の多角的な関係性を掘り起こす

「持つ者、持たざる者」というと強者と弱者という関係性がイメージされてしまうかもしれませんが、このギャップがあるからこそ、補完も国際協力も起こるのであり、Win も生み出されるのです。

例えばエネルギー問題で見てみましょう。資源を持つ国は、持たない国にエネルギーを売しま

す。売り上げを上げているのは資源国ですが、需要と供給が一致するという意味では、両方がこの時点で Win は確保しています。でも、これでは「持つ国」「持たない国」の関係性は一方通行です。しかし日本は資源は持っていないけど、技術は持っています。その観点からすれば日本は持つ国の立場で、持たない国に対して相互補完ができます。ここまでは誰でも考えるところですよ。しかし、これをもっと多角的にしていき、相互補完、多面的補完という関係性をより多く掘り起こしていけばどんどん Win が生まれていくということです。

例えば、中東の国は砂漠も持っています。日本は太陽光の技術を持っています。この相互補完でエネルギーを石油以外の形で作りだすことができます。日本がサウジアラビアの砂漠を使って太陽光発電をすれば、日本もエネルギーを作る側に参画できるし、サウジアラビアはさらに資源を持つ国になり、それぞれの単価を下げることになっても資源量が増えた結果収益は上がるかもしれません。またそれによって石油資源自体も節約することができ、持続可能なエネルギー政策ができるかもしれません。他にも「販売ルート」や「人材」という観点から考えて言えば、まだまだ「持つ国」「持たない国」という関係が色々なところで存在しますし、もっと掘り起こせばそれだけ Win の幅が広がっていきます。当然、持つもの、持たないものの関係が増えれば權益が増えていき、産油国と石油カルテルのようなぶつかり合いも生じ、課題も増えていきます。だからこそ、国益を考慮しながらも国際協調、国際ルールというベースで話し合いをし、良い意味で「持つ」「持たない」が相乗効果で Win を広げられるようにしていく必要があるのでしょう。

## **⑥ All win は求めない。相手に Win 感を持たせながら、自国の Win を広げる**

当然自分たちの主張が全て通るわけではなく All Win は求められません。しかし、野球のゲームなら何点差で勝とうが1勝の重みは変わりませんが、国際交渉においては Win は勝ち負けという単純な2択ではなく程度の問題であり、できればより大きな Win を勝ち得たいわけですよ。また Win-Win と言っても、やはり自分たちの Win は大きいほうが良いに決まっています。

そこで重要なのが上述のトップラインとボトムラインです。それらを意識したうえで、こちらが折れたように見せて、相手に Win 感を持たせて、自分たちの Win をいかに多く確保するか、それが交渉です。「相手に Win 感を持たせる」と言うのも重要です。『ハーバード×MIT 流世界最強の交渉術』の中で「交渉相手の勝利宣言を思い描け」という原則が提示されていますが、しっかりと相手が Win をしたと宣言できるような決議のなかで、自国の Win が最大確保できているのが理想です。

そのための1つの戦術として重要になってくるのがボトムラインです。本当のボトムラインの他に第1交渉用、第2交渉用など何段階かボトムラインを設定しておくのです。最初に本当のボトムラインを見せると、足元を見られた交渉になります。最初は第1交渉用のボトムラインで「いや、これ以上は譲れない」と主張し、その土俵で話ができるべくまとまるようにします。難航した局面では、自分たちが譲歩を示す代わりにこちらの条件も確保します。ボトムラインを下げる苦渋の選択ですが、それは交渉用なので Win 次第では下げる価値があります。そのようにして自分たちの Win をより多く確保する作戦も必要です。

実生活でも、家電量販店での値段交渉など、「これ以上は無理です」と言いながら、こちらが買い渋っていたり他店での値段を出すと「今決めてくれるなら」という条件付きでさらに1段階低

い金額を出してきます。こちらはすごく得した気になりますが、売買家役が結ばれるということは相手にもちゃんと利益が出ているということですし、売りがその場で確定できるのならそこに下げる価値が出てきます。もしかしたら本当はもう1段階低い売値があったかもしれませんね。

### ⑦ Loseは抽象度を高める

Win-Win 交渉だとしても、譲歩の産物として Lose が出ることもあります。「肉を切らせて骨を断つ」というように Win のためには Lose も仕方ないのですが、その Lose の抽象度を高めて、具体的なマイナスをなくす交渉努力も大切です。うまく、焦点をぼやかしたり、文言を弱めたり、抽象度を高めることによって、具体性や実効性の乏しいものにさせていきます。

### ⑧ 立場に焦点を置かず、利害に焦点を置く

立場が異なれば考え方も異なるのですが、なかなか立場というものは変えられず、そこに焦点を置くと対立してしまいます。その場合、お互いの利害、つまり何が Win なのかということに焦点を置いて交渉をしていきます。これは課題解決で話した「課題の本質を見極める」ということとシンクロする話です。何が重要なのか、何を求めているのか、ということを考えるのです。具体的な方法としては、お互いの利害をリストアップして突き合わせてみましょう。立場で考えれば相容れないように思えたことも利害で考えれば共通する部分が見つけれられるかもしれません。この「課題の本質を見極め、お互いの利害を結合させる解決案を提案する」ということが付加価値を創造するという作業になります。

模擬国連では PP がその役割を果たしてくれます。ポジションペーパーですが、具体的にみるとトプラインを含め、相手の求めるもの、重視する論点が書かれています。そこで共通項を見つける、なければ掘り起こすということを考えていきます。

### ⑨ 客観的事実や根拠に紐づける

交渉は「お互いの納得解を探る」プロセスであるということは章の冒頭に述べましたが、主張には情熱や思いも必要ですが、最終的にはしっかりと納得度を説明できるだけの客観的データに基づいている必要があります。両者の中に「これは前提として共有しよう」というものがなければ議論がお互いの利害によってぶれてしまいます。ただし、データも数字も条約も立場が違えば見方、解釈、評価が違います。そこは仕方ないところですが、だからこそ自身はなるべく客観的に分析、判断できるスキルを持っていたいところです（次章で述べます）。

### ⑩ 意見を批判する、相手を非難しない、相手の感情に乗らない

意見や立場の合わない交渉相手というのは常にいますし、中には性格的に受け入れられないという場合もあります。しかし人と意見、もしくは人と利益は切り離して考えないと、論点がずれたり、交渉の方向性が変わってしまったりします。議論において意見の批判は認められるべきですが、それが「意見を出した本人の批判」になってしまわないようにしなくてははいけません。建設的な意見には「ここはこういう点が説得力に欠ける、論理性がない、私たちは受け入れられません」ということは良くて、「そんな意見出すなんておかしいじゃないですか」なんてことは言



っても、相手をやっつけた気分になりますが、その後の交渉に無駄な不協和音を生むだけです。

また相手が性格的に合わないということもありますし、そうすると交渉するのが嫌になるのは人間ですから仕方ありません。しかし、例えば国連大使として、その人が嫌だから交渉しないというのは自分の好き嫌いで国益を損ねる行為になります。そこは我慢ですね。相手が感情的であってもそこは交渉と切り離して、決してそのペースに自分が乗らないことです。

日本が中国との関係を「戦略的互惠関係」と表すことがありますが、たとえ自分と相手との間に諸課題があり、友好関係まではたどり着かなくても、お互いの利益を見据え、お互いを戦略的なパートナーとして見なし、利益を確保できる部分については課題を超えて協力していくということです。

## 9-8 自分に合ったスタンスとアプローチで交渉する

交渉をリードしていくには、何もグループの中心でリーダーシップを発揮するだけが方法ではありません。DR 作成をフォローする立場で抜群の存在感を出し、優秀賞を獲得したペアもいます。

これまで見た中で、印象に残ったペアをいくつか紹介します。1つは、最初は DR の中心に入らず、どちらかと言えばついていく感じで、外から見ていることの方が多かったのです。しかし、グループ内の交渉が難航しだしたとき、うまく全体の調整に入り、DR のポイントを整理していきましました。しかも、大きな声を出すわけでもなく、ごり押しをするわけでもない。他のペアには分かるように説明してあげながら、意見も聞きつつ、DR をまとめていきましました。紳士です。また、人のよさそうな顔立ちで、それも穏やかな雰囲気を作ります。ごり押しで来られたら反発してしまうけど、ああいう形で取りまとめられたら、素直に頼って、ついていくしかないわけですね。彼らは「できるペア」です。どこに行っても、どこの国を担当していても、キーとなります。そして、どんなアプローチで進めていっても、必ず最後は交渉をリードしています。ある程度、担当国によって有利不利もあるのですが、やはりできるペアはできるのです。彼らほどうまくできなくても、自分たちに合ったスタンスで交渉をし、自分たちにできることを探していく、ということが大切なんだと思います。そして、力のあるペアにうまく乗じて、自分たちの DR 交渉を有利に進めていくことも1つの戦略です。

## CHAPTER 10 リサーチと政策立案

### 10-1 リサーチするもの

模擬国連においてリサーチと言えば、主に3つのことを指します。何をどうやってリサーチするのは限りないですが、まずは以下に挙げてあることをやってみましょう。

何をリサーチするのか

- ① 議題をリサーチする
- ② 自国をリサーチする
- ③ 他国（関連国）をリサーチする



こんなことをやってみよう

- ① BG を読み込む
- ② 国連のHP を読む
- ③ ファーストハンドソースに当たる
  - ・BG に出てくる宣言や条約を調べる
- ④ 過去の国連決議を調べる
- ⑤ 過去の関連ニュースを見る
  - ・担当国のものでなくても、成功例、失敗例を調べる

まず何よりも重要なのはBG の読み込みです。ただ改訂あることを理解するだけでなく、その中にあるいろいろな論点、キーワード、ヒントを発見し、そこからリサーチを広げていきましょう。BG にはいろいろな宣言や条約なども説明されていますが、重要なものはBG に書いてあるものだけで満足せずに、ファーストハンドソース（条約そのもの）を自分の目で確かめてください。実際の文言や設立の経緯を読むと、BG では見えなかった側面も出てきます。そして、ぜひ当たってほしいのが過去の国連決議（模擬国連のものを含む）です。自国が載っているものが見つからなくても、実際の各国の主張とグループ組が分かり、これ以上に参考になるものはありません。ただし過去の決議が全てではありませんので、それらをベースに自分たちでさらにオリジナルの決議案へとつなげられるといいですよ。

## どれだけリサーチをするのか

リサーチに終わりはありません。ここまでやれば十分というものもありませんが、できるだけ多く、そしてできるだけ多角的にリサーチをしていることは必ず会議で生きていきます。中には勢いと自前のコミュニケーション能力で会議を引っ張る大使もいますが、やはりリサーチ不足はDR作成が進むにつれてボディーブローのように響いてきます。模擬国連はある意味、どんなスポーツやゲームよりもリサーチ量とスキル、経験が素直に反映され、大逆転がなかなか見られない会議です。ちなみに、前任校でNYに行ったようなペアは段ボール1箱分の資料を調べていました。PCルームにわざわざ模擬国連資料用の棚を専用に入れてあげたぐらいです。

## 英語の文献に当たる

どうしても日本語の資料に当たってしまいがちですが、英語の資料にも積極的に当たってください。確かにウェブも発達し、日本語でも消化できないほどのデータ、資料がありますので、日本語だけでも十分に賄えるといえれば賄えるのですが、やはり英語にアクセスできることのメリットは計り知れません。NY大会経験者が「英語の資料を使うと、リサーチの幅も広がり深みも出る」と言っていました。インターネット上の4分の1の情報が英語であり、アカデミックな文献や外交的資料となるとさらにもっと多くが英語で提供されています。日本語だけでリサーチするということは、それらへのアクセスを捨てるということになります。そして、何よりも国際会議に参加する以上は、過去の国連決議やその国の外務省のHP、その国の新聞などピンポイントでもいいので、英語の資料を活用してみましょう。

## 「インターネットは欲しい情報が得られる」というワナ

インターネットではありとあらゆる情報が溢れており、欲しい情報が必ず得られます。そこにワナがあることに気づいてください。例えば、「タバコが有害だと」ということの根拠を探します。「タバコ、有害」と入れると、当然大量にヒットします（50万件以上）。一方で、「タバコは実は無害かも」と思って「タバコ、無害」と入れて検索すると、多少数が減るけれどもそれでも大量のヒット（35万件）があり、タバコが無害だとするデータや主張に必ず行き着くことができます。つまり、インターネットではどの立場をとろうとも自分の欲しい情報が必ず得られるのです。ちなみに、新聞やテレビのニュースなら信頼できるかと言えば、それらも全て会社のスタンスが反映されています。朝日、毎日と読売、産経では社説で全く逆の論調で書いていることも日常茶飯事です。「NHKなら信頼できる」というのも加計学園問題で政府寄りの偏向報道をしていることが言われているように、もはや神話と言えます。だからこそ、必ず信頼できるソースを選び（最低でも無記名のブログなどは避ける）、解釈があるものは複数調べて比較し、他の情報も調べながら自分の目でしっかり精査するということです。そして事実と意見を区別して解釈することが重要になります。

**論点とポジションの整理**

政策立案するにはまず論点を明確にして、論点ごとに自分たちの立場や国益をしっかりと理解する必要があります。そして、その論点ごとに短期、中期、長期という3つの時間軸でそれぞれの求める政策を考えていきます。1つの例として以下のように論点ごとにまとめていくという方法があります。

論点の整理

論点	自国の立場	同じ立場にある主な国
1 ○○の保有量の削減	△	韓国、ドイツ
2 ○○の使用禁止	×	日本、オーストラリア
3 . . . .		



政策立案におけるポイント

- ① 自国が特に強調する論点はどれか
- ② トップラインとボトムラインはどこか  
→ ゾーンとしてとらえ、段階的な設定をする
- ③ 地理的、環境的、政策的、利害的に近い国、遠い国はどこか
- ④ どのようなDRグループの形成を目指すのか
- ⑤ 利害や政策が合わない国に対してどのように対応し、交渉するのか



時間軸を基に政策を立てる

- ① 短期的政策（即時対応）
- ② 中期的政策（社会、制度、環境の整備）
- ③ 長期（意識、マインドの変容）

**制作の整理**

各国のPPが公表される場合は、それらに目を通し、さらに政策を調整していきます。私は上記の政策立案のステップも含めて、初心者には次ページのような政策確認シートを渡し、各国の立場が自分たちの中で整理できるようにします。大使たちは結局最後までDRやスピーチの準備に忙しく、またそれぞれのやり方があるので、政策立案の基本的なアプローチを示すために、このシートはあくまでも渡しているだけです。

## 政策確認シートの例

模擬国連 政策確認シート

担当国 \_\_\_\_\_

【TASK1】 PPリストを読み、論点を分類する  
その論点について自国の立場を示す。さらにその論点を支持している主な国を書き出す

論点	自国	主な国
例) ○○の撤廃	△	ベトナム、マリ、イギリス
1		
2		
3		
4		

【Question】 自国が特に主張したい論点はどれか

【TASK2】 時間軸を基に自分たちの政策を考える

短期（即時対応）	
中期（社会、制度、環境の整備）	
長期（意識、マインドの変容）	

【TASK3】 PPを読んで、国名を以下の表に振り分ける。

例) 自国と地理、経済的には離れているが（先進国と途上国のように）、政策は近い場合は右上のボックスにその国の名目を書く

		自国と地理、環境、経済的に近い		
		近い	まあまあ	遠い
自国と政策が近い	近い			
	まあまあ			
	遠い			

【課題】 政策や地理、環境共に、どのようなDRグループ形成を目指すか

【TASK4】

① 自分たちの重視するトピックのDRを書く

② 自分たちが受け入れられない主張を書き出す

## DR作成に向けて

DRを自前で作成するかどうかは別として、やはり会議ではDRを提出したいですし、そこまで行かなくても、自分たちの主張をしっかりとDRに盛り込んでいくことが重要です。具体的には以下のような作業をしていきます。その際、実際の国連のDRや過去の模擬国連のDRも参考に作成をしていきましょう。

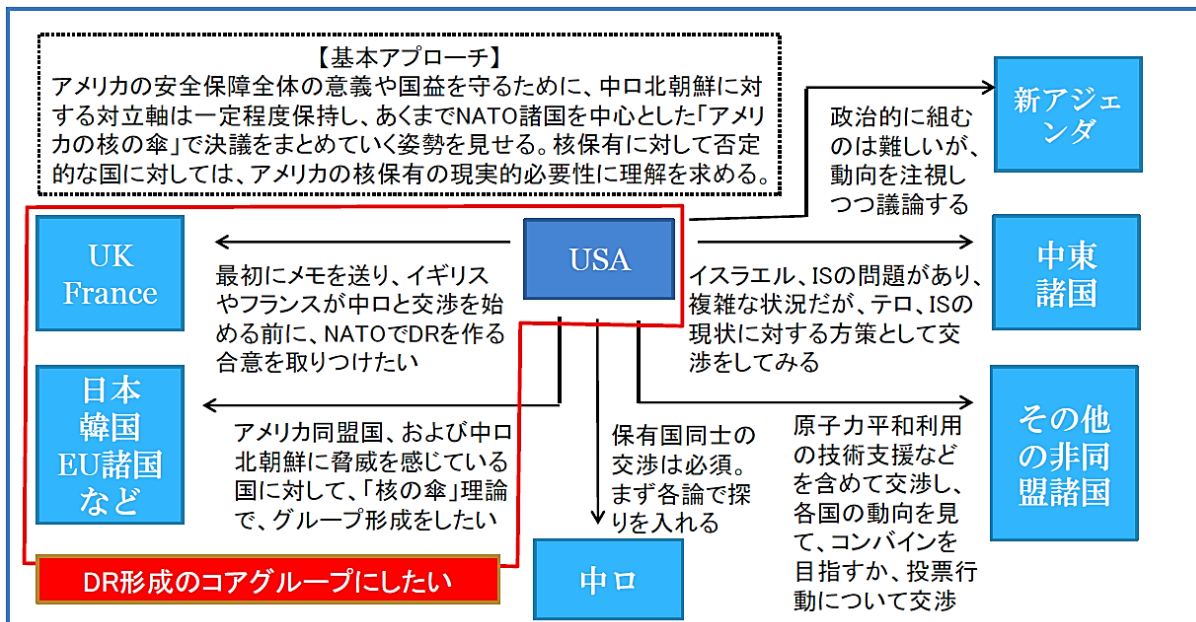
### DR作成のファーストステップ

- ① まずは自分たちのDRの主文を書き出してみる
  - ・日本語、箇条書きで良い。
  - ・主文にどの動詞を使うのかは（ ）に英語で書いておく。
  - ・まずはどんどん書いてみて、アイデアを出してみる。
  - ・自分たちのトピックをしっかりと表記する。
- ② 受け入れられない主文を書き出す
  - ・自分たちに不都合な提案を整理、意識する

経験者は、当日までに自分たちの DR 原案を英語で準備できていることがベストです。また英語でなくても、日本語で論点をまとめた DR を用意し、グループ形成をする国に配布できるようにしておくことも作業は大変ですが効果的です。初心者であっても自分たちの入れたい DR 主文を 5~10 つほど箇条書きで作って、相手国に見せられるようにしておきたいですね。

## シミュレーションをする

自分たちの政策がまとまってきたら、会議前に事前シミュレーションをしてみましょう。以下は私の「模擬国連ガイド」の中で紹介している例です。どこと組むのかだけでなく、どこと「真っ先に」組みたいのか、どことは「様子を見ながら」組みたいのか、など具体的にシミュレーションしてみましょう。もちろん会議は水ものです。自分たちの思い通りに進まないことばかりです。本番ではシミュレーションに会議の流れに合わせて柔軟かつスマートに対応しましょう。



## 10-3 クリティカルに資料を読む

リサーチに際して、いろいろな資料やデータが出てきますが、その話をただうのみにするのではなく、批判的かつ分析的に読めるようにしなくてはなりません。そこで「クリティカルに資料を読む」ということをお話いたします。少し難しい話ですが、中高生の皆さんも知っておくべきことですので、参考までに載せておきます。やる気がある人はがんばって読んでみてくださいね（笑）。大人のワークショップでも最初は皆さん大変苦労していましたが、トレーニングをすればすぐにある程度できるようになりますよ。

（以下は「Max Study Group 第5回レポート」より引用&編集）。

クリティカルシンキングの1つとして、資料を以下の5つに切り分けて読み解いていきます。定義だけ読んでも分かりづらいと思いますので、実際の議論を参考にしてください。

### ① Assumptions／前提・仮定

データはいろいろな前提・仮定に基づいています。データ自体を見極める前に、このデータが予測する未来は、そもそもどのような仮定が成立していることを前提しているのかを見極める必要があります。

例) この未来予測のデータはまず30年後の世界も～であることが前提で成り立っている。

### ② Facts／事実

このデータ、未来予測が成立した時、どのようなことを事実として言えるのか、ということです。事実じゃないことも自分の思考フィルターを通す中で、事実としてとらえてしまうこと、信じ切ってしまうことが山ほどあります。事実とは、「誰の目から見ても変わらない事象」と言えます。よりクリティカルに分析するためにも、自分の主観を入れずに、事実を抜き出していきます。

例) このデータは、～ということを示したものであり、ここから分かることは～ということである。

### ③ Opinions／意見

事実に対して、データに対して思うことを意見とします。自分の予想、理由付け、分析的意見、などがこれに分類されます。

例) この数字は、思ったより～で、～という状況を反映しているからだと言える。

#### ④ Implications/導き出される推察

このデータから推察できる未来はどのようなものか。言ってしまうと結論に近いものです。

例) これらの分析から推察される未来は、～である。

#### ⑤ Unidentified Conditions/未確定条件

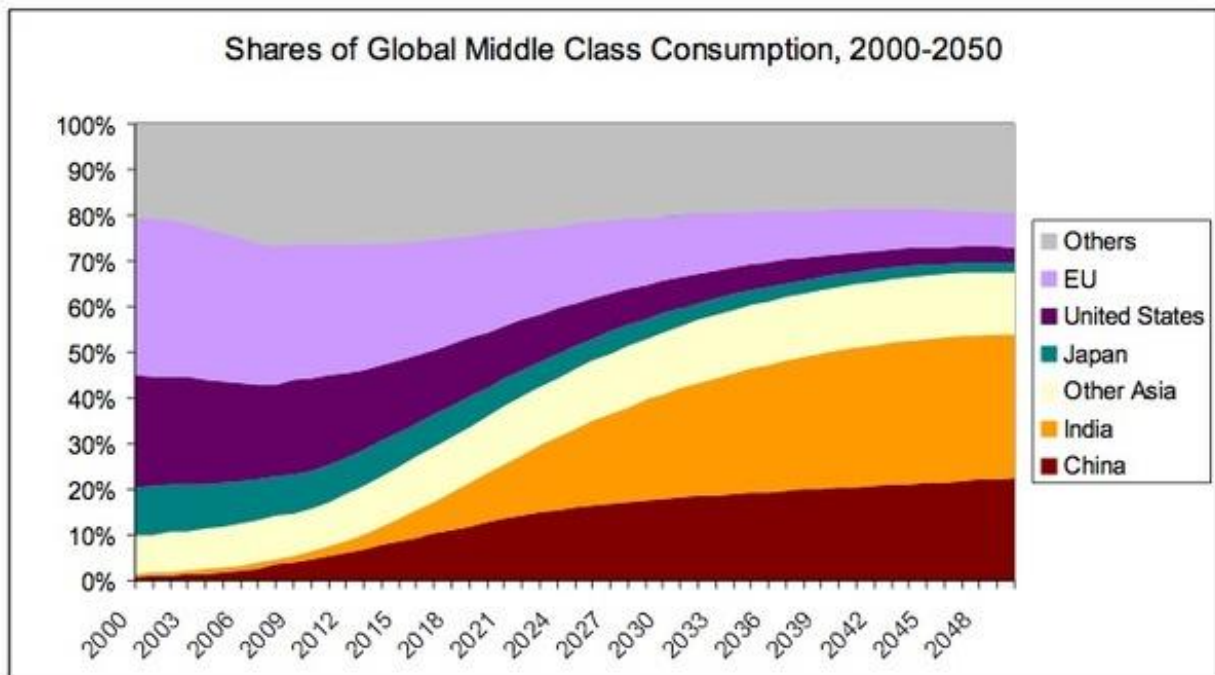
④の結論を正しいとするには、いろいろな条件や前提があります。グラフからは読み取れないものも多く、これらはとりあえず「未確定な条件」としたまま結論付け、後でリサーチをして確認する必要があります。

例) この結論を出すには、人口や経済という点で、〇〇が～となることが条件ですが、これについてはグラフからは分からない。

### 実践例

実際に3つの資料を見てみましょう。

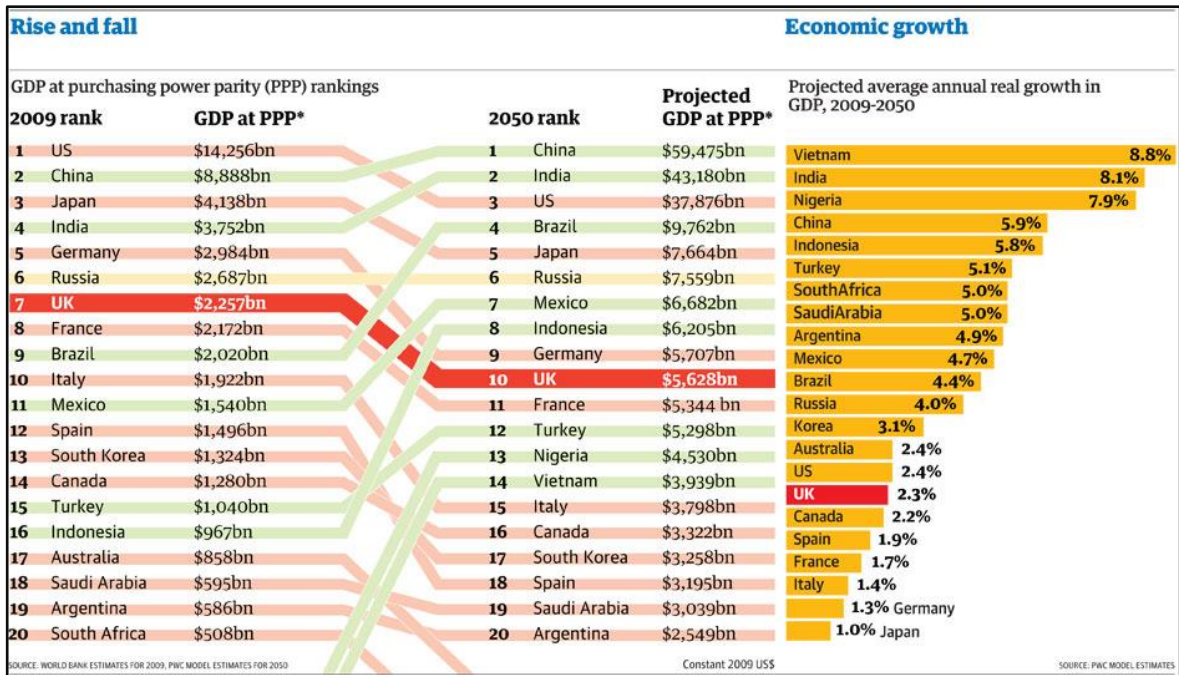
#### 資料 1



出典： Kharas, H. “The Emerging Middle Class in Development Countries.” OECD Working Paper, 2010.

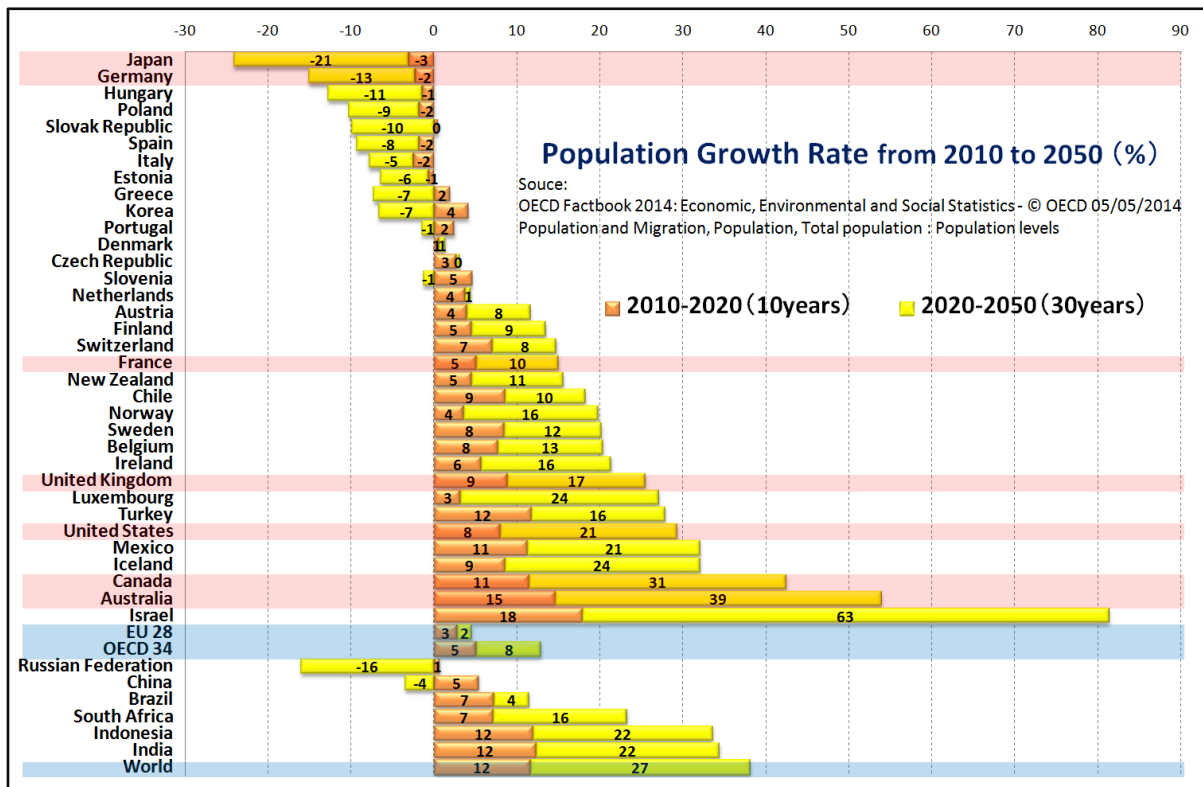


資料2



出典： Elliot, L. “GDP projections from PwC: how China, India and Brazil will overtake the West by 2050.” The Guardian. 2011.

資料3



出典： OECD Factbook 2014. 引用： 小澤徹「先進国クラブ(OECD)の中の日本(人口と移住)」BLOGOS. 2014.

## 資料の分析

### ① Assumptions

- EUといった組織、国の枠組みが今と同じ形で存在していることが前提。  
(ソ連の崩壊があったように、2050年には国の枠組みも変わっている可能性がある。複数国によるEU離脱の問題、イギリス、スコットランドの問題、スペインの南北問題、イスラム国など、状況が変われば世界情勢、経済も大きく変わる可能性がある。)
- 中間層の定義、貧困の定義ラインが今と同じであることが前提。  
(現在WHOは「極度の貧困」の定義を1日1.90ドルで生活している人、とあるが、これも2015年に改訂され、その前は1日1.25ドルだった。)
- 世界経済が米ドルを主体で動いていることが前提  
(アメリカの経済力、影響力ということに加え、仮想通貨ビットコインを含めた新しい経済価値感や経済活動モデルが出てくることも予想される。)

### ② Facts

- 中国、インドの中間層の消費シェアが増え、EU、アメリカ、日本のシェアは減少する。  
(資料1はあくまでも%なので、中間層が増えるというのはこのデータからは言えない。またEUの中間層の消費が落ち込むということも一見言えそうだが、世界の中間層全体の消費がどのくらい増えていくのかが分からないので、これも事実としては言えない。割合なのか実数なのかはしっかりと見極めなくては行けない。)
- (購買力平価をもとに見ると) イギリス経済の世界における順位が7位から10位に下がる。  
(イギリスの経済が落ち込むということは、成長率が示されているため、言えない。あくまでも他国比較の中で順位を下げるということが事実である。)

### ③ Opinions

- 中国、インドの人口増加は、単に人数が増えるだけでなく、国民の生活レベルの向上を伴うだろう。
- イスラエルの人口増加率は、現在の中東情勢の中で疑問視してしまう。

### ④ Implications

- 日本、ドイツは他の先進国と比較して、人口減少が急激に進み、経済力の維持も厳しくなる。難民政策を含めて、労働力の補充をどのようにとるのが重大な論点になるだろう。
- インド、中国が経済の中軸の1つとなることに加え、次の成長株として東アジア、中米、アフリカという国が考えられる。

### ⑤ Uncertain Conditions

- 日本、ドイツの現在の人口構成や労働人口の割合がどのように変わっていくのか。
- 次の成長株として挙げた東アジア、中米、アフリカの中間層の割合がどのように増えるのか。

## Column 5

### ～国連の存在意義～

「国連は万能じゃありません」。そう発言したのは、本冊子でも何度も引用をしている『国連を読む』の著者、元政務官の田氏です。2017年6月上智大学の国連Weeksで彼がパネリストで登壇するというので、私は『国連と多国間主義の将来』と銘を打ったシンポジウムに参加してきました。その時の質疑応答で彼が冒頭の答えを返したのです。

国連の存在意義、役割は何か。彼曰く、各国に対話の場を供給していることがその1つだということです。国連には193の国が加盟していますが、その大半は人口1000万人以下で、資金がない国が大半です。日本の首相が外遊して、いろいろな国でトップ会談をしています。ほとんどの国はそれを出来る余裕がないわけです。しかし、9月第2週、国連総会が開会される際には、ほとんどの国の首相、大統領、外相といった国を代表する要人が国連本部で一堂に会し、会談、会議、交渉が行われていくのです。田氏はその姿が国連の存在意義の1つを象徴していると言います。

確かに国連は万能ではない。大国主義的な部分が否定できないところもあるかと思えます。課題も山積していますし、悪い部分、不十分な部分もあるでしょう。しかし、上述のとおり、経済格差に関わらず各国が対話する機会と場所を提供しているということはそれまでの歴史を見ても画期的なことです。しかも国連総会では、国の大小、人口、経済規模に関わらず1か国が等しく1票を持っています。決議や対話では解決できない問題も現実には多くあり、会議では喧々諤々と意見がぶつかっていくわけですが、それでも銃口を向けあって戦うよりはよっぽどマシなのです。国連はフィクサーでもないし、プロブレムシューターでもありません。しかし、問題解決に対するミディエーター（調整役）であり、ファシリテーターであることは事実でしょうし、戦争に変わる手段として国際対話、国際協力というアプローチを創出し、普及させたことも非常に意義深いものだと思います。

しかも、国連の予算はPKOの分を計上しても年間1兆円程度です。これは世界の軍事費の0.6%の金額です。東京オリンピックの実予算が3兆円とも言われているので、実にその3分の1にしか満たないのです。国際平和を担う世界的組織の予算がこれだけというのは、軍事費とのバランスを見ても、多くの人が驚くのではないのでしょうか。その点について、田氏は著書の中で「確かに国連は万能ではないし、改革が必要な分野も多々ある。しかし、国連が国際社会の平和と安全の維持、あるいは人権、人道、開発などの分野で果たしている役割を考えると、国連は国際社会にとってまだまだ有益な投資なのではないだろうか」（P71）と述べています。

## CHAPTER 11 会議シミュレーション

ここでは、プロシージャーに沿って、実際の2日間の会議の動きを示していきます。会議の前や最中に簡易的に確認したいというときに役立てていただければと思います。

なお、議長の英語のセリフに際しては、必要に応じて以下の資料から全て引用をしています。ここでは、基本的な流れだけを示しますので、詳細はそちらをぜひ参照してください。

### 参考資料

今井拓也（日本模擬国連） Japan Model United Nations Chairperson Handbook. 2010年

### Phase 1 開会からの流れ

開会 議長が木槌を2回鳴らして開会を宣言します。



Honourable Delegates, please come to order!!  
Now, I would like to declare the opening of the 71st session of the General Assembly, the 2nd Committee.



大使の皆さん、静粛にしてください。これより国連総会、第2委員会、71会期の開始を宣言いたします。

出席確認 議長がアルファベット順に国名を呼び上げます。大使は、国名が呼ばれたらプラカードを挙げながら「Yes」「Yes Present」と答えます。



Firstly, I would like to confirm the presence of each delegate with roll call. When the name of your country is called, please answer, "yes" or "yes, present".

まずは、呼名にて各大使の出席を確認いたします。国名が呼ばれましたら、「Yes」「Yes, Present」と教えてください。

出席している総数をもとに、過半数、3分の2の数を確認します（投票で関係があるため）。



Now I have recognized X delegates present. Therefore, the single majority is more than Y, and the two thirds majority is more than Z.

Xか国の出席が確認されました。したがって、過半数はY以上、3分の2はZ以上となります。

もしここで呼ばれていなかったら、フロントに申し立て、もし遅刻していたら、来た時点でフロントにメモを渡すこととなります。そうでなければ会議参加国として認識されないことになってしまいます。

議題採択

議長が議題を採択します。模擬国連の場合は、議題が決定しているのであくまでも形式的に手続きを進めていきます。



Next, I would like to proceed with the adoption of the agenda item. The agenda item submitted to us is \_\_\_\_\_. Is there any objection to the adoption of this agenda item? ... I see no objection. Therefore, this agenda item has been adopted.

次に議題の採択を行います。本会に提出されている議題は〇〇です。この議題の採択に反対はありますか。ないようですね。したがって、この議題が採択されました。以上となります。

## Phase 2 スピーカーズリストの開放と発言国の登録

発言国募集

議長がスピーカーズリストを開放し、公式発言の希望国を募ります。



Now, I would like to open the speaker's list. Those who wish to make a formal speech, please raise your placard.

では、スピーカーズリストを開放します。公式発言を希望する大使は、プラカードを上げてください。

希望する国が一斉にプラカードを上げる。議長はそれらの国名をランダムに読み上げ、秘書官がスピーカーズリストに書き込んでいく。これ以降にスピーチを希望する場合は、メモでフロントに知らせるか、発言国が少なくなり議長が再度希望国を募った際に同じようにプラカードを上げます。

## Phase 3 公式発言

公式発言

会議の表舞台、スピーチが始まります。ここからメモ回しが解禁になるのが通常です。



I would like to proceed with the formal speech. The first speaker is A, followed by B. A, you have the floor for X minutes.

公式発言に入ります。最初のスピーカーはAで、その後Bが続きます。A、X分間です、どうぞ。



Thank you, honorable chairperson and hello, fellow delegates....

議長、ありがとうございます。こんにちは、大使の皆さん。・・・



残り30秒で木槌が1回なり、制限時間になったら2回なります。数か国が終わった時点でモーシヨンの募集に入ります(何か国ずつスピーチするかは会議細則で決められています)。

## Phase 4 モーション

動議の 議長がモーシオンを募集します。提案をしたい大使はプラカードを上げて「Motion」  
募集 と言います。



At this point, are there any points or motions?

ここで、何かポイント、モーシオンがありますか。



Motion!



Motion!



Motion!

### Point が出された場合

もし、Point が出された場合は、この時点で Motion よりも先に Point を優先順位に沿って処理します。

#### Point の優先順位

- ① Point of Personal Privilege
- ② Point of Order
- ③ Point of Inquiry
- ④ Point of Information

(この時点では④が出ることはありません)

### Motion が出された場合、Point の処理が終わった場合

議長はプラカードが目についたところから全ての国名を読み上げます(まずは国名だけ記録します)。その後、その順番に従って、大使に Motion の内容を聞いていきます。秘書官は Motion の内容を記録していきます。



Indonesia, what is your motion?



We would like to move for a moderated caucus for 20 minutes for the purpose of ...

・・・という目的で20分のモデレートコーカスに移る提案をいたします。



Ukraine, what is your motion?



We would like to move for a 40-minute unmoderated caucus.

40分のアンモデレートコーカスに移る提案をいたします。



France, what is your motion?

重複したモーションが既に他国によって出されている場合は、自分たちのモーションを取り下げて、会議運営に協力します。



We would like to withdraw our motion.

自国のモーションを撤回いたします。

モーションが出そろったところで、議長は優先順位に従ってモーションの処理をします。①以外は投票が必要になります。最初の段階では②、③がほとんどですが、仮にWPなどの提出を認めていて、この時点でそれを出したいという国があれば、①のモーションを最初に受け付けます。

#### モーションの優先順位

- ① 公式文書の提出、撤回 自動受理
- ② アンモデレートコーカス（時間が長いほうがより優先） 過半数
- ③ モデレートコーカス（時間が長いほうがより優先） 過半数
- ④ 討議の終了 3分の2
- ⑤ 会議の停止、会合の終了 過半数
- ⑥ 発言時間の制限、スピーカーズリストの閉鎖、開放 過半数



There have been motions to move for X, Y, and to move for Z. According to the rule of the procedures, I'd like to move for the vote on X, and then Y and lastly Z.

X、Y、Zのモーションが提出されました。プロシーチャーの規則に従い、まずはX、次にY、最後にZの投票を行います。

なお、議長が必要と認めた場合、議長裁量で処理の優先順位を変えたり、モーションを却下することができます。

#### 議長裁量を行使する場合



As the discretion of the chairperson, I'd like to ...

議長裁量により・・・

投票 議長はモデ、アンモデのモーシヨンの投票を行います。

**注意** この投票は棄権、無投票はできません。全ての大使が賛成もしくは反対の表明をしなくてははいけません。

### 明らかな賛成多数、反対多数ではない場合

議長は賛成の数と反対の数を数えます。合計数が参加国数にならない場合は、投票をしていない大使がいるということなので、注意を促し、再度投票を行います。



There has been a motion to move for .... We would like to go into an immediate vote. Those who are in favor of this motion, please raise your placard. (票数確認) Those against? (票数確認)

…というモーシヨンが提出されました。すぐに投票に付します。このモーシヨンに賛成の大使はプラカードを上げてください。反対の大使はいかがですか。

カウントが終わったら、その数を伝えて、可否を伝えます。



This motion carries/fails with X in favor and Y against.

Xの賛成とYの反対により、このモーシヨンは可決／否決されました。

### 明らかな賛成多数、反対多数とわかる場合

賛成もしくは反対のプラカードが圧倒的多数を占める場合は、カウントせずに可決、否決に至ります。その後、議長は、投票の結果に従って次の動きを宣言します。



It seems clearly majority. Therefore, this motion carries/fails.

明らかに多数ですね。したがって、このモーシヨンは可決／否決されました。

#### • モデレートコーカスに入る場合



As a result of voting, let us move for a 20 minute moderate caucus.

では、投票の結果により、20分のモデレートコーカスに入ります。

#### • アンモデレートコーカスに入る場合



We will suspend the meeting for 40 minutes. (We will move for a 40 minutes unmoderated caucus). Delegates, please come to order at 11:30.

会議を40分間停止いたします。(40分間のアンモデに入ります。)大使の皆さんは11時半に席にお戻りください。



\* 次の公式討議の時間を宣言したのち、木槌を2回鳴らします。



- ・ モーションが全て否決された場合、モーションが出ずに処理するものがない場合  
→ 公式討議が続きます。



Then we would like to proceed with the formal debate.

では、公式討議を進めます。

## Phase 5 モデ、アンモデ

### モデ1 ① モデに入る場合（30秒ずつマイクを回す形式）

会議冒頭のモデで多いのは、アルファベット順に1か国30秒ずつマイクを回していき、論点や会議行動を共有するというものです。30秒が来たら木槌がなります。

### モデ2 ② モデに入る場合（議場整理を行う形式）

議長もしくはモーション提出国が司会をしながら、全体で非公式討議を行う形式です。このモデが会議の冒頭で行われる場合は、「論点や定義が不明確であり、アンモデに入る前に全体で議論を共有したい」という目的で行われます。すでにアンモデが行われた後に行われる場合は、「アンモデで話された各グループの議論やDRの方向性を全体で共有し、質疑応答も含めながら、次の交渉に活かしていく」という目的です。

### アン モデ ③ アンモデに入る場合

最初のアンモデではグループ形成を行い、DRの作成に向けて交渉を始めます。アンモデは延長を認めている場合は、終了5分前もしくは10分前を目安に延長の希望を大使に聞きます。延長は原則1か国でも反対したら認められませんので、延長を反対する大使がないか確認します。延長が認められたらその時間を伝える。

終了 終了時間が来たら、スピーチに戻ります。モデにしるアンモデにしる、1つの会議形態が終わると必ず公式討議（つまりスピーチ）に戻り、会議が進行されていきます。



Honourable delegates, we would like to proceed with the formal debate.  
The first speaker is A, followed by B. A, you have the floor for 2 minutes.

公式発言を進めます。最初のスピーカーはAで、その後Bが続きます。A、2分間です、どうぞ。

スピーチが数か国終わったら、再度モーションの募集を行うということが続いて行きます。

## Phase 6 DRの提出とディレクチェック

DR  
提出

DR締め切りの時間になると、各グループからDRが提出されます。会議監督はそれを受け取り、以下の点についてDRチェックを行います（ディレクチェック）。どこまで深くチェックするかは会議監督の判断により、特に会議監督の経験が浅い場合には、質疑応答のモデによって大使同士で議論させることも可能です。

### ディレクチェックのポイント

- ① DRの書式、体裁が正しいか。
- ② 提出条件のスポンサー国数が集まっているか。
- ③ スポンサー国が漏れずに載っているか、全ての国の賛同がしっかりとれているのか（提出国と確認をします）。
- ④ アウトオブアジェンダやDRとしてふさわしくない内容（他国を攻撃するだけの内容）が含まれていないか。
- ⑤ 前文、主文の中に内容的な矛盾が含まれていないか。

ディレクチェック、印刷が終わり、DRを議場に配布する準備が整ったら、議長がモーションを募集します（スクリーンに「DR1 Ready」といったように表示され、モーションを促します）。文書番号は出された順にDR1、DR2、DR3と付いていきますが、模擬国連では印刷の段階ですでに番号が付いているので、事前（ディレクチェック）の提出順にモーションが出されるように、議長が提出国をピックアップしていきます。提出国がDR提出のモーションを出します。その順に従い、提出国がDR提出のモーションを出していきます。



We'd like to submit our draft resolution officially to the floor.

私たちの決議案を正式に議場に提出いたします。

文書提出のモーションは自動受理です。議長は文種緒番号を付け、議場に配布することを宣言します。提出国は2分間の説明時間をもらうことができます。議長は提出国にその意思を確認します。



A draft resolution sponsored by Poland has been officially introduced to the floor. The document of this draft resolution is A/C2./71/DR.1. Poland, would you like to explain your draft resolution?

ポーランドがスポンサーを務める決議案が正式に議場に配布されます。このDRの文書番号はA/C2./71/DR.2です。ポーランド大使、このDRの説明を希望しますか。

説明を希望する場合は2分の説明時間が与えられます。その中で、提出国（上記ポーランド）だけでなく、中心となった他の共同提出国も登壇し、スピーチ時間の委譲によって説明に加わることができます。



Thank you, honorable chair. ... We'd like to yield the rest of our time to Russia.

議長、ありがとうございます。…（説明）… 残り時間をロシア大使に委譲します。

複数のDR提出のモーションが出されている場合は、同じことを他のDRにも繰り返します。全てのDRが提出されたら、DRを読む時間を取り、その後、モデの中でそれぞれのDRについての質疑応答を行います。

## Phase 7 会合の停止

2日間会議の場合、このタイミングで初日を終了します。

ただし、会議の流れや設定によっては、前後することがあります。例えば、DR提出と説明をした段階で初日を終え、その夜に各大使がDRをしっかりと読んだ上で、質疑応答のモデから2日目の会議が始まることもあります。また、1日会議の場合は、会合を停止しませんのでこの手続きはなくなります。

初日を終わるには会合を停止しなくてははいけません。議長はモーションを募集し、どこかの大使に会合停止（the suspension of the meeting）のモーションを出してもらいます。



Motion! We'd like to suspend the meeting.

モーション！ 会合の停止を提案します。

会合の停止は過半数で可決されます。モーションが投票に付され、可決されたら初日が終了します。

## Phase 8 会合の再開 ～ 2日目の討議、交渉

**再開** 初日同様に、議長は再開を宣言した後、参加国の出席を取り、過半数と3分の2の数を確認します。

その後、スピーカーズリストにしたがってスピーチを進めます。数か国が終わった段階で、モーションの募集をします。前日のDRの質疑応答がまだの場合は、モーションもしくは議長裁量によりモデに入ります。

モデ終了後、さらにスピーチに戻り、次のモーション募集で、アンモデが提案、可決されます。後半戦は、修正案（アmend）の提出に向けて討議、コンバイン交渉が行われていきます。

### スピーチの奨励と募集

2日目になるとスピーカーズリストから国がどんどん減っていき、十分な議論がなされる前に発言国がなくなるケースが出てきます。発言国がなくなると公式討議が継続できず、投票に移ってしまいますので、その場合は、議長が全体にスピーチを奨励、募集します。



Right now, there are few speakers on the speaker's list. As the discretion of the chairperson, I would like to invite distinguished delegates to the speaker's list. Are there any delegates who wish to make a formal speech?

現在、スピーカーズリストにはわずかな発言国しか残っていません。議長裁量として、スピーカーズリストに載る大使を募集いたします。公式発言を希望される大使はいらっしゃいますか。

## Phase 9 アmendの提出

Amend提出の時間に合わせて、各グループから事前にAmendがフロントに提出されます。

DR提出の際と同様に、会議監督はDRチェックを行います。アンフレンドリーアmendメントを認めていないので、全スポンサーがDRの取り下げおよびAmendの提出に賛同しているのか提出国と確認をする必要があります。

印刷、配布の準備ができれば「Amend 1 Ready」と表示し、提出国はモーションを出します。



We'd like to withdraw DR1 and submit our amendment officially to the floor.

DR1を撤回し、私たちの修正案を正式に議場に提出いたします。

文書の撤回、提出は投票に付されることなく自動的に受理されます。

全スポンサーが古いDRの撤回とAmendの提出に賛同していません。議長はスポンサーを1つずつ呼び上げ、意思を確認します。大使は「YES（賛同）／NO（反対）」のいずれかで答えます。



There has been a motion to introduce a friendly amendment sponsored by Indonesia officially to the floor. According to the rule of the procedure, I would like to ask all sponsors of the draft resolution A/C.2/71/DR1 whether they agree to accept the amendment. (スポンサーリスト順に国を呼び上げて聞いていきます)。Argentina...Brazil...Canada...

インドネシアがスポンサーを務める修正案が正式に議場に配布されます。プロシージャーの規則に従い、このA/C2./71/DR.1の全スポンサー国にこの修正案を受け入れるかを確認していきます。アルゼンチン…ブラジル…カナダ…

**注意** アンフレンドリーアmendメントを認めていないので、Amendの提出に賛同するならDRの撤回にも賛同してはいけませんし、逆に言えば、DRの撤回に賛同するのであれば必ずAmendの提出にも賛同してはいけません。この前提条件をしっかりと理解して、安易に修正案に合意するのではなく、しっかりと交渉し、自分たちが合意できる内容のAmendを作っていくてはいけません。

複数のDRがコンバインされている修正案の場合は、他のDRについても同様にAmendメントを承諾しているのか全スポンサーに確認していきます。

### 全スポンサー国がAmendに賛同した場合

DR提出時と同様に文章名の変更を伝え、提出国が希望する場合、説明の時間を2分間与えます。文章番号は改訂(revision)ということで「rev.1」が付け加えられます。その後の質疑応答などの流れはDR提出時と同様です。



The draft resolution A/C.2/71/DR.1 has been amended by this friendly amendment, and changed to A/C.2/71/DR.1/rev.1. Indonesia, would you like to explain your amendment?

A/C.2/71/DR.1 は友好的修正案により修正され、A/C.2/71/DR.1/rev.1 となります。インドネシア大使、この DR の説明を希望しますか。

### 1 か国でもアmendに反対した国があった場合

アmendの提出、DR の撤回は認められず、モーションは無効となります。



According to the rule of procedures, the motion to introduce this amendment cannot be accepted.

プロシーチャーの規則に従って、この修正案を提出するモーションは承認されませんでした。

## Phase 10 最後の交渉

投票に至るまでの時間、自分たちの DR に 1 か国でも多く賛同してもらえるように他国に説明に行き、賛成票を訴えます。また、敵対する DR がある場合は、そちらへの不支持を訴え、自国が優勢な形で決議が行われるように交渉をしていきます。モデが行われる場合は、他の DR に関する質疑応答で不明な点をクリアにし、投票判断ができるようにします。あわせて、他のアmendもしっかりと読み込み、自国がどのような投票行動をとるべきかを考えていきます。

## Phase 11 投票に至るまで

いずれかの状況、手順によって投票に移ります。

### スピーカーズリストから発言国が全てなくなり、議長が投票に移れると判断した場合



Now, we have no speaker on the speaker's list. Therefore, we would like to proceed with the voting action.

現在、スピーカーズリストに発言国がありません。したがって、投票に移ります。

### 討議終了 (Closure of the debate) のモーションが出て、可決された場合



Motion! We'd like to move for the closure of the debate.

モーション！ 討議の終了を提案します。

このモーションについては、反対意見が 2 か国以上ある場合は、それに対する説明時間を与える場合もありますが、中高校生の場合はこのプロセスは原則省略し、即時投票に付します。討議終了のモーションは 3 分の 2 の賛成で可決されます。



There has been a motion to close the debate. I'd like go into an immediate vote on this motion. We need a two-thirds majority. Those who are in favor of this motion, please raise your placard. (票数確認) Those against? (票数確認)

討議終了のモーションが出されました。すぐに投票に付します。3分の2の賛成が必要になります。このモーションに賛成の大使はプラカードを上げてください。反対の大使はいかがですか。

可決された場合は投票に移ります。否決された場合は公式討議に戻ります(モーションが出されて討議終了の投票を行うということは、まだスピーカーズリストに発言国が残っているということ)。

#### 投票 説明

投票に先立って、投票前後の理由説明を行う国を募集します。投票前に2か国、投票後に2か国を募集し、それぞれ1分間説明する時間が与えられます。ただし、中高生の大会では、この投票説明は省略されることが多くあります。

**注意** この投票説明では自国のDRに触れることは認められていません。



Before proceeding, I would like to call on those delegates who wish to explain their voting before or after the voting. I would like to remind you that you could not refer to the draft resolution for which you are a sponsor. Are there any delegates wishing to explain their voting before the voting? ... And after the voting?

投票に入る前に、投票前、投票後に自身の投票を説明する大使を募集します。自国がスポンサーを務めるDRについて言及することはできませんのでご注意ください。投票前の説明を希望される大使はいらっしゃいますか。投票後はいかがでしょうか。

## Phase 12 投票

投票が開始されると途中入場、途中退室が禁じられます。万が一、体質を希望する大使はここで出ていかななくてははいけません。メモ回しもこれ以降は禁止されます。



We will proceed with the voting of (the amendments and) the draft resolutions submitted to the floor. From now on, no one can enter this room. And you can leave this room if you would not like to participate in the voting action. But once you leave this room, you cannot re-enter this room. I see none. In addition, you cannot be permitted to use memos.

議場に提出されたDR(アmend)の投票に進みます。これより、部屋の途中入場ができません。投票に参加しない場合は部屋の退室をしてください。ただし、一度退室したら途中入場ができません。いませんね。また、ここではメモ回しも認められません。

## DR 確認

議長は議場に残っている投票対象のDRを再度確認します。会議によってはコンバインによりアmendの文書番号が最初のDR時から変わっていることもあるので、間違いないようにしましょう。(例：DR1、DR2がコンバインした修正案がアmend1と呼ばれ、DR3、DR4がコンバインした修正案がアmend2と呼ばれているケースなどは要注意)



There have been two amendments officially submitted to the floor. Please make sure that the amendment sponsored by Indonesia is ... and the one submitted by Russia is ....

2つのアmendが正式に議場に提出されています。インドネシアによって提出されたアmendの文書番号は…で、ロシアによって提出されたものは…であることを確認をしてください。

## 投票 方法

まず、議長は、DRごとに以下の3つの投票方法のうちどれを採用するのか、モーションを募集して決めていきます。手続きはDR1の投票方法の決定→DR1の投票、DR2の投票方法の決定→DR2の投票というように進み、1つのDRの投票が完結してから次のDRの投票に関して議論をします。

### 投票の優先順位

- ① ロールコール投票 (Roll-Call Voting)
- ② コンセンサス投票 (Consensus Voting)
- ③ 無記録投票 (Unrecorded Voting)

### 優先順位について

- ・1 1 国でも希望があった場合は優先順位がより高い投票方法が採用されます。
- ・モーションが出されない場合は、③の無記録投票が採用されます。

なお、改めて以下の注意事項を確認しましょう。

### 注意事項

- ・自国がスポンサーになっているDRには賛成票を投じる義務がある。

まずは、DR1について投票方法に関するモーションを募集します。



Before proceeding with the vote of the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1 submitted by Indonesia, are there any points or motions?

インドネシアによって提出された決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 の投票に入る前に、ポイントもしくはモーションがありますか。

## ロールコール投票のモーションが出された場合



Motion! We'd like to request a roll call vote (on this draft resolution).

モーション！ 私たちは（この決議案に関して）ロールコール投票を希望します。

ロールコールは一番優先順位が高い投票方法ですので、1 か国でも希望すれば自動的に可決されます。



There has been a motion to request a roll-call vote on the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1. Are there any other points or motion? ... I see none. According to the rules of procedure, this motion automatically carries. Then we will vote on this draft resolution by roll call.

決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 についてロールコールの希望が出されました。他にポイントもしくはモーションはありますか。プロシーチャーの規則に従い、この DR についてはロールコールによって投票とします。

議長がアルファベット順に国名を呼び上げます。それに対して「Yes」「No」「Abstention」のいずれかで答えます。周りの投票の様子を見るために、パスも 1 回までは可能ですが、その場合、2 週目は「Yes」「No」のいずれかしか許されません（Abstention は不可）。



When the name of your country is called, please answer "yes", "no" or "abstention". You can pass only once.

国名が呼ばれたら、「Yes」「No」「Abstention」のいずれかで答えて下さい。パスは 1 度のみ許可されます。

投票後、議長から賛成票と反対票の数が発表されます。カウントは「Abstention」を除いた有効票を母数として行います。



The result of voting is X in favor, Y in against, and Z abstentions.

投票結果は賛成 X 票、反対 Y 票、棄権 Z 票となりました。

賛成が過半数に達した場合は決議の採択がなされ、文書名が DR (決議案) から RES (決議) へと変わります。可決・否決の際には木槌が 2 回鳴らされます。



Therefore, this draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1 has been adopted. Now it is the resolution A/C.2/71/RES.1

したがって、この決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 は採択され、正式に決議 A/C.2/71/RES.1 となります。



否決された場合



Therefore, this draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1 has been rejected.

したがって、この決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 は否決されました。





## コンセンサス投票のモーションが出された場合



Motion! We'd like to request a consensus vote (on this draft resolution).

モーション！ 私たちは（この決議案に関して）コンセンサス投票を希望します。

コンセンサス投票は 1 か国でも反対する国がいれば成立しないので、議長はその確認を取ります。



There has been a motion to request the consensus vote on the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1. Are there any other points or motion? ... I see none.

決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 についてコンセンサス投票の希望が出されました。他にポイントもしくはモーションはありますか。

ここで、他国からロールコール投票のモーションが出された場合は、自動的にロールコール投票となり、コンセンサス投票のモーションは破棄されます。

ほかにポイントもしくはモーションがなければ、投票に入ります。

コンセンサス投票では反対する国がないかを確認をし、決議案の採択となります。コンセンサス投票を採択するということはその時点で「決議案に反対しない」ということになり、「モーションの可決＝決議案の採択」になります。決議案に賛成できない国はコンセンサス投票を認めずにロールコール投票のモーションを出すか、コンセンサス投票のモーションに反対をしましょう（コンセンサス投票の際に反対が出れば、結局ロールコール投票に戻るようになります）。



Therefore, we would like to proceed with the voting of this motion. Unless I see any objection, this motion will carry. Is there any objection to the adoption of this draft resolution A/C.2/DR.1/rev.1 without a vote?

では、このモーションの投票に進みます。反対がなければ、このモーションは可決されます。決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 の投票なしの採択に反対の大使はいますか。

反対がない場合は、このモーションが可決され、その時点で決議案も可決されたこととなります。決議の成立が言い渡され、木槌となります。



I see no objection to the consensus adoption of this draft resolution. Then this motion carries. According to the rule of procedure, this draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1 has been adopted by consensus. Now it is the resolution A/C.2/71/RES.1

この決議案のコンセンサス採択に反対が見られませんでした。よってこのモーションは可決されました。プロシーチャーの規則に従って、この決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 はコンセンサスにより採択され、正式に決議 A/C.2/71/RES.1 となります。

仮にコンセンサス採択に反対する国があれば、その時点でコンセンサスによる採択は破棄され、ロールコール投票に移ります。



There is an objection to the consensus adoption of this draft resolution. Then this motion fails. According to the rules of procedure, we will vote on this draft resolution by roll call.

この決議案のコンセンサス採択に反対が見られました。よってこのモーションは否決されました。プロシーチャーの規則に従って、この決議案のロールコールによる投票に入ります。

#### 無記録投票のモーションが出された場合



Motion! We'd like to request a non-recorded vote (on this draft resolution).

モーション！ 私たちは（この決議案に関して）無記録投票を希望します。



There has been a motion to request the non-recorded vote on the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1. Are there any other points or motion? ... I see none. According to the rules of procedure, we will vote on this draft resolution by non-recorded vote.

決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 について無記録投票の希望が出されました。他にポイントもしくはモーションはありますか。ありませんね。プロシーチャーの規則に従って、この決議案は無記録投票に付します。

ここで、他国からロールコール投票、コンセンサス投票のモーションが出された場合は、自動的に優先順位の高い方式が採用され、無記録投票のモーションは破棄されます。

ほかにポイントもしくはモーションがなければ、投票に入ります。

議長は「賛成」「反対」「棄権」を聞き、大使はプラカードを上げて答えます。無記録投票なので、国名は記録されず、票数のカウントのみが行われます。可決後の宣言と文書名の変更、否決の宣言はロールコール投票の際と同じです。



Those who are in favor of the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1, please raise your placard. (票数確認) Those against? (票数確認) Those abstain? (票数確認) The result of voting is X in favor, Y against, and Z abstentions.

決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 に賛成する大使はプラカードを上げてください。反対の大使はいかがですか。棄権する大使はいかがですか。投票結果は賛成 X 票、反対 Y 票、棄権 Z 票となりました。

### 投票について何もモーションが出なかった場合 無記録投票に進みます。



I see no motion. According to the rules of procedure, we will vote on the draft resolution A/C.2/71/DR.1/rev.1 by a non-recorded vote.

モーションが何も出されませんので、プロシーチャーの規則に従って、決議案 A/C.2/71/DR.1/rev.1 について無記録投票に付されます。

投票  
説明

投票が終わった後、投票後説明を設定している場合は 2 か国に 1 分間ずつ説明する時間が与えられます。

**注意** この投票説明では自国の DR に触れることは認められていません。

## Phase 13 閉会

投票が終わり、決議が出たら、会期を終了します。議長はモーションを募集し、大使は会期の延期 (Adjournment of the session) のモーションを出します。それが可決されたところで、晴れて会議終了となります。



Motion! We'd like to adjourn the session.

モーション！ 会期の延長をお願いいたします。



There has been a motion to adjourn the session. Is there any objection to the motion? I see no objection. Therefore, this motion carries.

会期延長のモーションが出されました。このモーションに反対はありますか。内容です。したがって、このモーションは可決されました。

最後に議長が大使をねぎらい、閉会を宣言します。



Before we adjourn this session, I would like to pay a warm tribute to all who have assisted us and thank all delegates for their efforts and cooperation during the session. The General Assembly, the 2nd Committee has thus concluded with the present stage of its consideration of this agenda item. Now I would like to declare the adjournment of the 71st session of the General Assembly, the 2nd committee. Thank you very much, indeed. !!

会期を終了する前に、私たちを支援してくれたすべての皆さんに謝意を表し、また前大使のみなさんに努力とご協力感谢您いたします。これにて総会第2委員会は、議題のここまでの議論を持って締めくくります。ここに、総会第2委員会第71会期を延期することを宣言いたします。本当にありがとうございました。

## Reference

### 書籍、文章資料

- 今井拓也（日本模擬国連関東事務局） 『Japan Model United Nations Chairperson Handbook（日本模擬国連議長マニュアル）』 2010年
- グローバルクラスルーム日本委員会 『How To Start the Model UN Conference ～ 模擬国連会議入門』
- グローバルクラスルーム日本委員会 『模擬国連マニュアル 2015年度版』 2015年
- 国際連合広報局 『国際連合の基礎知識（2014）』（訳：八森充、発行：関西学院大学総合政策学部） 関西学院大学出版会、2014年
- 鈴木洋一（日本模擬国連） 『模擬国連会議シュミレーションハンドブック』 2007年
- 田 仁揆 『国連を読む 私の政務官ノートから』 The Japan Times、2015年
- 日本模擬国連 『模擬国連ガイドブック 第3版』 2015年
- 日本模擬国連 『模擬国連会議の進め方講座』
- 御手洗昭次 『ハーバード流交渉術』 2017年、綜合法令出版
- ローレンス・サスキンド 『ハーバード×MIT 流 世界最強の交渉術』（訳：有賀裕子） ダイヤモンド社、2015年

### ホームページ

- グローバルクラスルーム日本委員会 ([jcgcc.accu.or.jp](http://jcgcc.accu.or.jp))
- 国際連合広報センター ([unic.or.jp](http://unic.or.jp))
- 関 孝平 Max Classroom.net ([maxclassroom.net](http://maxclassroom.net))
- 日本模擬国連 ([jmun.org/index](http://jmun.org/index))

### ホームページ記事

- アメリカンセンターJAPAN 「4つの自由」  
([americancenterjapan.com/wp/wp-content/uploads/2015/10/wwwf-major-docs-freedoms.pdf](http://americancenterjapan.com/wp/wp-content/uploads/2015/10/wwwf-major-docs-freedoms.pdf))
- 家弓正彦 「4つの交渉スタイルとは」『ロジックとパッションの狭間から』2009年9月28日  
([kayumi.jp/archives/863830.html](http://kayumi.jp/archives/863830.html))
- ジョシュア・キーティング 「国連総会の仰天スピーチトップ10(The Top 10 Craziest Things Ever Said During a U.N. Speech)」 Newsweek、2009年9月25日  
([www.newsweekjapan.jp/stories/world/2009/09/10-2.php](http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2009/09/10-2.php))
- 佐藤真海 「弱さと向き合ってきた人間として」 Number Web、「東京五輪・名プレゼンの背景」、2013年9月26日  
([number.bunshun.jp/articles/-/689305](http://number.bunshun.jp/articles/-/689305))

バリューイノベーション 「コミュニケーションスタイル診断(SCAT)」

([www.value-i.jp/way/diagnose/108.html](http://www.value-i.jp/way/diagnose/108.html))

- パンネーションズ・コンサルティング・グループ 「日本人は交渉が極めて下手！」  
([www.pan-nations.co.jp/column\\_004\\_002.html](http://www.pan-nations.co.jp/column_004_002.html))
- 毎日新聞 「核兵器禁止交渉決議を採択 日本は反対」 2016年10月28日  
([mainichi.jp/articles/20161028/k00/00e/030/166000c](http://mainichi.jp/articles/20161028/k00/00e/030/166000c))

#### シンポジウム、講演

- 上智大学国連 Weeks シンポジウム「国連と多国間主義の将来」 2017年6月5日
- 田瀬和夫 玉川模擬国連大会「児童労働問題研修会（前日講演会）」 2017年2月4日

**Franklin Delano Roosevelt**  
**State of the Union 1941 - 6 January 1941 (Excerpt)**

In the future days, which we seek to make secure, we look forward to a world founded upon four essential human freedoms.

The first is freedom of speech and expression--everywhere in the world.

The second is freedom of every person to worship God in his own way--everywhere in the world.

The third is freedom from want--which, translated into world terms, means economic understandings which will secure to every nation a healthy peacetime life for its inhabitants--everywhere in the world.

The fourth is freedom from fear--which, translated into world terms, means a world-wide reduction of armaments to such a point and in such a thorough fashion that no nation will be in a position to commit an act of physical aggression against any neighbor--anywhere in the world.

That is no vision of a distant millennium. It is a definite basis for a kind of world attainable in our own time and generation. That kind of world is the very antithesis of the so-called new order of tyranny which the dictators seek to create with the crash of a bomb.

To that new order we oppose the greater conception--the moral order. A good society is able to face schemes of world domination and foreign revolutions alike without fear.

Since the beginning of our American history, we have been engaged in change--in a perpetual peaceful revolution--a revolution which goes on steadily, quietly adjusting itself to changing conditions--without the concentration camp or the quick-lime in the ditch. The world order which we seek is the cooperation of free countries, working together in a friendly, civilized society.

This nation has placed its destiny in the hands and heads and hearts of its millions of free men and women; and its faith in freedom under the guidance of God. Freedom means the supremacy of human rights everywhere. Our support goes to those who struggle to gain those rights or keep them. Our strength is our unity of purpose. To that high concept there can be no end save victory.

フランクリン・ルーズベルト  
一般教書演説 1941年1月6日（抜粋）

われわれが確実なものとすることを追求している将来の日々に、われわれは人類の普遍的な4つ自由を土台とした世界が生まれることを期待している。

第1は、世界のあらゆる場所での言論と表現の自由である。

第2は、世界のあらゆる場所での、個人がそれぞれの方法で神を礼拝する自由である。

第3は、欠乏からの自由である。それは、世界的な観点で言えば、あらゆる国に、その住民のための健全で平和時の生活を保証するような経済的合意を意味する。

第4は、世界のいかなる場所でも、恐怖からの自由である。それは世界的な観点で言えば、いかなる隣国に対しても、物理的な侵略行為を犯すことがないような形で、世界中の軍備を削減することを意味する。

これは、千年先の幻想ではない。われわれの時代と、この世代のうちに実現可能な形の世界の、明確な基盤である。そうした種類の世界は、独裁者たちが爆弾の衝撃によって作り上げようとしているいわゆる専制政治の新秩序のまさに対極にある。

そのような新秩序に対して、われわれはもっと偉大な概念で対抗する。それは道義をわきまえた秩序である。優れた社会は、世界支配の企てにも海外での革命にも、等しく恐れることなく対峙することができる。

米国の歴史が始まった時から、われわれは変化を推し進めてきた。永続的な平和革命に携わってきた。それは、着実に進む革命であり、状況の変化に静かに適合してきた。そこには強制収用所も、逃走を阻む生石灰の入った溝もなかった。われわれが追求する世界秩序は、自由な諸国が、友好的な文明的社会の中で力を合わせる協力関係なのである。

米国は、その運命を、何百万人もの自由な男女の手と頭と心に託してきた。そして、神の導きの下で、「自由」に信頼を託してきた。自由とは、あらゆる場所で人権が至上であることを意味する。そうした人権を獲得したり維持したりするために苦闘する人々に、われわれは支援の手を差し伸べる。われわれの強みは、われわれの目的の一致である。その崇高な概念には、勝利以外の終わりはないのである。